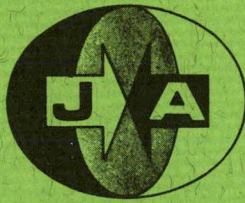


第34回

# 日米学生会議

報告・エッセイ集



1982

人間の尊厳を求めて

— 相互理解と全地球的協力 —

日米学生会議実行委員会編

## ま え が き

第34回日米学生会議は、日米関係が近年になく注目される中で、約1ヶ月間、アメリカで開催されました。

日米学生会議は、企画、運営、その他全てが学生による自主運営によって創り上げられていきます。特定の利害関係を持たない学生が、これからも国際社会において大きな役割を果たすであろう日米両国、更にはこれを基盤に全地球的な諸問題を討論することにより相互理解を深め、社会に働きかけていこうとするものです。これは将来、参加学生にとり必ずや有意義な糧となることでしょう。

さて、1982年夏の第34回会議は、国籍も文化背景も価値観も異なる88名の学生の共同生活の場であり、またそれは「自分」を磨くすばらしい自己啓蒙の場でもありました。この会議を通して、私たちは様々なことを学ぶことができましたが、中でも異文化間コミュニケーションの難しさをじかに認識させられました。しかし、それゆえに互いに理解しあえた時の喜びはひとしおでした。今回の会議で得られた貴重な体験は、これから社会に出て21世紀を担っていく私たちの中でいつまでも生きつづけることでしょう。

この小冊子は、私たちの会議がたどった軌跡を再現しようとした試みです。私たちが、この夏何を見、感じ、語り、そして今、何を考えているかを、1人でも多くの方が垣間見て下さり、日米学生会議をより深く御理解頂くための一助となれば、この上ない喜びです。

最後に、第34回日米学生会議の参加者を代表して、会議開催にあたり御援助下さった方々、御助言を与えて下さった方々に、この場をお借りして、心から感謝の意を表させていただきます。

第34回日米学生会議実行委員長

岩 永 聡

~~~~~\* \* \* ~~~~~\* \* \* ~~~~~\* \* \* ~~~~~\* \* \* ~~~~~\* \* \* ~~~~~\* \* \* ~~~~~\* \* \* ~~~~~

なお日米学生会議の公式報告書は英文で発行されていますが、本書はその翻訳ではなく、日本語で読める報告・エッセイ等の必要性を感じた日本側の参加者が、独自に編集したものです。したがってアメリカ側参加者の原稿は載っておりません。

# 目 次

|                         |                    |    |
|-------------------------|--------------------|----|
| まえがき .....              | 岩 永 聡 .....        | I  |
| 目 次 .....               |                    | II |
| 第34回日米学生会議を回顧して .....   | 板 橋 並 治 .....      | IV |
| 第1部：会議の概略               |                    |    |
| 第34回会議の構成 .....         |                    | 3  |
| 日 程 .....               |                    | 4  |
| 第34回会議参加者 .....         |                    | 6  |
| 第2部：会議報告                |                    |    |
| 分 科 会                   |                    |    |
| ライフサイエンス .....          | 松 浦 淳 .....        | 8  |
| 文化と伝統 .....             | 樋 口 尚 子 .....      | 11 |
| 教育と社会 .....             | 河 合 雅 美 .....      | 16 |
| エネルギー・資源・環境 .....       | 山 本 恵 子 .....      | 21 |
| 科学技術と社会 .....           | 渡 辺 聡 明 .....      | 25 |
|                         | 田 中 智 之 .....      | 25 |
| 人権問題 .....              | 日 馬 由 美 子 ほか ..... | 28 |
| 国際関係 .....              | 八 木 健 .....        | 32 |
| 第三世界 .....              | 窪 田 祐 司 .....      | 37 |
| 社会における男女の役割 .....       | 岩 川 倫 子 .....      | 42 |
| 企業問題 .....              | 村 田 隆 ほか .....     | 46 |
| 社会変動 .....              | 藤 井 薫 .....        | 51 |
| シンポジウム・その他              |                    |    |
| ソーシャル・チェンジ・シンポジウム ..... | 河 合 雅 美 .....      | 55 |
| 平和シンポジウム .....          | 西 岡 浩 美 .....      | 57 |
| 第三世界シンポジウム .....        | 藤 井 薫 .....        | 60 |
| 社会における男女の役割シンポジウム ..... | 木 村 明 子 .....      | 61 |
| ジャパンナイト・アメリカナイト .....   | 西 田 尚 弘 .....      | 64 |

第3部：エッセイ

|                                       |             |     |
|---------------------------------------|-------------|-----|
| JASCの「第一印象」 .....                     | 井伊雅子 .....  | 67  |
| ファインダーの向こうのJASC .....                 | 岩島牧夫 .....  | 68  |
| 忘れがたき人々 .....                         | 高橋勤 .....   | 71  |
| JASCからの贈り物 .....                      | 大三輪洋子 ..... | 74  |
| 「フレンドリー」な人たちの孤独 .....                 | 藤井真 .....   | 75  |
| JASCと私 -私にとっての相互理解- .....             | 石津達也 .....  | 78  |
| 82夏 アメリカで感じたこと .....                  | 滝田祥子 .....  | 80  |
| Another Four-Letter Word "JASC" ..... | 萩原浩幸 .....  | 82  |
| General American から Real Friendへ      |             |     |
|                                       | 佐敷尚子 .....  | 84  |
| 最後のホームステイ .....                       | 桑和彦 .....   | 86  |
| かつちゃんへの手紙 .....                       | 赤津晴子 .....  | 87  |
| JASCの思い出 -心にかぶまゝに- .....              | 清川貴子 .....  | 88  |
| JASCについて 今まで誰も書かなかったこと                |             |     |
|                                       | 山脇啓造 .....  | 91  |
| 日米学生会議における国際教育の連繋と統合 .....            | 広里恭史 .....  | 94  |
| 平和宣言 .....                            |             | 104 |
| 主催・後援・賛助団体・賛助者 .....                  |             | 105 |
| 第35回日米学生会議のお知らせ .....                 |             | 107 |

## 第34回 日米学生会議を回顧して

国際教育振興会理事長  
日米学生会議創立委員

板橋 並治

第34回日米学生会議は一昨年同様ワシントンで開かれたが、私は日本側主催団体、国際教育振興会を代表し、又第1回会議創立委員の一人として、開会式に参列し、会議の実現に最善を尽した米側学生実行委員諸君と、彼らに強力な支持を与えてくれたJASC Inc. 及び他の支援団体に対して感謝の意を述べる機会もあった。

開会式で代表諸君の前に立つと、いつも会議の起源と経緯について話さざるを得なくなる。第1回会議以来、二度の中断と復活から今日まで、会議の継続に微力を尽して来た故か、私はこの会議に強い愛着と誇りを持つようになったらしい。

代表諸君も知っているように、第1回会議は1933年の春頃から、各大学のESSの有志によって準備が始められた。1931年の満州事変以来悪化しつつあった米国の対日感情を和らげるため学生として出来ることは、米国の大学生50名を招き、卒直な意見の交換によって相互理解を図ることであると考へ、翌年夏、日米学生会議を開くことにし、直ちに準備を始めた。

1934年の春、米国学生50名を誘致する目的で、学生親善使節として4名の委員が派遣された。その結果、99名の代表及びオブザーヴァー(大学教授及び夫人22名)の参加を得、その夏開かれた第1回会議は予想外の大成功を収めた。

会議終了後、米側代表及びオブザーヴァー

は満州までの研修旅行に出たが、その帰途の釜関連絡船上で米側代表が会合し、日本側学生委員の創意と努力に報いるため、第2回会議を米国で開くことに決定し、実行委員を選出して帰国した。

斯して第2回会議は1935年夏、ポートランドのリード・カレヂで開かれ、爾來会議は日米両国で毎年交互に開かれることになった。而し、1941年の第8回会議が米側で準備完了していたにも拘らず、日本側代表がヴィザを拒否され、残念ながら会議は中断の已むなきに至った。

終戦2年目の1947年に会議は復活されたが、日本が占領下にあり、米国から代表を呼ぶことが出来なかった為、第8回から14回までの会議は戦前と異なる型で、即ち毎年日本だけで開かれた。1954年の第15回会議は、戦後初めて米国のコーネル大学で開かれたが、経済的理由で日本側の参加者は僅かに15名に過ぎなかったので、学生実行委員は「日米の会議は第15回で打ち切り、国際学生会議を開くことに決定した」ので、日米学生会議は再び中断されることになった。

而し、第1回会議創立の30周年に当る1964年に、第16回会議としてリード・カレヂで復活されて以来、会議は今日まで続いている。学生会議としては、最長の歴史を誇り得るものといえるだろう。

会議の総合テーマ「Furthering Human Integrity Through Mutual Under-

standing and Global Cooperation」を読んだが「Human Integrity」の意味を正確に把握できず、代表諸君に何を話すべきかについて大いに迷った。辞書によると「Integrity」は「誠実、完全、無欠、無傷、保全」の意味であり、そのどれを「Human」と組み合わせても十分に納得できなかつたからだ。

日本側実行委員の翻訳「人間の尊厳」というのが当を得ているような気もしたが、私は「人間が人間として、人間らしく存在すること」と解釈して、話を進めることにした。

「人間が人間らしく存在すること」を阻んでいる最大の力は戦争であり、止めどなく進んでいる軍拡競争が、結局「力の均衡体制」を破綻に追い込み、戦争の危険を拡大している現状を良く考え、代表諸君がこの点についてじっくり討議する事を願っていた。国連のデ・クエラル事務総長が第2回国連軍縮会議に提出した報告を紹介したのは、このような考えからである。

同報告は私が日頃知りたと思っていた点、即ち地球資源と軍備の関係などについて触れ、加速度を早めている軍拡競争は環境を破壊し、減少しつつある世界の資源を浪費していることを次の様に指摘している。

- (1)世界の石油の5乃至6%、銅の11%、鉛の8%は軍事目的に消費されている。(2)欧州の総労働人口に匹敵する6千万人が軍事関係の仕事に従事している。(3)科学者及び技術者の20%が軍事関係の仕事についている。(4)1980年度に軍事研究及び兵器開発に使われた金額は350億弗に達する。これは科学的研究及び開発費の総額の25%に及ぶ。(5)世界の軍事費は1900年当時の30倍に

なり、1980年度には5千億弗に達している。軍事費が年平均3.2%の割合で増え続けると今世紀末には年平均1兆弗の巨額になる。

以上の数字はいかに世界の国々が軍事問題を重視しているかを示しているが、同報告は更に、戦争は人命を奪うだけでなく、自然環境とくに農地を破壊し、地球の沙漠化に拍車をかけている点を挙げ、その実例として、ヴェトナム戦争で使われた枯葉剤はマングローブ林を1500平方キロ米に亘り壊滅させ、1万5千平方キロ米に亘り損傷したが、その回復は遅々として進んでいないという。

又もし核兵器が北半球で使われたら、放射性物質による死が南半球まで拡がり、又上空のオゾン層の破壊によって皮膚ガンなどの病気が蔓延し、人類の健康が脅かされ、壊滅への道を辿るだろうと述べ、次の様な行動をとることを勧告している。

- (1)科学研究機関を調査し、それらの協力体制を強化する。(2)環境保全の観点から、重要な地域を非武装化する。(3)宇宙空間の軍事的使用を禁止する。(4)核兵器使用を全面的に禁止するための交渉を開始する。(5)核兵器凍結地域を設定する。

以上の諸点を叩き台にして、代表諸君が私の希望通り討議してくれたかどうかは、会議の報告書が出来るまで、残念乍ら知る由もない。而し「明日を担う」代表諸君は、軍拡競争が人類を危険にさらしていることをよく知っている。従って諸君は今後ともこの問題を真剣に検討し、人類を戦禍から救う道を見出して貰いたい。

今夏の会議で大変嬉しく感じたことが二三ある。1964年の第16回会議以来米国で開かれた会議の中で、第34回会議が最もよ

く組織されていたという印象を受けたことである。これは米側実行委員の努力によるものであるが、それを可能にした原動力は J A S C Inc. である。

戦後の米国での会議の中で、余りよく組織されていないものがあつたのは、日本の I E C のような主催団体がなく、学生委員が毎年交替するので継続性がなく、又募金を受ける主体がなかつた為である。

この欠陥を除くため、1972年のハーヴァード大学での会議の後、ニューヨークの Japan Society を訪れ、学生委員の連絡、会議資料の保存及び募金受け入機関としての役割をお願いした処、引き受けて下さつたので、その後の米国での会議は順調に開かれた。

而し1978年頃 Japan Society から、その役割を辞退したいという申し入れがあり、一時ワシントンの U S -Japan Culture Center に肩代りして頂いたが、1979年戦前の米側代表 Schmidt 氏の尽力で J A S C Inc. が組織され、同年9月非営利法人として米国々税庁から免税の資格を与えられ、本格的に活動することになった。

一昨年同様、開会式の晩に国務省で代表歓迎会が開かれたのは、嘗て国務省に勤務したことのある Schmidt 氏の尽力によるもので

ある。この事実は日米学生会議の存在価値が国務省に認められたことを意味し、会議の将来がゆるぎない基盤の上におかれることになつたとも考えられ、会議の関係者一同にとり、誠によろこばしいことである。

もう一つ嬉しかつたことは、国務省での代表歓迎会で、戦前戦後の O B 数名と会えたこと、又ニューヨークでは48年振りに第一回会議の米側 O B と会えたこと、更にロスアンゼルスでは同じく48年ぶりにサンフランシスコに住む米側 O B と電話で話したことであるが、その時の「学生会議が僕の一生の在り方を変えた」という彼の言葉は、私に大きな感激を与えた。

第1回会議以後、太平洋戦争でお互いに敵味方の環境に置かれ、50年近くも会う機会を持たなかつた者が互いに昔を語り合つたが、学生時代に結ばれた友情の絆の強さを思い知らされ感慨無量であつた。茲に会議の最も大きな意義があるのではなからうか。

会議創立50周年に当る1984年に、日米合同 O B 会を開こうという声があつている。米側 O B は米国で、日本側 O B は東京でと考えている。両者が合意できめた場合は、時期をずらし、東京と米国のどこかで開くことになるかもしれぬと考えている。

第 3 4 回

日 米 学 生 会 議

報 告 ・ エ ッ セ イ 集





## 第 1 部

# 会 議 の 概 略

## 第 3 4 回 会 議 の 構 成

第 3 4 回日米学生会議は「人間の尊厳を求めて—相互理解と全地球的協力—」という総合テーマの下に行われた。平和が維持され、人権が擁護された社会こそ「人間の尊厳」が守られた社会であると考え、それを達成するには、相互理解から始め、全人類普遍の立場に立つことが必要であると考えたわけである。

本会議に向けて、日本側は 2 か月余りの準備期間を持った。

本会議の討議の中心として、11 の分科会が設けられた。すなわち、「ライフサイエンス」、「文化と伝統」、「教育と社会」、「エネルギー・資源・環境」、「科学技術と社会」、「人権問題」、「企業問題」、「国際関係」、「社会における男女の役割」、「社会変動」そして、「第三世界」である。

各分科会は、討論に現実的な視野を盛り込むために、「野外研修」(Field Trip)を行った。これは、分科会単位で、議題に関連する団体、人物、施設、機関などを実際に訪れるものである。

全体の活動及び討議として、「講演」、

「シンポジウム」、「家庭滞在」が設けられた。講演は、バリッシュ日米協会理事長、田中常雄・ロサンゼルス駐在総領事、溝口道郎・駐米特命全権公使、大河原良雄・駐米大使、リチャードソン・YFU 会長、ストッセル国務次官、セルグマン・国務省東アジア太平洋局日本部長、ジャクソン上院議員、シェーファー・ボルチモア市長、本野盛幸・ニューヨーク駐在総領事、苜米地俊博・米国三菱商事会社取締役社長、明石康・国際連合広報担当事務次長らによって行われた。シンポジウムは、「社会変動」、「平和」、「第三世界」、「社会における男女の役割」の計 4 つが設けられた。家庭滞在は、日本側のみ、ロサンゼルスとボストンとで行った。

会議中は、分科会を中心とする討論はもちろんだが、両国学生間の精神的・文化的交流も盛んで、多くの友情が生まれた。JAPAN NIGHT・AMERICAN NIGHT では、両国学生が、各々の文化を紹介し合い、楽しいひとときを過ごした。

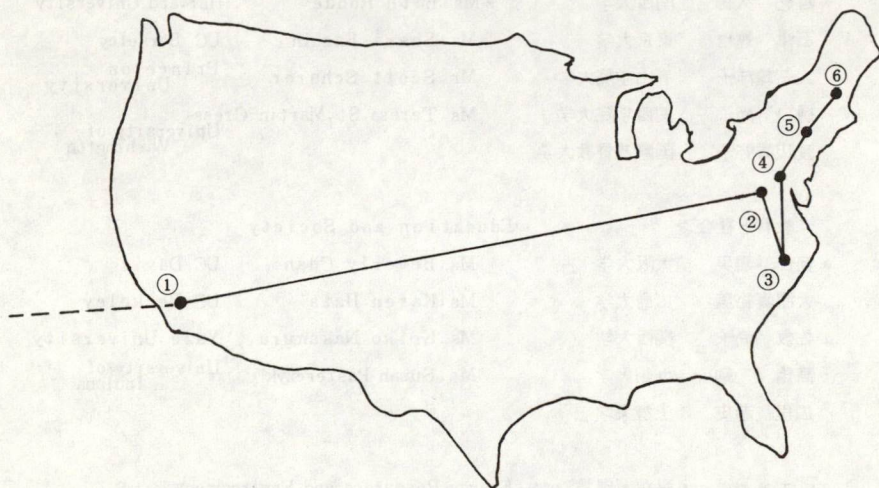
## 日 程

会議期間 1982年7月23日から8月20日まで

|     |                 |        |
|-----|-----------------|--------|
| 日 程 | 5月15日(土)・16日(日) | 合同合宿   |
|     |                 | 準備期間   |
|     | 7月21日(水)～23日(金) | 最終合同合宿 |

|          |                                       |
|----------|---------------------------------------|
| 7月23日(金) | 日本側代表ロサンゼルス到着①/家庭滞在                   |
| 24日(土)   | 家庭滞在                                  |
| 25日(日)   | ジョージワシントン大学(ワシントンD.C.)へ移動②            |
| 26日(月)   | 開会式(YFU)/国務省訪問                        |
| 27日(火)   | 分科会討論                                 |
| 28日(水)   | 国会議事堂訪問                               |
| 29日(木)   | 社会変動シンポジウム                            |
| 30日(金)   | 分科会討論                                 |
| 31日(土)   | 分科会討論/自由行動                            |
| 8月 1日(日) | デューク大学(ノースカロライナ)へ移動③                  |
| 2日(月)    | 分科会討論/ジャパナイト                          |
| 3日(火)    | 分科会討論/中間反省会                           |
| 4日(水)    | 分科会討論/アメリカナイト                         |
| 5日(木)    | 分科会討論/平和シンポジウム                        |
| 6日(金)    | ボルチモアへ移動④                             |
| 7日(土)    | ニューヨーク大学へ移動⑤/自由行動                     |
| 8日(日)    | 野外自由研修                                |
| 9日(月)    | 分科会討論                                 |
| 10日(火)   | 第三世界シンポジウム                            |
| 11日(水)   | 国連訪問/実行委員選挙                           |
| 12日(木)   | ウェルズリー大学(ボストン)へ移動⑥/<br>男女の役割フォーラム/反省会 |
| 13日(金)   | 分科会討論(総括)/報告書作成                       |
| 14日(土)   | 自由行動/サヨナラパーティー                        |
| 15日(日)   | 閉会式/アメリカ側代表 解散                        |
| 16日(月)   | 日本側代表 ボストン地区家庭滞在                      |
| 17日(火)   | //                                    |

- 8月18日(水) ニューヨークへ移動  
19日(木) ニューヨーク発  
20日(金) 成田着・解散



## 第 3 4 回 会 議 参 加 者

|                                                                                                                         |                                                                                                                                                                                                                        |
|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>&lt;ライフサイエンス&gt;</p> <p>* 赤林 朗 東京大学</p> <p>赤津 晴子 聖心女子大学</p> <p>井伊 雅子 国際基督教大学</p> <p>桑 和彦 東京大学</p> <p>松浦 淳 北海道大学</p>  | <p>Bioethics</p> <p>* Ms. Susan Asomaning Yale University</p> <p>Mr. Andrew Inforsino Amherst college</p>                                                                                                              |
| <p>&lt;文化と伝統&gt;</p> <p>* 西芝 久徳 関西大学</p> <p>石津 達也 東京大学</p> <p>大三輪洋子 青山学院大学</p> <p>樋口 尚子 関西学院大学</p> <p>渡辺香弥子 国際基督教大学</p> | <p>Culture and Tradition</p> <p>* Ms. Beth Rohde Harvard University</p> <p>Ms. Shari Bashin UC Berkeley</p> <p>Mr. Scott Scharer Princeton University</p> <p>Ms. Teresa St. Martin-Cress. University of Washington</p> |
| <p>&lt;教育と社会&gt;</p> <p>* 河合 雅美 大阪大学</p> <p>大浦真裕美 広島大学</p> <p>佐敷 尚子 関西大学</p> <p>高橋 勤 九州大学</p> <p>広里 恭史 上智大学</p>         | <p>Education and Society</p> <p>Ms. Beverly Chan UC Davis</p> <p>Ms. Karen Hata UC Berkeley</p> <p>Ms. Keiko Nakamura Yale University</p> <p>Ms. Susan Pasterczyk University of Indiana</p>                            |
| <p>&lt;エネルギー・資源・環境&gt;</p> <p>* 藤井 真 東京大学</p> <p>下川真樹太 東京大学</p> <p>山本 恵子 聖心女子大学</p>                                     | <p>Energy, Resources and Environment</p> <p>Mr. Timothy Sullivan Boston College</p> <p>Mr. Brian Bray University of Oregon</p> <p>Ms. Laurie Freeman UC Berkeley</p> <p>Ms. Lucille Ito UC Berkeley</p>                |
| <p>&lt;科学技術と社会&gt;</p> <p>* 渡辺 聡明 東京大学</p> <p>許 昭苑 東京大学</p> <p>田中 智之 東京大学</p>                                           | <p>Engineering, Technology and Society</p> <p>* Mr. Brad Hall Duke University</p> <p>* Mr. Steve Sorger N. J. Institute of Technology</p> <p>Mr. Ken Anderson Brigham Young University</p>                             |

<人権問題>

Human Rights

|         |         |                      |                                 |
|---------|---------|----------------------|---------------------------------|
| * 日馬由美子 | 成城大学    | ** Ms. Dorothy Brown | North Carolina State University |
| 岸本 浩    | 東京大学    | Mr. James Bradley    | Lewis and Clark                 |
| 村松 尚子   | 上智大学    | Ms. Karen Lowry      | Seattle University              |
| 森 勝弘    | 京都外国語大学 | Ms. Yoko Yoshikawa   | Yale University                 |

<企業問題>

International Business

|         |       |                     |                     |
|---------|-------|---------------------|---------------------|
| * 吉田 直人 | 慶応大学  | Mr. Patrick Morris  | American University |
| 西田 尚弘   | 慶応大学  | Mr. Linton Davis    | Texas Wesleyan      |
| 村田 隆    | 関西大学  | Ms. Jean Spradley   | Texas Wesleyan      |
| 物部 敦    | 同志社大学 | Mr. Andrew Wylegala | Cornell University  |

<国際関係>

International Relations and Politics

|         |         |                        |                      |
|---------|---------|------------------------|----------------------|
| * 山脇 啓造 | 東京大学    | * Ms. Joni Hiramoto    | Harvard University   |
| 土川 元    | 一橋大学    | * Mr. Robert Maitland  | UCLA                 |
| 福田 伸生   | 国際基督教大学 | Ms. Valarie Mark       | UC Berkeley          |
| 八木 健    | 一橋大学    | Mr. Terrance Tehranian | Princeton University |
|         |         | Mr. Robert Uriu        | UC Davis             |

<社会における男女の役割>

Roles of Men and Women in Society

|         |      |                            |                      |
|---------|------|----------------------------|----------------------|
| * 益田 栄壮 | 広島大学 | * Mr. Tsunehiko Yanagihara | Amherst College      |
| 木村 明子   | 上智大学 | Ms. Susan Cho              | Smith College        |
| 清川 貴子   | 山形大学 | Ms. Kim Robinson           | Creighton University |
| 岩川 倫子   | 慶応大学 | Ms. Sheryl Wilkins         | Harvard University   |
|         |      | Ms. Carrie Zepeda          | Stanford University  |

<社会変動>

Social Dynamics

|         |         |                      |                        |
|---------|---------|----------------------|------------------------|
| ** 岩永 聡 | 国際基督教大学 | * Mr. Stuart Souther | Duke University        |
| 西岡 浩美   | 大阪大学    | Ms. Julia Haven      | Amherst College        |
| 藤井 薫    | 関西学院大学  | Ms. LeAnn Runstrom   | University of Illinois |
|         |         | Mr. Gary Wanser      | Creighton University   |

<第三世界>

Third World

|         |         |                       |                          |
|---------|---------|-----------------------|--------------------------|
| * 菅原 鈴香 | 国際基督教大学 | * Ms. Jean Sullivan   | University of Buffalo    |
| 岩島 牧夫   | 東京大学    | Ms. Stephanie Bergman | University of Pittsburgh |
| 窪田 祐司   | 慶応大学    | Mr. Ken Bonds         | University of Arkansas   |
| 滝田 祥子   | 学習院大学   | Mr. Douglas Hillary   | UCLA                     |
| 萩原 浩幸   | 東京大学    |                       |                          |

## 第 2 部

### 会 議 報 告

## ライフサイエンス (Bioethics)

北海道大学 5 年 医学

松 浦 淳

Bioethics のテーブルにはアメリカ側から  
スーザン・アソマニング (エール大学、コー  
ディネーター)、アンドルー・インフェルシ  
ノ (アムハースト大学)、日本側から赤林朗  
(東京大学、コーディネーター)、桑和彦  
(東京大学)、赤津晴子 (聖心女子大学)、  
井伊雅子 (国際基督教大学)、松浦淳 (北海  
道大学) の計七名が参加した。

Bioethics は日本語では主に生命倫理と訳  
され、最近著しく発展を遂げつつある生命科  
学と一般社会倫理との間に生じた軋轢解決を  
目指している。Bioethics は、およそ人間の  
生命に関係するあらゆる問題を考究し、その  
範囲は極めて広い。今回の分科会参加者各自  
の取り上げた項目も、遺伝子工学、堕胎、癌  
宣告と死、安楽死、心身症、自殺など多岐に  
渡っている。それら個々の内容について短い  
説明を繰り返すことには表面的記述に陥る危  
険を伴うので (それらの詳細については英文  
報告書を参照して頂きたい) この場では、フ  
ィールドトリップ、インターテーブル、それ  
して今回の会議の総合テーマであった人間の尊

厳を視野に入れつつ概括的報告を試みようと思  
う。

フィールドトリップとして、ワシントンで  
は堕胎の権利を守るための宗教者連合という  
圧力団体と NIH (National Institute of  
Health) を、ノースカロライナではデューク  
大学医学部附属病院を、また、ニューヨーク  
ではベルビュー病院を訪れた。NIH 及びデ  
ューク大学では講師を招いて、それぞれ癌宣  
告と科学史 (特に科学の急激な発達と社会と  
の危機的關係について) の講演をして頂いた。  
個人的にはあるが、メンバーの幾人かは、  
ジョージワシントン大学医学部並びに附属病  
院を、そしてハーバード大学医学部関連病院  
を見学する機会を得た。日本の病院と比較し  
て特に気づいた点は二つある。まず第一に、  
設備が最先端を行っているということ、中  
でもコンピューターの利用が常識になっている  
ことであった。ボタンひとつで、患者の記録  
の全てを画面に映し出し、また治療方針をコ  
ンピューターを使って探り出すこともできる。  
物質文明のある種の開花とも言えた。そして

第二に、捨て切れぬ精神文明としてか、病院内にチャペルと牧師が存在して、患者の心理的側面へのケアに当たっていたことであった。NIHとハーバードの病院内には、患者のためにいつでも開放されている教会があったが、これはアメリカにある他の大きな病院についても言えることらしい。机一個にコンピューター（の端末機）一個と思われる程の科学の発展も、教会の十字架を不必要なものとはしないという事実、ここにBioethicsの発祥せざるを得ない下地を見たような気がした。

インターテーブルは、「文化と伝統」及び「社会における男女の役割」の分科会と行なった。前者とは自殺と死について、後者とは墮胎について、日米間の歴史的社会的背景を斟酌しながら話し合った。Bioethicsの分科会の中で話し合っている時には、日本人米国人ということは余り問題とはならず、キリスト教徒の立場から、医学生生の立場から、そして最終的に愛することと働くことを欲し、平和な社会を求めている「同じ」人間としての立場からというようにして倫理を話し合うことができたのだが、インターテーブルでは日米間の常識の隔たりが鮮明となった。とは言え、日米間の社会通念の乖離が将来、漸減してゆくのではないかという感触を得たのも事実である。（特に墮胎に対する考え方は一致する点が多かった。）実社会という文脈の中に入れた時に顕著となる、日本人と米国人との間に横たわる生と死に関する理解齟齬は、私達に国を越えたBioethics確立の難しさを改めて教えてくれた。

最後に、「人間の尊厳を求めて」というテーマとの関連から、この分科会を描いてみよう。「人間」とは何か？「尊厳」とは何か

？極言してしまえば、Bioethicsはその二つの問いを考えることに他ならない。受精時、受精後三カ月、六カ月、出産時、出産後三日等々、いつからひとつの生命を「人間」として扱うか、墮胎や重症奇形児の安楽死についての論議の際には、これが大問題となった。また、人間はいつから人間ではなくなるのか？社会的死の時か、心理的死、生物的死、脳死、植物人間への転落の時か？これらについても、安楽死討議の折に、長い時間を割かざるを得なかった。更に、「尊厳」についてはどのようなコンセンサスが得られるだろうか。植物人間になったら「尊厳死」を望むという人がいるかと思えば、いかなる苦悩や困難な状況にも耐えて生きぬくことこそが、人間の「尊厳」だという人もいる。同じ言葉も使う人の立場如何んで、全く反対の意見に利用されるというのが事実である。蓋し、Bioethics的な問題へのアプローチの仕方は、人間の尊厳というものの輪郭を明らかにするために優れた試金石の役割を果たすものであった。

Bioethics というものが、死者のためではなく生者のための倫理である以上、生存の保証が得られなければお話にならない。シンポジウムで扱われた「平和」そして「第三世界」も、その意味ではBioethicsの領域外のものではない。戦争は端的に人間の生存の否定であり、第三世界の人々を悩ませている飢餓と貧困は生存への脅威以外の何物でもない。人間の尊厳のベースラインは、即ち、人間の生存を求めるということになる。生存のためには平和が必要であり、物質的にも精神的にも豊かな社会が必要である。そのためにもこそ、教育や資源・環境、経済・国際関係等といっ



「ライフサイエンス」の参加者  
筆者は左端

た分科会で扱ったテーマに対する検討が必須となっている。Bioethicsの分科会は、特に「生存」の境界領域にある事例を取り上げたと言える。それらの問題は勿論、短期間の話し合いによって基本的な合意さえ得るのが不可能であったし、また話し合いの中でも私達は幾度か、「結論は得られないにしろ意見を交換することに意義を認めよう」と確認し合っては、議論を続けてゆくのがやっとだった。ただし、生存への讃歌という点では私達七人の意見は一致していたと言える。生と死について話し合うことは、人種や国籍を離れたある意味での裸の人間の付き合いを引き起こし、私達七人は最終極めて友愛に溢れた関係を楽しむことができたのだから。 — 人間の尊厳のセカンドステップは、そうした友情や愛情の中に生きることであろう。人間は、犬や猫ではない。単なる生存とその維持ならば、人間以外の動物達の方が成功しているとさえ思われる。しかし、人間は友情や愛情の中に生きることがを欲する。人間の尊厳も、それらな

しには確立し得ないだろう。墮胎や安楽死といった問題が複雑になるのも、対象である人間への愛情を断ち切ることが（特に当事者や家族にとって）困難だからであろう。

人間の尊厳を実現するためのサードステップは、一言で表現すれば労働（奉仕）に存る。生と愛とを具体的に保証する社会（世界）を建設するためには、全ての人間がその能力を十分に活かして働かなくてはならない。その社会に於いてこそ、生存、愛情、個性の実現といった、人間の尊厳の基本が達成されるだろう。分科会のメンバーのうち五名は、医学部または医学進学課程のものであり、残り二名の者も含めて、将来私達の手にする仕事の遂行に於いて、Bioethicsの理念を生かすように努めることだろう。（蛇足になるが、労働を失うことが人間の社会的な死、愛を失うことは心理的な死、そして生存を失うことが生物的な死に、それぞれ対応している。）

かつてデカルトは、「我思う、故に我在り」という命題から懐疑論を打破し、新しい哲学



を打ち立てようとした。同様に Bioethics は、「人間の生存は絶対的善（目的）である」という命題から新しい倫理を現在模索している。今回の学生会議に於いては、遺伝子工学や癌宣告などについて、私達の意見は大きな隔たりを残したまま終会した。しかし、それは決して不都合なことではない。人間は死ぬということ（死を考えることは、己れの生を真剣に生きることにつながる）、人間は愛するということ、人間は働くということ、それらを理解し、再確認した七人は、各自の人生の中で、この分科会での討論を活かしてゆくだろうし、これからも人間の尊厳について考え続

けてゆくことだろう。そのトップバッターとして、日本側のメンバーである赤津さんが、第35回JASC実行委員に選出され、Bioethics テーブルをコーディネートするという。来年の Bioethics テーブルを彼女が一層実り豊かなものにするということを私達は確信している。

最後に、この分科会を担当した日米双方のコーディネーター（二人とも極度に忙しい中で、最高の場を提供してくれた）、並びにインターテーブル、フィールドトリップの際に御世話して下さいました全ての方々に感謝の意を表明して、この報告の結びとしたい。

## 文化と伝統

関西学院大学4年 英米文学

樋口尚子

日米両国間は、政治、経済面で様々な問題を抱えている。それらは、多少なりとも、背景に存する国独自の思考形式—文化—に影響された結果生じたものであり、それゆえに解決が困難になっている面もある。

「文化と伝統」は、その“背景”を論ずる分科会である。上記のことを考え、今回、私達は、文化と国民性のつながり、異文化間交流のあり方の把握に努めた。ペーパーの内容は次の通りである。（発表順）

石津達也—真の相互理解とは

Shari Bashin —日本の庭園

Scott Scharer —1860年来の日米建築

樋口尚子—工地所有意識について

西芝久徳—言葉と文化の関連性

Teresa St. Martin-Cress

—日米文化類型学

Beth Rohde —人間の空間使用について

大三輪洋子—国際企業における日米コミュニ

ケーションギャップ

渡辺香弥子—反核運動の文化的相違

以下、野外研修、討論、そして、会議前後2回に渡って行なわれたアンケートの結果の概要である。

### I 野外研修

#### 1) Dr.Szaley との対談

私達のテーブルは、ワシントンDCで行なわれた、Institute of Intercultural Communication の、Dr.Szaley を招いての、相互理解の為の異文化の正しい認識に関

するディスカッションから始まった。自身、ハンガリー人であるDr. Szaleyが、異民族間の文化的違いを数量的に把握する方法を紹介した後、これに関係して、私達は、社会言語学上の問題について活発に意見を交した。同じ1つの単語から、異文化グループに属する人々が抱くイメージは、時として異なり、これが相互理解をさまたげる要因たりうる、というのである。この点は、その後のテーブル討論の中で、私達が、しばしば、実際に体験したことの一つであり、その意味で、Dr. Szaleyとの討論は、「文化と伝統」のテーブル討論の、またとない幕開けであったと言える。

## 2) Freer Gallery of Art

(Smithsonian Institution)

異文化に接することは、他の文化を理解する上で、ある意味では大きな意義を持つ。異文化の理解の一環として、私達は、ワシントンDCで、スミソニアン・インスティテューションの中の東洋博物館を訪れた。そこで、アメリカ各地で日本の伝統文化を講義してこられた清水義明氏に、館内を案内して頂いた。「美術館は、人々が可能なだけ多くの時間を気楽に過ごせる場所、また、開いていなければ何の意味もない場所である。」との考えから、清水氏は、一年中休みなしに美術館を開放されており、館内には、随所に大きな安楽いすをおかれたりしている。展示物は、日本のようにガラスで覆われたりしていない。

また、唯一人、表具師として一切の巻物、掛画、屏風などの修繕に従事しておられる方に会い、その驚くべき技術と精神を、私達は目のあたりにすることができた。

## 3) インディアン文化についての研究

私達は、Duke Universityでの一日、North Carolina州立、Commission of Indian Affairsから、2人の講師(Sally Migliore, Larry Janes)を招いて、アメリカインディアンについて学ぶ機会を得た。スライドで、インディアンに関する一般の説明、インディアン迫害の歴史を観た後、アメリカ大陸各地に散らばる種々のインディアン、今なお残る、インディアンと非インディアン間の心理的・社会的壁、インディアン社会の問題(閉鎖性、内部での軋轢、文化維持の困難さ)についてQ & Aの形で説明していただいた。それらを通して、私達は、インディアンが独自の文化を持つがために、アメリカ社会内で不利な立場に置かれているという現状を知り、多文化共存の困難さを学んだ。

## 4) 演劇「The Dining Room」

アメリカ日常生活の一場面をかいま見るため、私達は、演劇「The Dining Room」をニューヨークの小さな劇場で見ることにした。このドラマはアメリカの様々なWASP家庭を扱っており、ダイニングルームを舞台に、6人の出演者が1シーンごとに違った場面をこなしていった。その内容は、平和な家庭の団らん、恍惚の老人をめぐる子供達の心労、浮気など日本でも多く話題ののぼる事柄ばかりで、それゆえに一層、アメリカ、日本の日常生活における考え方を比較することが容易であったように思われた。

## 5) China Town

最後の野外研修として、ニューヨークのChina Town 見学を予定していた私達は、China Town のSenior Citizens Coalition Centerの理事の方に案内をお

願いしていた。しかし、この時期、日中間では、教科書記述問題が起こっており、China Town の中国人の反日感情をあおることになるかもしれないとの危惧から、その方は案内役を辞退された。問題をそれほど深く考えていなかった私達にとっては、かなりショッキングな出来事であった。また、異文化間交流では、ある1つの問題が、すぐに、他の交流部分にまで支障をきたすようになることを知り、とても残念に思われた。

## II 討 論

### 1) 総合テーマと「文化と伝統」の関連性

今回の学生会議の総合テーマは、相互理解と全地球的協力である。分科会討論の最初に私達は、JASCにおいて文化と伝統について話しあう意義を総合テーマと絡めて考えることにした。相互理解は、言語、マスメディア、政策などによって容易に妨げられる。これら阻害要因は、文化が背景となって生み出されるものである。すなわち、相互理解を進める第1段階として、文化・伝統を深く、総

合的に知ることがあるのではないだろうかというようになった。

### 2) 芸 術

国土面積の差という日米両国の決定的差異が芸術にもたらす影響を、双方の造園技術と建築様式にみた。それらを基に、次の2点が主に話しあわれた。a) 両文化の融合性について。日本技術を、そのままアメリカに導入し得るかどうか。これは主に造園技術について取り上げられた問題である。日本の造園技術の観賞点が狭い空間をより広く見せる所にあることを考えると、たとえ導入されたとしても、広い空間に慣れたアメリカ人の目には日本技術の特質は、なかなか理解しがたいのではないだろうかという意見が主流であった。b) 文化の国民性への影響について。国民性については、次の点でも話しあわれたことであるが、特に、芸術(建築)が与える影響をみた。この場合、プライバシーに対する考え方の強弱が、建築が生み出した国民性の顕著な例であると考えられ、その差異が話しあわ



「文化と伝統」の参加者  
筆者は前列中央

れた。

### 3) 国民性と社会

私達の討論の流れは3つのポイントに分けられる。a) 国民性の分類。“垂直・水平” “合わせ・選び” “親密さと距離の度合い” などの尺度を用い、国民性を理論的に区別し実例をあげてみた。例えば、日本社会の年功序列制とアメリカ社会の能力選抜制などである。これに関するペーパーはすべてアメリカ側から提出され、話しあいは、日本側が、それらに対して、実例を挙げてサポートするという形で進められた。b) 国民性の形成過程。歴史的側面と言語的側面からの解釈を試みた。歴史的解釈の場合は、土地執着の度合いの差という国民性の一つを捉え、宗教、政策などの要因を比較検討した。言語的解釈は、敬語の有無と影響、単語の裏の意味、友人間の呼称を考えることによって行なった。c) case study。国民性が違うと社会活動にどのような差を生ずるか2つの case study を行ってみた。1つは、在日外資系企業内での意思決定方法の差で、もう1つは、反核運動に参加する際の意志決定の差である。テーブルの最終段階と言うこともあって、ペーパーの内容に従うだけでなく、異文化間交流全般を主に考えてみた。テーブルの性格上、確固たる結論を出すことは不可能ではあったが、異文化間交流に対する問題意識を持つ姿勢をかなり養えたのではと思う。

### III アンケート結果

日米学生の対米対日意識が、JASCを通してどう変化したかを調査するため、会議の前後2回に渡ってアンケートを実施した。主な質問と結果は以下の通りである。(回収率、日本側100%、アメリカ側55%)

以前にアメリカへ行ったことのある日本人36%、日本に來たことのあるアメリカ人76%であることから考えて、日本のことを普通以上に知っているアメリカ人が調査の対象となったことがわかる。また、今回の会議がアメリカで開かれたことから、その影響は日本人側に大きく現われるのではと考えられた。実際、「アメリカという言葉から何を連想するか」との問に対して、会議前では、自由と答えた日本側が1/4を占めトップであったのに対し、会議後は広大という答えが1位であった。アメリカという物理的影響がかなり大きかったことがうかがえる。アメリカ人にも同様の質問を試みたが、会議前後とも、まちまちの結果が出たのみである。▼それでは、JASCという会議を通して、日本人、アメリカ人が相手に対して抱く感情がどう変化したかを見るため、国民性を表わす単語12個のうちから相手の性格としてあてはまるものを選んでもらった。また、自分たち自身、どういう国民性であると考えているかも調査するため、同様の選択肢から該当番号を選んでもらった。その結果、日米双方共認めた日本人、アメリカ人の特性は次の通りである。日本人：勤勉、礼儀正しい、平和友好的。アメリカ人：實際的、寛大、勇敢。相違点として、アメリカ人の半数近くが、日本人は實際的であると答えているのに、日本人自身は、ほとんどの人がそうだと考えておらず45名中3名しか選んでいなかった。果して、JASC日本人メンバーの何が、アメリカ側に實際的だと写ったのだろうか。この質問で、会議前後で変化が見られた点は、お互いに相手をより平和友好的であると認めた点である。特に、日本側では、アメリカ人を平和友好的

であるとした人が倍増していた。▼その他の質問と解答を列挙しておく。

対日本人

- アメリカを好きな理由  
友好的、大らか、自由、率直
- アメリカの印象  
豊かな物質、貧富の差の激しさ、軍事力、科学技術の発達、民主的
- アメリカを知る情報源  
新聞、雑誌、本、テレビ（ニュース、NHK特集、本多勝一他のアメリカに関する書籍）
- アメリカの著名人  
ライシャワー教授、エズラ＝ボーゲル氏、歴代大統領、マンズフィールド駐日大使

対アメリカ人

- 日本を好きな理由  
経済的成功、文化伝統の維持、適応性
- 日本の印象  
外から学ぶ姿勢や文化に対する賞賛
- 日本を知る情報源  
日本での経験、友人、本、(*Japan as No. 1*, *The Japanese*、夏目漱石、三島由紀夫)
- 日本の著名人  
田中元首相、三菱(?)、王貞治

あまり成果がなかったのではと集計しつつ考えた。日本滞在経験がある為、日本についてかなりの固定観念をもっているアメリカ人に対して行なうアンケートとしては質問内容があまりにも大まか、単純すぎたようである。しかも、場所はアメリカなのだから、アメリカ人が日本観を変えたとしたら、その原因は唯一JASC日本人参加者のみである。その

ことを、もう少し考慮に入れて質問を考えるべきであった。そうでなければ、会議前後の意識差を知ることは不可能に近い。と、反省が、かなりの部分を占めるアンケートであった。しかし、少しではあるが、対日対米意識の変化をうかがえる部分がある。例えば、日本人のもつアメリカ人観の変化である。私個人についてみても、今回のJASC参加の一番の糧は私自身のアメリカ人観が大きく塗り変えられたことだと思っている。これまでに書物、テレビで得た“個人主義”云々の皮相的知識が形成したアメリカ人像が徐々にくずされたのだった。会議後のアンケートで、私は、何も迷わず平和友好的をアメリカ人の国民性として選んだのだが、日本側参加者の多数の人が、同じ意見を持っていることを、このアンケート結果から知ることができた。そして、改めて、JASCという国際交流プログラムの持つ意義を実感したのである。

#### IV 会議を終えて

異文化間交流の際、相手の国民性を理解することが重要であると言われ、様々な方法が考えられている。例えば、多くの日本人、日本社会研究の書物が述べるような尺度を用いて分類を試みるのも1つであるし、何か1つの差異を挙げ、その形成過程を比較検討することからも国民性は容易に察せられる。つまり、国民性（文化、社会）を形成する要因は数限りなく存在するのである。そして、それら諸要因が混合し、影響を及ぼしあうことによって国独自の価値基準が形成される。このような価値基準同士がぶつかりあうのが異文化間交流であるが、その場合、果して単に相手かどのような国民性であるかを知るだけで交流が完璧に行なわれ得るのだろうか。今回

私達が話しあいを持ったのは、日立、三菱スバイ事件の直後であり、日本の社会構造を説明する際に、私達日本人側は、できるだけ日本社会の特質、社会の中（特に企業内）での人間の変容ぶりを、アメリカ側に理解してもらうように努めた。アメリカ側も、それら日本人の行動を納得はした。しかし、根本的な部分で strange という印象をぬぐい去れないでいたようである。同じことが、日本側からアメリカ側への印象についても言える。

異文化間交流は、自国の基準だけでもって相手と接しては成立しないと考えられている。今回の会議を通して私達が認識したことは、そのような考えの肯定というよりはむしろ、

上記のような多くの要因が作りあげた価値基準を一体どの程度とり除き、どの程度、相手の価値基準に従って理解を深めることができるのかということであった。相手の行動を納得するのは容易だが、その行動を評価する段階では、やはり、自分達の価値基準を使うのは必至である。しかし、そうしている限り相手の行動に関して strange な感情が残ることは否めない。そのような状態が果して真の異文化理解、交流と言えるのかどうか、会議が終わった今でも、私達は思案中である。問題意識を持つことは大切である。JAASC で得た、この問いに対する答えを、これからの生活の中で、少しずつ見出してゆこうと考えている。

## 教 育 と 社 会

大阪大学 4年 英語学

河 合 雅 美

1982年夏—このとき程、日本の教育が国際的な舞台でクローズアップされたことは、かつてなかったのではないのでしょうか。日本の教科書問題が、中国や韓国を相手に、大きな外交問題にまで発展したのと時を同じくして、私達日米の学生9人が、教育と社会の関わりについて話し合ったということは、全く偶然とは言え、まさにタイムリーなものであったと言えましょう。

私達は、総合テーマに即して、私達の分科会独自の「人間の尊厳確立のための教育とは」というサブテーマを設け、分科会討論の最初の時間をつかい、総合テーマについて話し合いました。ここでは、私達の持っている「人

間の尊厳」観などが話し合いの中心となり、お互いの持つイメージを確認し合うことができました。最初、日本語の「尊厳」と、英語の「Integrity」では、ややニュアンスが違うのではないか、という議論もありましたが、最終的には、私達が持っている概念そのものは、それ程違わないということに落ち着きました。「尊厳」という言葉は、非常に抽象的で、各々とらえ方に多少の違いもありましたが、分科会としては、これを「節義・完全性・一体性・権利・良心・内面性」を意味するものととらえ、人間の尊厳のための教育とは、「単に知識を詰め込むだけでなく、節義・完全性・一体性・権利・良心・内面性を兼ね備

えた人間を育てあげてを目的とするもの」と考えることにしました。ともすれば総合テーマが忘れられがちな分科会討論の場で、こういった機会が持てたことは非常によかったと思います。

また、単にお互いの国の教育制度を知らないことによって生じる誤解をできるだけ避けるために、各々のペーパーの議論に入る前に、質疑応答形式で、互いの国の教育制度を概観しました。

## I 教育と国内社会

### 1) 性教育 Karen Hata

性教育において、よく問題にされることは「何を」「誰が」「どのようにして」教えるべきかということです。私達の議論の中では、「何を」教えるべきかという点で、生物学的な面を中心に教えるべきか、あるいは道徳的な側面を含め教えるべきかということが問題となりました。私達が今まで受けてきた性教育をふり返るならば、圧倒的に前者が中心でした。性道徳の荒廃が青少年の間にも広がってきたと言われる現代社会においては、道徳的な側面を教える必要性が高まっていると言えましょう。しかしこれを学校で教えるとなると、教師に相当の負担がかかります。道徳的な面は、両親が家庭で教えるべきではないかという意見も出ました。しかし、おもしろいことに、私達の中で両親から性についての話を聞いたことがあったのは、高校生になった時、自分から両親に、性に関する質問をしたという Susan だけでした。

話は性教育から更に発展して、互いの性に対する考え方にまで及びましたが、アメリカ人は、日本人が意外に開放的であることに驚

き、また逆に日本人は、アメリカ人が思っていた程開放的でないことにびっくりしたようでした。

### 2) 教科書問題 大浦真裕美

私達がアメリカで、日本の教科書の検定について議論をしていたときに、この日本の教科書をめぐって、国際世論が湧いていたわけですが、実は私達は、日本に帰るまでほとんどそのことを知りませんでした。これはある意味では J A S C の矛盾とも言えることです。会議期間中、私達は世の中の出来事に疎くなる傾向があります。日本の教科書問題などはアメリカではそれ程重要視されていなかったせいもあって、たまにアメリカの雑誌の片隅に日本の教科書に関する記述を見つけても、おや、どうしてこんなことが今頃アメリカの雑誌に載っているのかしらと思う程度でした。日本へ帰ってきてから新聞などを見て、へえ、随分と問題になっていたのだなあ、と驚いた仕末です。こんな具合でしたから、せっかく教科書問題を取りあげたにもかかわらず、日本で問題になっていたようなことにはほとんど触れず、教科書検定に見られるような政府の教育統制の在り方や望ましい教科書の在り方などについての総論的な話が中心となりました。中国や韓国、日本の教科書書き換えに対する抗議などについて知っていたらどんな議論になっていただろうかと、少々残念な気がしないでもありません。しかし、ここで行なわれた議論は、フィールドトリップ先の教育省での議論につながり、大変有意義なものでした。

### 3) 日本の学歴社会 Susan Pasterczyk

Susan は高校時代日本に一年間いたことがあり、その時の経験をもとに日本の学歴社会



「教育と社会」の参加者  
筆者は左から3人目

を鋭く分析していきました。彼女は日本国憲法に「その能力に応じて、ひとしく教育を受ける権利を有する」とあることをとりあげ、日本では、すでに学歴による不平等を認めていると指摘しました。普段、日本国憲法の記述などを注意して読んでいない私達には、やや意表をつかれた思いでした。

話は、学歴社会に子供達を組み込んでいく受験体制へと進み、日本の学校にみられる、画一的傾向の問題へと及びました。制服やホームルームの在り方等に見られる全体主義的な傾向に対し、生徒の個性を損うものであるとの批判が出る一方、こういった教育の中からも、社会全体のことを考えて行動することのできる人間が育つのであり、ある意味では、日本の経済発展もこういった教育に負うところが大きいのではないかといった反対意見も出されました。

フィールド・トリップで、高校の夏期補習授業を見学したのですが、日本の学校と較べると、生徒が各々好きなようにやっていると

いった感じで、日本の授業のように、統制がとれていないのに驚かされました。アメリカの個人主義、日本の全体主義、とよく言われますが、その差は学校に、歴然とあらわれていたように思います。

#### 4) アメリカの統一テスト Beverly Chan

日本とはかなり様子は違いますが、アメリカにも入学試験はあります。最も一般的なのが、SATと呼ばれるものですが、これらのStandardized Test、統一テストは、大学で勉強するのに最低限必要な学力を持ちあわせているかを見るものです。このテストだけで、大学が決まるわけでもありませんし、また、年に何度も受験でき、TOEFLのような性格のもので、とは言っても、これらのテストに対しても、ペーパーテストだけで学力を計ることはできないとか、金持ちで社会環境のよい子供達に有利である、などといった日本の入学試験に対するのと同様の批判がなされています。しかし、入学制度そのものの違い、また国民性の違いなどもあって、日本で



「受験地獄」といわれるような現象は、アメリカではあまり見られないようです。

#### 5) 生涯教育 佐敷尚子

教育を、学校教育の中だけでとらえるのではなく、より広い社会教育といった観点からとらえなければならないとしてとりあげられたのが、この生涯教育です。生涯教育とは、具体的には、アメリカのコミュニティー・カレッジ、イギリスのオープン・ユニバシティ、日本の放送大学などによって行なわれる社会人教育を指し、広義には種々の文化講座なども含まれます。教育を受ける権利は、生涯保障されるべきであり、そのために生涯教育をより推進するための行政努力がなされるべきであるという主張に対し、社会に出てからも勉強を続けるかどうかということは、制度や施設の問題ではなく、個人の意識の問題で、本人さえその気になれば現状でも十分教育をうける機会はあるのではないかと、いった議論がなされました。

## II 教育と国際社会

### 1) 平和教育 高橋 勤

五月の合同合宿のときのことでしたが、平和シンポジウム担当係の顔ぶれを見回してみても、私達の分科会のメンバー全員が入っているのに驚いたことがありました。会議がはじまってからの平和宣言文を考える話し合いの場でも、教育と社会テーブルの日本人参加者はほとんど残っていたようでした。このように日本人側は特に「平和」に関心のある人が多い分科会でしたので、平和教育の討論は、さぞかしヒートするであろうと期待していました。「現状の平和教育は映画や写真などによって戦争の悲惨さを感情的に訴えることし

かしていない。これでは子供達に無力感を植えつけるばかり。もっと事実を系統立てて教えるべきではないか。」「いや、子供達には、まず感情にうったえて平和を願う気持ちを育てることが重要。国際関係の平和理論のようなことを教えてもムダ。」「平和教育は単に反戦争というだけでなく、より広く国際理解教育にまで広げていくべき。」等々、案の条、議論は白熱しましたが、よく注意して見ていると、必死で発言しているのは日本人ばかりなのです。実はこれと全く逆の状況に、後述する民族アイデンティティーの話し合いにおいてなつたのですが、日米の、関心、問題意識の違いが、このように、発言しない、という形をとって表われたのは、私にとっては非常におもしろい発見でした。

### 7) 民族アイデンティティー形成教育

河合雅美

民族のアイデンティティーとは何か。そして、その形成のために教育は何をなし得るのか。これがこの問題のテーマでした。これを探るために、ケーススタディーとして、日本人海外帰国子女、在日朝鮮人、アフロアメリカンの場合がとりあげられ、それぞれの場合における民族意識、民族アイデンティティーの形成過程が分析されました。しかし、こういったケーススタディーを待つまでもなく、私達の分科会には、帰国子女が2名、日系アメリカ人、ポーランド系アメリカ人、中国系アメリカ人がそれぞれ1名ずつおり、各人の考える民族アイデンティティーということを中心に議論はすすみました。日系のKarenは、「私はアメリカ人でもなく、日本人でもない。日系アメリカ人だ。」と言いきり、帰国子女で、日本に10年、アメリカに10年

住んできたKeikoは、「私はアメリカ人のよいところと日本人のよいところを吸収できればよいと思っている」と述べました。日本に生れ、まわりには日本人しかいない環境で育つ日本人とは違い、アメリカ人は、毎日「自分は何なのか」という問題に直面しています。そういった彼らの内面を知ることは、アメリカを理解するうえで大変大きな問題であると感じさせられました。

#### 8) アメリカ在住日本人学生

Keiko Nakamura

先に帰国子女がとりあげられたのに対し、今度は、アメリカの日本人にスポットがあてられました。アメリカの日本人は、短期の留学生にしろ、アメリカで生れ育ったような日本人にしろ、かなりの程度アメリカ社会に溶け込むことが可能ですし、彼ら自身もアメリカ社会に同化しようと努力します。その意味では、アメリカ社会は多様性に富み、開放的であると言えるかもしれません。しかし、アメリカ社会は、深入りすればする程、今度は根深い人種差別の問題に直面するようです。逆に日本のアメリカ人ですが、一つには彼らのほとんどが軍の関係で日本に来ているため、彼ら自身日本社会にあまり入っていないとしまし、日本社会そのものも、彼らを受け入れる体制が整っていません。中には、日本に長い間滞在し、日本社会に溶け込もうと努めるアメリカ人もいますが、彼らがどんなに努力し、日本的になっても、日本社会は、結局彼らを「ガイジン」として扱い、決して受け入れようとしません。いわゆる異文化間教育を考えると、こういった社会そのもの

の特質といったことを無視することができないということが言えましょう。

#### 9) 政治的社会化と政治教育 広里恭史

広里氏が一通り発表を終えたあと、皆ウンと頭をかかえこんでしまいました。今までの議論が比較的具体的であったのに対して、彼の発表はきわめて抽象的で、高度な国際関係論と教育理論にもとづいていたからです。まず「政治的社会化」とは何を意味するのか、というところから議論がはじまりました。

社会化とは社会での個人の役割を学ぶことであり、従って「政治的社会化」とは、政治の中における個人の役割を身につけるのに必要な知識や態度を学ぶ過程を指します。政治教育を、このような政治的社会化のための教育と考えるとき、単に社会科の授業などだけでなく、学級会の討論等も、広義の政治教育といえることができるでしょう。また、テレビ、ラジオ等、マスコミの果たす役割も見逃すことはできません。

従来の政治教育は、国内社会に中心を置いたものでした。しかし、これからの国際社会を考えるにあたって、この政治教育の果たすべき役割は大きなものだと言えましょう。これからの政治教育は、いわば「国際的社会化」を目指したものでなければならぬと思います。

最後に、私達は、教育の場としてのJASCに言及し、私達がJASCで経験し、得たことのすべてが、私達の「国際的社会化」に大いに役立っている、とJASCの意義を再認識し、すべての分科会討論を終了しました。

## エネルギー・資源・環境

聖心女子大学 2年 英語英文科

山本 恵子

地球資源有限性が叫ばれ、適性価格でのエネルギー安定供給源確保の促進が今後の経済成長等全てを決定づける時代に我々は生きています。様々な問題に直面し、提起されることが予想される将来にかけて、エネルギー安全保障や有効利用への影響という観点に立ったエネルギー面での国際協力は最重要課題である。我々の分科会では、各自の問題提起後、ペーパーを中心とした討論と野外研修を織り込みながら全体的に把握した上で、問題を掘り下げていった。現時点では直接解決につながりなくとも国際的視野に立った将来展望の必要性を痛感する活発な意見交換もあり、有意義な討議であったことを報告する。

Timothy Sullivan — エネルギーの現状と環境

Lucille Ito — 省エネルギー政策

Brian Bray — 生活水準とその質

Laurie Freeman — エネルギー安全政策と理解

藤井 真 — 南北のエネルギー問題

下川真樹太 — エネルギーと資源の公平かつ効率的な分配の為の国際協力について

山本 恵子 — 今日のエネルギーと原子力問題

と様相が異なる。

1) エネルギーの90%を輸入し石油の99.8%を輸入している日本に対し、米国はエネルギーの20%、石油の45%の輸入に留まっている。中東からの日本の石油輸入は4分の3、アメリカは4分の1である。

2) 日本の石油資源は皆無、石炭等潜在的エネルギー源の存在が微少に対し、米国は石炭、ウランウム、天然ガス等国産エネルギー資源が豊富である。

3) 日本では石油がエネルギー供給の4分の3を占めているのに比し、米国では2分の1弱を占めているに過ぎない。

4) エネルギー消費に占める産業部門の比率では日本が米国を大幅に上回っている。(日本55.6%、米国30.3%)

又、家庭・商業部門における1人当たりのエネルギー消費量はアメリカの4分の1以下である。

5) 日本の人口1人当たりのエネルギー消費は米国の3分の1、GNP単位当たり消費は2分の1以下である。

以上のように先ず需給関係での日米の基本的相異のポイントを押さえた。両国が選択し得る行動の観点からみるとこれらの差異は大きいものではあるが、石油枯渇に対する脆弱性は双方とも同じである。代替エネルギー、エネルギー消費効率の増進(節約)、国内資源利用の促進、海外供給源の多様化等様々な計

### I 日米エネルギー構造の比較

日米両国のエネルギー状況は多角的に観る

画が実施されてきたが、国内事情の差異による日米両国の重点の置き方、国産エネルギー資源の量によるエネルギー事情の枠組みでの根本的差異は存続している。

## II エネルギー危機の見方

1982年5月の通産省の発表によると、同時期までの原油需要価格は世界的石油供給過多により落ちている。米国市場で1日140万バレル石油需要が減少、日本は本年4月現在、昨年比較25.8%減少している。産油国は、需給状態から見て1バレル34ドルの価格基準を保ち続けている。一方、北海、アマゾン、南米の油田開発の可能性が見込まれているものの、資源生産の限界により、2030年には日本の石油依存度ゼロになる見通しが大きい。これらに対し新エネルギー政策の展開は危急の問題である。

## III エネルギー多様化の時代

1990年代から21世紀初期の石油枯渇に備え、石油時代と無尽蔵エネルギー時代の過渡期の谷間を原子力で埋め、新エネルギー開発促進が我が国の緊急目標である。日本の原子力発電体制がこれまでの米国依存時代から脱却したことから2000年には原発百基時代（現在の5倍）を迎えるに備え安全性と信頼性の向上を最大の眼目とした原子力発電高度化の長期ビジョンと基盤整備作りに取り組む必要性が増大した。コストの安価な原子力だが核アレルギーは依然根強い。原子力世界第1位の米国は2000年までに今の4倍に拡大させる構想でレーガン政権は政府の民間活動への介入を極力少なくし、自由市場のメカニズムを最大限機能させる方針をとつて

いる。これらに対する分科会の討論は、短期的に言えば平和的利用の上での原子力が必要であろうが長期的にみて原子力エネルギー利用基準、核拡散問題の再検討の必要性は両国にとって大きく、長期的視野において水力、地熱、太陽エネルギーの諸技術に対する指導国としての立場をとっていくべきであるという結論に達した。

## V 安全供給体制と国際協力

我々は米国エネルギー省を訪問し、他のエネルギー源への移行が十分達成される迄は石油が主要エネルギー源であり、その供給は向こう10年間は可能であるとの再確認を得た。アメリカ自身、供給力に限界のある世界石油市場からの輸入を続けている現状では、緊急時日本に対し、石油供給の安全保障の為に独自で行ない得る事はない。供給混乱に対処する為には主要消費国による多国間取決めの確立と実施により構成される国際エネルギー機関があたり、その役割は増進しつつある。10年の短期間で消費を極力減少させ、石油代替燃料の開発を促進しながら自立体制を固定させ、日米両政府間レベルの全ての機関が一貫性のある行動をとらなければならない。

自由世界の二大先進工業国として日米両国は経済的、社会的利害関係で大きな共通点を持っている。世界的エネルギー問題は先進工業諸国の経済に大きな影響を及ぼしているが、その影響は発展の初期の段階にある国々の方がより深刻である。東南アジアの一部の諸国ではその発展の為に大量のエネルギーの必要性が増大しているにもかかわらず大幅に高騰したエネルギー代金を支払う余裕がなくなっているのが現状である。日米両国等主要エネ

ルギー消費国による、自らのエネルギー消費削減の実施は開発途上国にとって恩恵となる。日米はその規模と影響力の故に、同盟諸国間だけでなく、産油諸国との間にも建設的対話関係を推進する責任を負っている。さらに、双方共発展途上世界との関係で主導的役割を果たし、開発途上国におけるエネルギー生産の為の投資を促進していかなければならない。

## VI 省エネルギー政策

第1次石油危機以来、日米共、冷暖房温度の調整、マイカーの使用の自粛など産業、民生、輸送の各分野において節約運動、省エネルギー投資の際の助成などの優遇措置等の国の政策による誘導が大きく貢献している。日本政府は、エネルギー使用の節約促進策、産業の省エネルギー設備投資の助成策さらに新規の省エネルギー技術開発の体制整備を石油消費節約効果のテコとしている。その一環として節約目標を掲げ、1982年度は2500万Kℓと前年比57%伸びを見込んでいる。

米国は国内産より安価な石油輸入が増大しつつありこのような状態を契機として1985年に向けてエネルギー需要の伸びを年率2%以下に押え、ガソリン消費の削減、戦略的石油備蓄への計画の実行に力を注いでいる。ある意味で手早く対応出来る省資源には限界があるが、これらの政策への国民の個人レベルの関心の積み重ねは代替エネルギーまでの消費減に向けて大きく貢献することになるだろう。

## VII 環境問題

エネルギーと環境保全はトレード・オフの連鎖関係により結びついている。我々はフィールドトリップとしてワシントンのRFF (Resources for the Future) を訪ね、環境の質とエネルギー政策研究を進めるにあたり、データや情報収集により、資源・環境を地球的視野でみた上で相互関係を深めていくことを中心課題としていることを知った。又、後日、ノースカロライナ州の環境保全局から



「エネルギー・資源・環境」の参加者  
筆者は右から3人目

講師を招き科学的、生物学的に環境の人体への影響の研究が推進されている現状を聞き意を強くした。

米国側は、石油輸送事故による汚染、炭鉱作業による土地の廃地化、原子力発電所事故の際の対処方法及び生態学的に見た安全性等の問題提起を行ない、併せて海洋、風力等のクリーンエネルギーに向けて研究、開発を進めることを主張していた。日本側は1970年代初期の公害問題から環境基準が厳しく強化された為国内汚染の広がりは急減した一方で、日本企業の発展途上国進出により一部では公害輸出問題が起こっていることを紹介した。

さらに環境面における南北問題として現在より注目を喚起すべき点として砂漠化と森林破壊が挙げられる。19世紀初期の35億ヘクタールの熱帯樹林が現在約25億ヘクタールに減少し、地球上から毎分10ヘクタールの森林が消滅している。この速度が続くと、21世紀初頭には地球の砂漠は現在の20%も拡大すると予測される。人口の食糧確保の為の焼き畑農業と薪伐採により森林が失われ、拡大砂漠による難民流出という地球的社会問題にまで及びかねない。木材需要の7割を輸入に依存している日本の責任として、米国の技術も含め、成長の早い樹木の品質改良などで造林に尽くしていく必要がある。家庭用の木材に焦点を絞った時、南側の石油の需要も考慮に入れながら新エネルギーに力を注いでいくという案も出た。これらの点で環境問題をもう一度、根本から見直すという視点か

ら出発し増大を続ける人工物質と、エネルギーの流れと自然の営みを支えているエネルギー循環を追究し、自然の活力を活かしつつ、エネルギー資源の流れを多面的に管理していくという構想は新鮮なものであった。日米両国ともに国際的な義務感を持って、環境分野における南北問題解決への道を開くべきであるということで意見の一致を見た。

## VIII 結 語

アメリカの日常生活と社会を現実に見、自分達も生活しながら話し合いを進行させていったがアメリカの広大さにより米国人が資源や省エネルギーに対する実感と実際行動が薄れがちになるという意見にも大きくうなずけられた。その点日本はエネルギー危機に対する表面的意識は強くても本当に国民の全てにまでその深刻さが浸透しきっていない点も痛感される所である。両国にとり、短期的な供給混乱に備える一方で、長期的に新エネルギーを研究し、実用化に向けていくべきである。少なくとも我々の手でGlobal Crisisを回避し得る事は、あらゆるレベルでの情報、意見交換や人的交流を強化しながら、省エネルギーを心がけることであろう。人類の発展、環境、経済発展は決して—国家という枠組みに分離出来ない共通した関連性の上に立っている。一国に焦点を当てるばかりでなく地球的命題が明示されるべきである。個人レベルでの資源・エネルギー・環境問題に取り組む姿勢の重要性を拡げていくことは我々JASCメンバーの今後の使命であろう。

# 科学技術と社会

東京大学 医学

渡 辺 聡 明 (4年)

田 中 智 之 (2年)

現代はハイ・テクノロジーの時代だと言われる。我々が新技術からうける恩恵は絶大なものである。しかし一方では、この新技術革新の中であって、人類は科学技術を正しく使いこなせていないのが現状である。それは、公害、職場における人間疎外、巨大軍事力の脅威、管理化社会到来の可能性などの社会問題としてクローズ・アップされてきている。また、発展途上国を中心とする適正技術問題は、旧来の科学技術のあり方についても再考を求めている。

我々が日米学生会議において「科学技術と社会」分科会を設けたことは、こうした時代背景ゆえに大きな意味をもつ。討議は、各人が興味のある分野について作成した論文を中心にすすめられた。一貫したテーマなどは特に設けなかったが、広範囲にわたって自由な討論のできたのは有益だった。

この問題を扱う場合の視点を私の考えに従って列挙すれば、① 科学技術の社会における理想的位置づけ、② どの分野をいかなる方法で開発するか？ ③ その際の決定権はだれが握るか？ ④ 決定権をうまく実現するための社会的機構 ⑤ 現状はどうなっているか？ ⑥ 現状のどこをどう改変するか？ ⑦ 改変のための具体的方策は？ 時間の都合もあって全てを網羅することはできなかったが、我々ではできるだけ多くの視点をもりこもうと努力した。以下、トピック別に討

論内容を簡単にまとめることにする。

## I 日米技術移転問題 (問題提起: Brad Hall)

日本の戦後の技術進歩を支えたのは欧米諸国からの技術移転であり、政府の努力・教育レベルの高さ・技術者交流の促進等がこれを支えた。最近の米国企業は経営難に落ち入り、R&D費に充分投資できないのが現状である。今こそ、従来の米国→日本という一方的な技術移転の図式を改め、日本企業・政府が新技術の開発の責任の一端を担うべき時期であり、それが長期的には日米両国の利益となるであろう。

## II 核兵器問題 (問題提起: 渡辺聡明)

近年の核兵器の命中精度向上は、対軍事施設攻撃と先制攻撃をより有利にし、核戦争の危機を増大させた。核軍縮条約などは必要だが、複雑な兵器体系の故障による偶発戦争やテロリストによる悪用の可能性は依然として残る。ゆえに、現在最も急を要するのは攻撃型兵器開発・装備力を防御型兵器のそれにふりむけることである。A B Mや米国のE-2 C、S A G Eシステムは防御型兵器の典型である。

## III 生物工学問題① (問題提起: 許 昭苑)

生物工学はここ10年間に開発された新技術で、医薬品、農業、エネルギーなどの分野

で大きな恩恵をもたらすと言われる。その一方で、生物兵器、生物災害、生態系破壊、倫理混乱などの潜在的な危険も大きい。健全な発展のためには、実験規制だけでなく、充分な市民参加を実現し、科学者が社会的責任を自覚する必要がある。状況によっては実験停止期間を設け、市民の問題意識を高揚し、討論の輪を広げる必要があろう。

#### IV 生物工学問題②(問題提起:田中智之)

生物工学の無批判な開発と企業エゴの結合は、医薬品乱造や生物兵器開発などの潜在的危険性をもつ。これを回避するためには、広い視点と具体的展望をもった市民運動を展開させる必要がある。この際、ある程度の専門知識をもつが、特定の利害に縛られない学生の果たす役割は大きい。生物工学問題は理論的色彩の強い論争ゆえに、危険性の予期できない現代科学技術をめぐる今後の論争のためよき手本となるべきである。

#### V 適性技術問題(問題提起:Ken Anderson)

適性技術はそれぞれの国の経済・社会情勢に最も適合した技術として定義できる。発展途上国については特に、資本・労働の要因を考慮すると共に、大国からの独立を図る必要があり、質の高い教育の実現は急務である。エネルギー・農業・国土開発・水資源開発などは適性技術の重要項目であり、賃金上昇・保守的文化状況・行政指導経験不足などのマイナス要因をのりきってこれらの適性技術を実現していかなければならない。

#### VI 宇宙開発問題(問題提起:Steve Songer)

米国の宇宙開発にはしばしばむだが見られ

る。国防総省とNASAの思惑の違いからシャトル計画が当初の予算を大きく上回り、完成が遅れたのはその典型例である。また、レーガン大統領の軍事技術を最優先した宇宙開発政策のために、惑星探査などの長期的視点に立った開発が遅延している。我々は、宇宙開発が平和目的のみ行われるべきことを確認し、長期的展望に立脚した有用な開発を促進すべきである。

次に、討論に平行して行われた野外研修について述べる。

##### 1) 日米防衛フォーラム

我々の分科会は、ワシントンで開かれた日米防衛フォーラムに招かれた。このフォーラムには他に軍事産業関係から3名、国防総省から1名、日本の防衛駐在官1名と国際企業分科会メンバーが参加した。我々の分科会からは渡辺が論文発表を行った。主なテーマは日米防衛技術協力問題となった。一部の発表者から、日本の防衛装備は米国からの輸入とライセンス生産に頼りすぎる傾向があり、特にコンピューター部門においては協同開発を目ざすべきだとの指摘があった。高度な知識を要する内容であったが、発表者のわかりやすい説明は我々の理解を助けた。新しい視点と、防衛技術問題の様々な知識を得られたのは有益であった。

##### 2) National Museum of Air & Space

ワシントンD.C.にある科学博物館であるが、中には第一次世界大戦に用いられた戦闘機から、アポロ宇宙船、スペースシャトル等々様々な展示品がある。中でもトマホークを始めとする現在米で実際に配備されているミサイル群については興味ある見学ができた。





「科学技術と社会」の参加者  
筆者は右端（渡辺）と右から2人目（田中）

核廃絶運動への機運が高まり、各地に反核運動が操り広げられつつある今日、正確かつ冷静な市民の軍事技術に対する理解が要求されて来ているが、その意味に於ても、ここで展示されていた最新兵器及び今日までの兵器の移り変わり、進歩の足跡を見る事は有意義な事であった。

### 3) NIH (National Institute of Health)

例の遺伝子操作実験指針でも有名なNIHであるが、NIHの活動は様々な分野に及んでおり医学・生物学的なリサーチが、世界各地から集まって来た研究者達（日本からの研究員もかなりいるという。）によって行なわれている。医学関係においては患者は医療費の負担をする必要はなく、特に難病とされている病気については最先端の医療技術により治療される。

医学の基礎的な研究もだいぶなされており、特に放射能でラベルした2-デオキシグルコースを用い、脳の視覚野の活動状態をオートラジオグラフィーによって検出する、2-デ

オキシグルコース法を実際に見学できた事は非常に興味深かった。

—その他脳に関して、ニューロンの接続方式の研究や、皮質、大脳基底核、視床下部などの連絡関係も研究されているという。

### 4) IBM

ノースキャロライナの工場に行った。先頃のIBMスパイ事件の事が頭にあった我々だったが、John Marsland氏は非常に好意的に我々を迎えてくれ、主に製造部門の工場案内をしてくれた。

能率、品質管理など常に改善する努力が払われており、工場内部もかなり機能的に考案されていた。又、ハードウェアの面でのコンピュータの進歩の概略を、わかり易く説明して下さったJohn Marsland氏の説明は後に分科会で行なったTechnology Transferの討論の時にも非常に役立った。

### 5) EPA (Environmental Protection Agency)

Deborah Ann Janes 女史を迎えて講演を

して頂いた。EPAは公害、特に排気ガス等による大気汚染についての研究を行なっている。

各都市に於ける大気汚染度のチェックから始まり、汚染物質の生体に及ぼす影響、又正確な汚染源などを解明する。人体に及ぼす影響については主に動物実験により研究されており、害が自然環境下にある程度であり、許容範囲と認められる時には、実際に人間を被験者とするTwo Chamber Testなどの試験も行なわれる。

EPAにより様々な新たな知見が発表されており、特に、排気ガスの多い都市に於けるジョギングは人体に重篤な害を及ぼすという事実などは注目に値するものの1つであると

思う。

EPAはその追跡結果を議会へも提出しており環境保護に対する立法化にも働きかけている。

#### 6) Digital Effects, Inc.

ニューヨークにあるコンピューター関係の会社であるが、ここは主にテレビの商業などに利用されているプログラムの製作に携っている。ソフトウェアの必要性はこれからますます高まっていく事と思うが、現在この会社のスタッフは以外と少なく20名に満たない。現在アメリカのテレビ放送の中で実際に用いられている幾つかの商業はこの会社で製作されたものである。

## 人 権 問 題

成城大学3年 マスコミュニケーション

日 馬 由美子 ほか

人権問題分科会では、“人権”の問題を考  
える際、テーブルの参加者各自が、自分にと  
って身近な問題として抱えることが出来るト  
ピックを持ち寄って報告し合った。各自のレ  
ポートの内容は以下の通りである。

### 日本側

日本における老人問題

ベビーホテル

公共事業

日本の視覚障害者の雇用状況

### アメリカ側

クライシス・クリニック(命の電話)

囚人の人権

核軍縮

子供の人権

又、野外研修では、これらのレポートの内容  
に関係の深い場所を訪れることが多かった。

### I 老人問題

日本は近い将来、高齢化社会を迎えよう  
としている。この先も増え続ける老人を誰が扶  
養するかという問題は、今や大きな社会問題  
の一つになってきている。かつて老人は家族  
に囲まれて余生を過ごすことが当然のことで

あった。しかし、近年いわゆる核家族化が進み、住宅事情の悪化やその他の諸要因も相まって、今後老人扶養の問題を家族内で解決する事が困難になっていくことが予想される。分科会討論では、特に“寝たきり老人”を抱えた家族の状況について日本側から報告があった。老人の問題を考える時、日本側の頭に浮かぶのが老人福祉の問題であったのに対して、アメリカ側では、グレイバンサーの様に、年齢による差別と闘っている組織を野外研修先として用意していたのが面白かった。

グレイバンサーは、会長のマギーキューンによって1970年に創設された。この組織は、彼女が65才になった時点で、これまで勤めていた仕事を強制的に辞めさせられたことに対して全国的年齢差別撤廃運動を起したことが始まりだという。グレイバンサーの最終目標は、国籍・性別・宗教・人種・年齢を問わず全ての人々が互いに協力し合って歩んでいける様な社会を創ることである。又、この運動が老人だけでなく多くの幅広い年代層の人々の支持を得ていることも興味深い。私達はワシントンD.C.にある一支部を訪れ、グレイバンサーの色々な運動に関しての話聞くことが出来た。何事も自分達が実際に行動を起していかなければ変わらないという強い信念を持って、デモ行進・勉強会等を企画し、精力的に活動しているアメリカの老人達の強さを感じさせられた野外研修だった。

## II 子どもの人権

国連の児童権利憲章では、子供は、身体的・精神的、社会的に自由で尊厳ある健康な生活を送る機会と施設が与えられる権利を有する

旨を高らかにうたいあげているが、実際には、子供の人権は非常に犯されやすい状態になっている。幼児・子供は自分の人権を主張することができないので、強者の人権主張のもとに、しばしば子供が犠牲になってしまうのである。その具体的例として、日本で近年話題となったベビーホテル問題についてのベビー発表がなされた。続いて、具体的に子供の人権を守るためにどのような法的処置がアメリカでなされているかについての発表があった。

野外研修としては、ダイケア・ライセンスングのノースカロライナ事務所のMs. NickefsonとMs. Wrightのお話をうかがった。この事務所では、保育所を開きたいと思っている人の相談役をつとめ、検査に合格したものに免許を与えることを主な業務としている。定期的に保育所を訪れたり、検査を行ったりしている。事務所の仕事内容、アメリカ特にノースカロライナの保育所の状況について質疑応答を行い、日米の保育所及びそれをとりまく状況の違いなどについて学ぶことができた。

## III Crisis Clinic

ボランティアとして、自分が実際にそこで働いている米側の参加者から、シアトルのキングカウntyにあるクライシス・クリニック(命の電話)について報告があった。ここでは24人のスタッフと、厳しい訓練を受けた150人のボランティアが交替で、一日24時間、年中無休で、住民からの電話相談に応じている。

電話による相談の内容は、幼児虐待、アルコール中毒、自殺等、最早家庭内では解決出

来ない様な深刻なものが多い。又、相談を受けたボランティアは、どの様な些細な問題であろうと、相手の人格を尊重し、誠意のある応待をすることが義務づけられている。報告者が、このボランティアの仕事を志したきっかけは、これまで自分が人々から受けてきた恩恵を今度は自分が還元していく番だと考えたからだという。

#### IV 視覚障害者

報告者が、日本の視覚障害者の雇用の状態を雇用問題を中心に、自身の体験を交えて発表した。江戸時代以来、視覚障害者の職業は、針・灸・マッサージのいわゆる三療に限られ、同時に視覚障害者に対する偏見も根深いものがある。60年に制定、77年に改正された雇用促進法は、障害者を種類・程度によって分類しなかつたので、程度の軽い障害者には良かったが、視覚障害者の雇用にはつながらなかつた。近年、ライトハウスが新しい職種の開拓に努めているが、十分とは言えない。

日本では障害者を特別の学校で教育するが、障害者の理解のためには、アメリカで行なわれているように、普通の学校に入学させ、共に学ぶことが重要である。彼は友情や信頼によってどれだけ助けられたかしれないと言う。

American Foundation for the Blind Services を訪れた。この協会は、視覚障害者サービスの地方団体を全国レベルで援助するため21年に設立された。ここでは、朗読テープの製作過程や、ゲームから時計までの各種の視覚障害者用の器具の展示などを見学した。

#### V インディアン

ノースカロライナのCommission of Indian Affairs を訪れた。この委員会は、州の行政官とインディアン代表の双方から構成され、州の援助を受けて1972年から活動している。委員長は、まずインディアン迫害の歴史を述べ、次に自分自身の体験を語ってください。当時インディアンは、白人黒



「人権問題」の参加者  
筆者は前列右側

人双方から隔離され、教育を受けることすら難しかったが、その環境の中で、次第に自分がインディアンであることを誇りに思うようになり、白人に同化することを拒否するようになったという。しかし、一方では、アメリカの民主主義制度に深い信頼を寄せ、教育制度を整備し、インディアンがもつと公職につくようになれば、事態はずっと改善されるだろうという。しかし、インディアンをどう定義して、どう証明するのか、あるいは他の少数派との連帯をどうとらえるのか、といった問題がある。他の委員の方の話にも共通するが、全体を通じて、自分がインディアンであることを誇りにしていると強調されていたのが、印象的であった。

## VI 囚人の人権

囚人の人権について、大きくわけて二つの立場がある。一つは、囚人は全く法的権利を有しない、とするもので、もう一つは、居住の自由等一部の権利以外の権利を全て有するというものである。実際には、犯罪の種類にもよるので、一般論を出すのは非常に難しい。囚人の人権問題は、日本ではあまり問題とされてこなかったが、アメリカでは60年代の市民権運動の高まりの中で、囚人にも人権を認めるよう要求する運動がおこってきた。

ペーパー発表の後、私達は囚人の更生施設であるニューヨークのFortune Societyを訪れた。1967年に設立され、刑務所のシステムについての人々の意識を高めるため、元囚人が学校や教会・マスメディアで講演したり、監禁中又は後に、(元)囚人の抱える問題について援助を行うことを目的としている組織である。そこで、元囚人で今Fortune

Societyで積極的に働いているMr. Taylorが組織の歴史と自分の体験談を話して下さった。その後、建物の中を案内され、実際に元囚人の人々が社会復帰のための職業訓練を受けているところを見学することができた。普段接する機会ほとんどない囚人の人権問題を目の前にし、視野が開かれると同時に衝撃を受けた貴重なフィールドトリップとなった。

## VII 公共事業

名古屋の新幹線と大阪の空港の騒音を例にとつて、公共事業と住民の人権とについて報告があった。公共事業の場合、その目的が国民の福祉増進であるから、私企業の場合より、いっそう問題が難しくなる。しかし、だからといって、住民の生活を無視することはできない。新しい施設をつくる時には、環境アセスメントなど、妥当な手続きを踏むことが重要である。しかし公聴会は日本でもアメリカでも形式的になることが多い。

## VIII 核軍縮

最近世界的に高まっている核軍縮運動は、まだ初期の段階であるとはいうものの、人類の存続と繁栄の権利保持に向かつての良き出発点であると言えよう。軍拡競争は、人類の破滅をもたらす危険をはらむのみならず、社会福祉予算削減の原因ともなっている。

国連軍縮特別総会を機に今年6月12日に開かれた国際反核百万人集会は、核軍縮運動のハイライトとでも言えるものであった。これに参加したアメリカ側参加者が、この時の体験をもとにペーパー発表を行った。この運動で特に注目すべきことは、多くの市民運動

グループが国際的に参加し、参加者はあらゆる社会的地位、あらゆる人種、あらゆる世代の人々から成りたっていることである。軍縮のために我々学生は何をすべきかについて話し合った結果、まず正しい情報を得、自らを教育するよう努力すること、そして現状、政府の政策について疑問を持ち、その疑問を多くの人々につけて人々の意識を高めることが、最も身近にできる大切なことであろうということになった。

分科会討論を通じて、普段の生活では注意を向けない世界のことを改めて教えられた。例えば、囚人の人権問題などは、なかなか意識的にほらない。その意味で、知ることがこの分科会の1つの大きな目的であろう。

討論は基本的に人権を守らねばならないという点では一致したが、そのために何をなすべきかという点では、意見がまとまらなかった。誤解を恐れず、あえて簡潔に言えば、ア

メリカ側が法的規制を重視するのに対して、日本側は人々の意識を例えば教育を通じて変えていこうとする立場であった。それが本当に適切なのか、現実にはどういう手段がとられているのかといったことが、今後の課題であろう。ニューヨークの雑多な文化の混在が思い出されるが、私見では、法的規制は違った考えの存在により寛大で、人々の同質性にこだわらない文化の制度だと思う。

また、なぜ人権問題を扱うのかということも絶えず考えねばならない問題である。日本側の一参加者は、人権の尊重とは、人と人との共通点の認識で、それが本当の人間同士の交流につながると言う。相違を認めあつた上で、共通点を知ることが大切である。ただその比重の置き方は簡単ではない。

会議を終えて、参加者はそれぞれの世界へ戻っていくわけだが、ある参加者の言うように、些細なことでもいいから何かをなすことを忘れてはならない。

## 国 際 関 係

一橋大学3年 国際金融

八 木 健

### I プロローグ

『あらゆる学問の目的は個としての人間の究極にあるものの追求と、種としての人類の福祉の達成にある。』— 極めて莫然としているが、これは国際関係論を専攻されている馬場伸也教授の言葉である。名言だと思う。国際関係は不毛の学問だ、と陰口をたたく人がよくいるが、彼らによれば、要するに

現在の国際関係は政治的側面ばかりを取り扱い、経済的側面、或いは文化的側面をほとんど無視しているというのである。確かにそうかもしれない。だが、様々な分野に渡るファクターを用い、問題を分析・研究する以上にはるかに重要な事があると思う。それは一言でいうと問題意識、つまりその問題をいかに自分自身の問題としていくかである。それこ

そまさに、文頭に筆者があげた言葉と密接にかかわってくることはないだろうか。これから、これを読む人々が、この報告の中で、自分の生活と何らかの形でかかわりあり問題をいくつかでも見い出してくだされれば、幸いである。

それではまず今年の国際関係テーブルの方針及び実際にどのような形で討論が行われたかを簡単に述べたい。

## II 概 観

昨年は軍縮問題に話題を集中させた観があったが、今年は、広範囲に渡る国際関係の中から各メンバーが最も関心を寄せている問題をそれぞれ取り上げ、様々な観点から討論する事になった。ただ、この場合、他のメンバーが取り扱う問題に対する、各人の知識量・関心度のギャップが大きいいため、討論がうまく進まない事があり、一つの反省材料となった。

さて、各テーブルメンバーが取り上げた問題は次のようなものである。

### <軍縮問題>

軍縮と平和研究 by 山脇啓造& 福田伸夫  
抑止論批判 by Joni Hiramoto

### <日米外交問題>

海洋法と日米外交 by 土川元  
ソ連脅威への日米の認識 by Robert Uriu  
日米通商問題 by Robert Maitland

### <南北問題>

US—ラテンアメリカ関係(軍事関係及び  
多国籍企業問題) by 八木健  
中東問題(ヨルダン川西岸)

by Terrence M. Tehranian

テーブルミーティングは主に Duke 大学を

中心に、まさしく1つのテーブルを囲んで行われた。中には、かなりくつろいだ姿勢で討論に参加する者もいたが、さすがに全員自分の取り上げた問題には相当の知識と明確な論理を持っており、充実したテーブルミーティングが行えた。形式は、まずレポーターが自分のペーパーの説明を行い、ついで討論に移る、というものだったが、全体として、あるトピックに対し意見を聞かせるといより、むしろ互いのトピックへの認識を深めるといった傾向があったと思う。

では次に各メンバーの取り上げたペーパーの要旨、問題点等を報告する。

## III PAPER PRESENTATION

### <軍縮問題>

世界中の報告書(SIPRI他)が述べるように、世界は今依然として軍事化への道を歩み続けている。年に一度サミットでもやらない事にはお互いの結末が保てなくなる程の国際情勢の悪化、核を中心とする軍事技術の向上(R&Dプロセス)、ブラジル・イスラエル他の第三世界内部の恐るべき軍事化、世界的軍事支出の増大、あらゆるルートを使ってなされる大国の第三世界への介入・干渉。これらの事実は如実に今世界が危機的状況への道を突き進んでいる事を示している。すべての事象が、取るに足りない国家的、あるいは個人的利益のために、もはや壊す事のできない悪循環を形成してしまったのだ。第三世界諸国は大国の介入と闘うため(フォークランド紛争)、又、大国の生産した武器を購入し軍事化する他の第三世界の国々に対抗するため、必然的に自らも軍事化せざるを得ない。一方先進国も、内部に抱える経済問題(失業



「国際関係」の参加者  
筆者は前列右端

他)を打破するには軍事産業は不可欠のものとなってしまう。今や30ヶ国以上が核を持つ能力を備えているのだ。“一方(ソ連)”の損失は即“他方(米国)”の利益になる。この仮定が限定核戦争の可能性を生んだ。だが我々是一方の損失は同時に他方の損失になる事に気づかねばならない。核戦争に勝者はいない。報復は報復を呼び、そこにあるのは平和な生活の破壊、そして全面的核戦争である。かつては核抑止論があり、核戦争は無い!と言われた。果たしてそうであろうか。核抑止が実際機能するには核保有国は、「いざとなったら本当に核を使いますよ。」というポーズをとらねばならない。その脅しを相手国に信用させるため核保有国はある程度まで非理性的行動をとらざるをえない。この時、その程度が問題になる。核保有者の理性には何ら保障などないのだ。一旦その理性が疑われると脅しが現実のものとなり、抑止は機能しなくなる。ヒトラーがそうだった。彼は脅しを武器にヨーロッパを進軍したのだ。

だが彼の理性が英仏に本当に疑われた時、第二次大戦が起こった。又、核抑止に関連する問題としてバランス・オブ・パワーがある。しかし「力の均衡」などいかにして客観的に測る事ができようか。単純に米ソを考えると、米国の他に西欧各国の軍事力も考慮して均衡を測るのか、それとも米国の軍事力だけなのか、これだけでも、バランス・オブ・パワーは無意味なものとなる。これに兵器の性能といった要素を加えると、もう力の均衡をまともに考える者などいないであろう。では、次に核の脅威を軽減し、世界を軍縮へと導く手段として我々は次のものを提案したい。

- ① 一方的(核)軍縮(特にアメリカ主導の)
- ② 非核武装地帯の設置・拡大(東アジア他)
- ③ 通常兵器の大削減。

昨年レーガン大統領が提案した米の一方的、中距離ミサイル欧州配備停止、それを受けたブレジネフ書記長による戦域核ミサイルの使用中止宣言に見るよう、特に①が現実化しつつある。日本はこうした情勢の中で、唯一の



被爆国としての経験、軍事費を削減して成し得た経済発展、平和憲法をフルに生かし、又アメリカの軍事的役割の分担要求を受け入れる事なく、かつその理由を相手に対し明確に説明するよう努力し、そして、自国の経済力を最大限に生かせるもの（援助等）の中に日本の道を見出すべきであろう。

#### <日米外交問題とソ連脅威>

まず、上述の軍縮問題と関連するものとして“ソ連脅威への認識”が取り上げられた。客観的に米ソ軍事力を比較した場合、CIA他による報告と異なり、明らかに、しかも相当アメリカ側が優位にあるという事である。ミンスタ・キエフと言ったソ連最高クラスの空母も西側のそれには性能の面で数段劣る。アメリカは、自国の軍事支出を正当化し、又ソ連を軍事大国・敵と決めつける事により自国に有利に国際政治を運ぼうとするため、誤りの多いソ連脅威論をくり返しているのではないか？今、アメリカは、日本・中国の軍拡及び両国との関係強化を通じソ連を抑え込もうとしている。米ソ関係改善への動きは少ない。しかしアメリカ政策立案者は次の事実を認識すべきである。それは、まず過度な反ソ政策は反ってソ連の危機感を強めるという事、次にソ連は確かに機会主義者（Opportunist）であるが、自らを不安定で、特に経済的に脆弱であると考えておりアメリカを初め敵に対し極めて敏感であるという（最悪事態学習他）2点だ。反ソ一本槍のアメリカに対し日本はソ連との共存を考え、ソ連脅威に対し現実的受け止め方をしている。つまりソ連は日本にとって脅威・敵ではないという見方だ。問題はそうした日米のソ連への認識のズレにある。アメリカは日本の立場をより理解するよう努

めるべきだが、それ以上に日本は自国のそうした認識をアメリカに明確に伝えるようにしなければならない。さもなければアメリカは相変らず日本に軍事分担を押し続けてくるだろう。

対ソ政策に見られる、こうした“日米のくい違い”は今年の4月採択された“海洋法”にも見る事ができる。現在世界の海底には“人類最後の宝物”と言われるマンガン団塊が数多く存在する。しかしこれまではそういった海洋資源に対し何らの国際法もなく、事実上先進国の支配下にあった。海底資源の採掘技術が進歩し上述の団塊が入手可能になると当然のように第三世界諸国から海洋法への要求が強まった。1973年に始まった国連における第三回海洋法会議は、南北双方幾多の妥協の末、1981年いよいよ海洋法が批准されようとした寸前、レーガン新大統領の反対に会い、再度翌82年のセッションまで延期された。南北問題やグローバルな問題を重要視しないレーガン政権は何とか海洋法をより自国に都合の良いものに変えようとしたのだ。これに対し日本は第三世界諸国と共に原案の海洋法に賛成し、82年ついに採択された海洋法はアメリカの思惑はずれとなった。日本を取り巻く国際情勢の変化は、日本をして米追随外交に歯止めをかけ、“国際システムにおける日本の立場”を明確にさせるよう向かわしめたのだ。（西側の一員なのか、アジアの一員なのか、という問題）

アメリカが今後同盟各国に対しどの程度配慮を払い自国の政策を打ち出し得るのか、又、日本は強力なポテンシャルを持つ経済力を背景にいかなる役割を国際舞台で果たすのか、という問題が再びクローズ・アップされた。

JAPANESE CARDに注目したい。

### 〈南北問題〉

中東における南北問題とも言うべき、ヨルダン川西岸ウエスト・バンク（以下W.B.と略記）の問題が討論された。W.B.は67年第三次中東戦争により、それまでのヨルダン支配下からイスラエル領となり、以後イスラエルの経済発展に対し、低賃金労働力の移動、イスラエル製品の購入、W.B.農作物の輸出を通じ、多大な貢献をした地域である。パレスチナ人の多いこの地域はイスラエルの軍政下であり自治権はなく、又確固たる産業も持たない内に、イスラエルの思惑により自由貿易、一方的付加価値税他不利な条件を強いられ、交通機関を整備する者もなく、農地が荒廃してきた。こうした中W.B.では、不満に堪えかねたパレスチナ人の動きが活発化し中東紛争の一つの火種になっている。支配と暴力の悪循環が世界各地で問題を起こし、それが引いては大国の国内政治に多大な影響を及ぼす（中東危機が引き金となったヘイグ国務長官辞任）事を我々は認識せねばならない。

その悪循環の一つの適例として最後に、米ラテンアメリカ（南米）関係が討論された。国内市場の未形成、都市の肥大化、を抱える南米諸国は、暴力で国内を支配する軍政もしくは独裁的政権下にある。彼ら政権は暴力の面でアメリカと軍事援助（MAPプログラム他）、武器輸入を通じ密接に結びつく一方、近代化の面でアメリカ系多国籍企業（MNC）とも深い関係を持っている。こうした事実は70年代初頭のチリにおけるITT事件等で露骨にその姿を現わす事もあるが、たいていは、アメリカ他先進国の国内問題を含めた様々な

要素が織りなす悪循環の中で、増々密度の濃い物として育まれていくのである。例えば、アメリカは自国のラ米への支配力を軍事的側面を通じて維持し、ラ米政権はその軍事的援助、そしてそれと結びついた経済援助による近代化、を通してその地位を維持するという構図が存在する。又、MNCはラ米の近代化にとって不可欠のものとなり、その間、トランスファープライシング操作等を通じMNCはラ米の資本を搾取しているのである。今、ラ米に求められているのは現政権の打倒とか、外資系企業の国有化といったレベルの低い問題でなく、国内市場形成を基盤とする内発的発展への意識覚醒なのだ。日米その他先進国は政府レベルのみでなく、MNCのような企業も取り込んだ、広く民衆レベルとのフォーラムの場を設けるべきである。

以上が我々の今回のテーブル討論の要旨である。紙数の都合上一部の討論を割愛してしまった事を許して欲しい。

### IV FIELD TRIP

日本そしてアメリカでの我々のTRIP先、及びお会いして話をうかがった方々は次の通りである。

（日本）野村総合研究所。関寛治東京大学教授。

（アメリカ）VOICE OF AMERICA。合衆国商工会議所スワンソン博士。グリシャム下院議員。世銀。LEHMAN BROTHERS KUHN LOEB（全米六位の投資会社）。日米欧三極委員会。以上フィールド・トリップは時間の制約がありさほど内容の濃い討論が出来たとは思えない。しかし学生としてJASCでしか得られない

貴重な体験であった。ワシントンでの国務省レセプションで我々“国際関係”の日本側テーブルメンバー4人がホルドリッジ国務次官補を囲み、日米通商問題、軍事問題、南北問題について、ワイングラスを片手にヒート・ディスカッションをした事がまるで昨日のように思い出される。又、フィールド先で会ったアメリカ人がみな（女性も含め）、親切にかつ自分の職業に自信と誇りを持って我々に接してくれた事も大いに印象に残った点だ。

## V エピローグ

今年の会議も終わり8人のテーブルメンバーは今それぞれ地球の反対側で新しい生活をエンジョイしている。この夏の成果は、我々が今後、人生における幾多の問題にぶつかった時、見えてくる事と思う。“国際関係”を学ぶすべての人、来年このテーブルを志願する諸君に言いたい。冒頭述べたよう、たとえ

経済的文化的側面を取り扱っても、そこに明確な問題意識がなければ、まさに“国際関係”は単なる知的ゲーム、趣味に過ぎないという事だ。人間の価値観、善悪の基準、或いは愛といった問題、そうした問題を自分のやっている国際関係を通じて常に考えるようにして欲しい。その時はじめて国際関係という学問は諸君にとって実りあるものとなり、将来いかなる苦境に立った時も、揺るぎない自信を諸君に与えてくれるものと筆者は思う。最後になったが、健康上の理由で今回会議への参加を途中断念の止むなきに至った我が国際関係テーブル9人目の仲間である Valarie Mark という女性がいた事を付記しておく。そして、ワシントンでハンバーガーショップを、わざわざ案内してくれた彼女の優しさに改めてありがとうと言いたい。来年も素晴らしい会議が開かれる事を希望している。

SMILE!

## 第 三 世 界

慶応義塾大学4年 金融  
窪 田 祐 司

私の属していた第三世界の分科会は、各自のペーパーをもとにした討論とフィールド・トリップの二本立てであった。各自のペーパーの内容は以下の通り。

Doug Hillary 多国籍企業と第三世界  
Jean Sullivan 特になし  
Ken Bonds ラテンアメリカ  
Stephanie Bergman 多国籍企業と第三世界  
菅原鈴香 フィリピンの教育問題

岩島牧夫 インド・中国の人口問題  
滝田祥子 価値観から見た近代化  
萩原浩幸 自立更生への道  
窪田祐司 国際機関（世界銀行）の問題点とあり方

フィールド・トリップとして、ワシントンD.C.ではVOA（Voice of America）、世界銀行、Peace Corps、ノースキャロライナでは、Africa News、IFRP（In-

ternational Fertility Research Program)、そしてデューク大の学生 Ann、最後にニューヨークでは日米欧委員会であった。さて、これからは司会者にバトンタッチして、第三世界分科会を振返ってもらいましょう。

司会者：今日の主席者は第三世界分科会の日本側から、建前君、本音君、好き好き君、そして米国側からレーカン君の四名です。それではまずフィールド・トリップについて感想はありませんか。

レーカン君：僕はボランティア活動に興味があったので Peace Corps がおもしろかった。Peace Corps とは発展途上国の生活向上に協力する機関で、米国市民のボランティアを発展途上国へ送り出す仕事をしている。たまたま、同じ分科会の Jean の姉さんがここで働いているのでお話を伺う事が出来た訳だ。

本音君：私は Peace Corps にしても Africa News にしても、活動の限界というものを感じたな。それは日本側の定例会で、東大の関寛治教授がおっしゃられていた「NGO（非政府組織）の限界」というものかな。

好き好き君：つまり資金と人材の不足か。どんなに頑張っても政府や国際機関、例えば世銀とかには、資金・人材の面ではとてもかなわない。そうだ、第三世界の日本でのフィールド・トリップ、即ち、日本ボランティアセンターでも同じ事を痛感したものだ。

建：でも政府から援助を受けていないので、資金・人材の許す範囲で自由に動く事が出来る訳だ。

好：だが、実際は難しい。例えば Africa News は Africa に関する情報を収集し、それをまとめて新聞を発行している。これには社説はない。その理由は、出来るだけ多くの

人から Africa News は客観的情報を流しているという評価を得る事で発行部数を伸ばそうとしているからだ。その点で社説は邪魔。だから資金面の制約は非常に大きいと担当の方が話されていた。

本：とにかく、客観的情報を流そうという点では、日本のスポーツ新聞とはえらい違いだ。

建：皆さん御存知のVOAでも「客観的情報」の重要性を強調していた。

レ：VOAなんて知らなかったよ。

好：実際、レーカン君を含めて米国側参加者が、VOA放送を実際に聞いた事がないどころか、VOAそのものを知らない人が多くて驚いた。VOAとは現在41か国語で世界各地にラジオの放送を流している米国の放送局だ。

建：そしてVOAの目的は、他の国の人々に対して、米国、米国人、米国の文化・政策に関する理解を深める事である。

好：道理で米国人があまり知らないはずだ。しかし、なぜ41か国語の中に日本語がないのかな。

レ：それは多分、日本人は英語を理解する（と思われている）からだよ。

本：まあいいや。VOAの基本姿勢、即ち①正確で客観的ニュースと ②米国の政策を正確に伝達との間に矛盾があると思った訳だ。つまり一方的な米国の政策の宣伝ばかりで批判がはいらないのではないかな。すると放送前に必ずDebateが行われるから、偏った放送ではなくなるそうだ。本当にDebateとはそんなに万能なのかな。

建：ともかく、VOAは一方的に情報を流している事になる。この点では、アンという学

生と一緒に話した新国際「情報」秩序と関係ありそうだ。

好：つまり北からの一方的情報の流れを是正し、南も国に応じたメディアを発展させようという動きか。

本：しかし、1960年代にUNESCOでこの動きが生じてからもう20年。あまり進展していないというのが、その時の結論だった。

建：しかも、NIEO（新国際経済秩序）やGN（国連南北包括交渉）の様に、南が北に対して「公正な」秩序を要求するという動きは一般化して来た様に思える。

本：だけど、そういう動きがあると必ず北の反対、特に米国の反対に会う訳だ。例えば我々が行った世界銀行。正確にはIBRD、IDA、IFC、即ち第1・2・3世銀から成る世銀グループにおいてもそうだ。

好：具体的には、IDAの増資に対して米国は消極的。それに世銀では、出資金に応じた投票権、即ち加重投票制を導入していて、例

えば米国21%、英国8%、北だけで約60%の投票権を持つ。これに対し、国連の様に一国一票に近づけようと南は要求している訳なんだが、既得権は動かし難し。

本：そもそも加重投票制下で世銀の中立性は言えるのだろうか。世銀は、学校、ダム、道路、農業等のプロジェクトに融資するのが役割なのだが、そのプロジェクトが北の国によって左右される事は……。

建：でも世銀の担当の方のお話では、プロジェクトの審査は非常に厳しいから、加重投票制だからプロジェクトが中立ではないなんて言えないとの事。それから米国の世銀離れにしても、一時的に増資が遅れているにすぎない。さらに、余程正当な理由がないと、米国は政治的プレッシャーをかけられないそうだ。なぜなら米国一国ではわずか21%の投票権しかないから。

本：とにかく、世銀は開発機関というよりは、市中銀行とあまり変わらない気がした。むしろ融資先を厳しく審査する点では市中銀行以



「第三世界」の参加者  
筆者は2列目右端

上という感じ。実際、世銀は一度も融資が失敗した事がないそうだ。

レ：さて、今度は日米欧委員会。1973年に民間人によって設立された機関で、名前の通り、日本、北米、西欧の三極の集まり。

建：結局、1972年のNixon Shockでわかる様に、1970年代になって米国一国ではもはや leadership がとれなくなって来たので、三極が集まった訳だ。

本：経済的結びつきが断然一番で、文化交流の面はほとんど見られなかった。しかも、トランプの婆抜きならぬ南抜き。だからやはり北の論理中心で南の論理は二の次となろう。

好：その点で興味があったのがIFRP。

建：なぜ北の論理がIFRPでも中心という気がしたのか。そもそもIFRPとは、第三世界の貧困の原因をなしている人口増に対し、母子の健康をも考えた上で、人口を調整する機関。具体的には、人口動態調査や避妊法の開発・普及を行っている所だよ。

本：ただ、第三世界の貧困の原因は果して「人口増」なのかな。私は第三世界の国の内部の「二重構造」にあると思うんだ。つまり少数の富者による土地所有、一方他の多くの者は碌に土地を持たない。即ち農地解放が十分でないという事が原因さ。

好：それに例えばインドでは人口は確かに多い。特に子供の数において。しかしインドでは、子供は一家にとって貴重な「働き手」であって、多くの子供がいて、やっとな家を「養う」事が出来る訳だ。だからいくら避妊法を進めても、現地に合わないから進まないはずだ。

本：それに人口抑制と言うが、一人当りの食

糧で見ると、日本人、米国人はインド人のそれぞれ、数倍、十数倍も消費している訳だ。しかし、世界全体で見ると、第三世界の「人口爆発」の問題は触れても、先進国の大量消費（浪費）の問題は避けているのでは。

レ：とにかく、フィールド・トリップの中で、IFRPと世銀とは、それぞれベーパーと密接に関わっていて非常に興味深かった。フィールド・トリップでは、ベーパーで補う事が出来ない点を見るのも一つの手だが、ベーパーとくっつけた方がより突っ込んだ議論になる。つまり、ベーパー中心の討議と現実とのgap、そして、その理由を知る事が出来るからだ。それにしても今回のフィールド・トリップでは、第三世界の人から第三世界の立場を直接聞く機会が一度もなかったのは残念だった。

司：次に分科会討論について感想をお願いします。

建：討論していても気になったのは、第三世界の人はいったい何を望んでいるのかわからないという事だ。現状維持かそれとも自立更生か。自立更生を達成するまでの過程に北からの援助を求めるのか。求めるとしたら何か。それとも何も求めないのか。政府レベルではなく、第三世界の民衆レベルではどうか……等、全くわからない。仕方がないから想像で済ます。

本：しかし、実はこの点が第三世界の問題を考える時、最も大切なんだ。この点をはつきりしないと、現状分析をした後に、いったい何をどれだけすべきか又はしたらよいかという所で困ってしまう。

好：別に、これは人権など他の問題について

も言えるでしょう。つまり相手の気持ちが変わらないと手の打ち所がないという話。ともかく、今回の分科会討論があまり盛上らなかったと、感じたのも、単に各自のペーパー、特に米国側が現状分析に終始していたからだけではなかった訳か。

建：折角、きちんとした現状分析に加えて行動計画まで打出していても、そんなものかなあという気になってしまう。

本：結局、JASCで第三世界の問題を扱う時、常にこの疑問が付きまとうのだと思う。即ち、日本人、米国人の参加者でいったいなぜ第三世界の問題を話合ひのか、又話合ひって何になるのかという点だ。

レ：それは個々の参加者によって違うと思う。例えばJASCの仲間の中には、少数だが第三世界からの留学生もいたし……。

好：要は、なぜ話合ひかよりも話合ひた事を今後どう生かすかだ。これはJASC全般について言える事と思う。

司：丁度話が今後に移ったので、最後にこれから第三世界について考える人に対しコメントがあれば。

建：やっぱり、ペーパーの討論やフィールド・トリップに第三世界の人を加えるなり、第三世界に関する映画を見たりして、少しでも第三世界の人々の立場・気持ちを知る事が大切じゃないか。

好：その様な実際面を補った上で、「自分にとって第三世界とは何か」「自分は第三世界に対し、いったい何が出来るか」について少なくとも一回は討論した方が良いと思う。

本：つまり私たちにあって日頃あまり、馴染のない問題をいかに「自分の」問題として、

又は自分の問題に近づけて考える事が出来るか試す場にしようという事か。

建：例えば第三世界の問題との類似点を身近に探ってみてはどうか。第三世界同様、スラム街、職層と肌の色の相関等の様に米国国内にも二重構造があるのじゃないかな。

レ：それは日本でも同じさ。在日韓国人等の問題も肌の色が同じだからわからない訳だ。

とにかく、さっき建前君と本音君が言った事を押えんと、たとえ各自の興味や関心がばらばらでも、単なる質疑応答ではなくて「討論」になりそうだ。

好：今回はJASC全体で古切手を集めて第三世界への医療援助の団体へ送ったりした。

又、人権と第三世界の分科会とが中心となってSponsoring child（第三世界の子供への援助）というのを始めた。しかし、これからは90人一人一人が各分科会で不完全燃焼だった点を胸に、社会の中で、自分なりのアプローチを続けてゆくのだろう。つまり今回の討論はこれから明々と自分の情熱・関心の火をともし続ける、その発火点だった訳だ。

司：4年振りの一つの分科会として復活した第三世界分科会も、第35回ではまた分解しました。とにかく今度、新たに第三世界の問題を考えてみようとする人に何か参考になれば幸いです。

<終りに>

各自のペーパーに基づく討論については英文報告書を参考にさせて頂きたい。最後に、準備、フィールド・トリップの時大変お世話になった方々、そしてJASCの仲間、特に分科会の連中にはいつまでも感謝しています。本当に素晴らしい出会いだった。

## 社会における男女の役割

慶応義塾大学4年 経済学

岩川倫子

この文章は是非、男性の方々に読んで頂きたい。多少、差別と言われるかもしれないが、日本の場合、この問題に関しては、あまりにも女性の偏った参加で終わり、根本的な問題でありながら女性だけで無駄足を踏んできた様に思えるからである。男女が平和に暮らしてきた歴史の中で、今世紀、正にその過渡期を迎えていることを、あまり軽々しく受けとめてはならないと思う。現状がベストだと思っている方々も、その状態を保つためにも、一緒に考えて欲しい。

昔から社会における男女の役割は基本的には多分、どこの国でも同じであったと思う。力強く体も大きい男性が仕事をもち、手段に違いはあれ主に経済的に一家を支える役目をひきうけ、比較的繊細で優しい性格をもつ女性は家を守り子供を育てるものとされてきた。ところがその古い伝統に逆らって突如として女達が先に立ち上がり、この役割分担からの解放を主張し始め、様々な権利の獲得を唱え出した。「何故、女が家事・育児をするのか。」「何故、女も男と同様、能力を生かして仕事を持っていないのか。」「何故、セックスは男と女の問題であるのに、女は子を産み育てる苦しみから逃れてはいけないのか。」等々の主張が湧き起こったのである。

歴史をふり返ると、誰もが見てきている通り、何かの解放を要求する原動力や信条はとも強固で、一旦勢いをもつと止まらない圧

力と十分なり得る。必要以上にただ権利の自己主張をし理屈では食い止められなくなる力となる前にこそ、黙って無関心にしていくのではなく、男も女ももっと真剣にかつ冷静に最も正しい方向性を見出す努力をすべきであると思う。

### (一) 家庭における男女

日本の家族は、父親が外で働き母親が内で家を守る、というのが一般的で、両親が終生、子供に対して多少の権限を持っているといえよう。更にその夫婦の役割分担を見ると、男は一家の大黒柱で矢張り家を養っていく義務を与えられ、実際、彼の収入で家族の殆んどが支えられている。片や、女は子供を育て家の切り盛りをする役目で、夫に対しては身の回りのすべての事をやるのがいわば常識とされている様にも思う。例えば、食事に始まり、服の着替え、新聞を取って来たりテレビのチャンネルを変えたりする事まで、すべてである。これは日本の昔からの習慣であり、この社会、風土と密着した伝統でもある事はよく解っているし、それ故、簡単に変えられることでもないであろう。

しかし、それでもなお、この典型的な夫婦像は客観的に見て少し女性に負担が掛かり過ぎていてのではないかと、という議論がある。日中は掃除、洗濯、裁縫に追われ、夕方は子供の世話で男性と同じ程忙しい時間を過ごしているにもかかわらず、夜も夫に献身的に尽



くす。反対に、外で我武者羅に働く男性が、家庭に帰れば寛ぎたいのは尤もであるが、それに甘んじてこの献身的な妻の存在を当たり前のように受けとめ、ひいては彼女を見下しながら威張っている場合がある。更に言えば、男の労働は資本に還元されるが女の労働は公認の善意的奉仕としか見なされないことを思えば、その善意を当然の様に扱われ、偶にそれを怠れば無闇やたらに叱られる女達が家業に嫌気がさすのも無理はないのではない。

一体、男達や子供は女に何を要求しているのか。彼女が勉強するでもなく、お金を稼いで来るでもないために、生産的な事が出来ない存在として、せめて家の中では何から何までやれと言っているのか。もし、そうであれば女性も今後、多に経済自立をする様に努力するといえよう。しかしそうでなく、女も潜在的には男や子供に何の引けもとらな<sup>い</sup>が家庭内の機能上、潤滑油の働きをかつてしているのであるから、その誠意に対して、もっと公正に理解を示さなければ、いまに世の女性は皆、家業に愛想を尽かしてしまうのではないかと思う。この偉大な主婦業に正当な感謝を向けると同時に、時には彼女を休ませる事をしてもいいのでは、と切に思うのである。

因みに、アメリカでは男性も家庭内でもよく働く点を留意しなくてはならない。妻が仕事を持っている如何にかかわらず、食事の用意や後片づけは必要に応じてやるし庭の手入れや大工仕事は当然彼の分野である。これは、女はか弱く男性の労わりを必要としている性であるという中世の騎士道精神の名残りである。また育児に関して言えば、子供の成長は父母が対等に責任を負っており幼ない頃から

親子のスキンシップを心掛けているため子供達も普通は父親と母親の両方に懐く。

アメリカでの問題はむしろ過度の女性に対する親切を嫌がる傾向が出てきている事である。つまりアメリカの女性の一部は、男性と同等である地位を守り通すため、かえって労わりや同情は無用と思っているのである。

しかしいづれにせよ、女性の自立や解放を考えるに最も基本的な姿である家族像の現在の状態をよく把握して対応する必要がある。

## (二) 墮胎における男女

アメリカでは1973年に墮胎が法的にやと認められ、それは女性にも子供を生まない権利が与えられたという画期的な出来事とされた。それまでは主に宗教的罪悪感や男尊女卑の思想の障壁があったが、それらが打破できたといえよう。

確かに墮胎のお蔭で不幸な誕生は避けられる様になったが、同時に性に関するモラルも弛んだ事も事実である。今や女性も男性と同様、どんどんパートナーを変えても責任や負担がある程度少なくなり、育児から解放される選択も与えられたのである。次から次へと女を変えていくある種の男性の姿を女達も真似る事ができる様にもなったのである。しかし墮胎の本来の目的は前述の様に不幸を避けるためであり、それを性の快樂の部分の行き過ぎと新しい生命に対する軽視へと乱用するためにできたのではない。つまり、非常手段として存在するのであり日常手段として用いるものではない、という事である。徹底的に合理化した今世紀、かつて芸術で表わされた人間性の美しさや素朴な愛の尊さを失なわない事を願うのである。

さて、日本ではまた別の動きを見せている。



「社会における男女の役割」の参加者  
筆者は後列右端

既に1948年優生保護法により堕胎は認められているものの、近年、特に若年層の女性でこれを行なう数が増えているため、終戦直後の混乱期に成立しているこの法の改正、つまり経済的理由のみによる堕胎を認めない様にする、が表面化している。日本の場合、堕胎が必ずしも不幸を避けてばかりいるという訳でもない。というのは、堕胎に至るまでは男女相互が関わっていた事であるにもかかわらず、堕胎を行なう段階では女性が孤独にその苦痛を耐えている場合が少なくないからである。問題は堕胎そのものに対する男女の考え方であり、特に若い未婚の女性が両親や親戚ひいては相手の男性に話せないまま堕胎の手術をうける人が多く、まるでそうだったのも女一人の責任であるかの様に見える。確かに他人に知れると、その人の一生を左右する次元にまで発展する事が有り得るが、そこまで彼女を追い込む男性がもつと責任をもつべきであるし、女性の側も自分を捨てて行かない様な男性を選ぶべきであろう。いづれに

せよ、堕胎を行なう段階に至ってしまえば、男女両方が責任を負う事を深く認識すべきであると思う。

### (三) 職業選択における男女

本来、女性に向いていると言われる主婦業よりも、一生のキャリアを持つとする女性が近年増えており、それは前述の家庭内の女の地位の軽視とも多少関連していると思う。しかし生活水準が高まり女子教育も高等化した今日、女も外に出て働こうとするのも不思議ない事であろう。

ところがこの現象への人々の対応は、年代、地区、性別に差はあったものの、初めは冷たかった。男は台所に入っはいけない、とか女房に食わしてもらっている亭主はおしまいだ、とかいったネガティブなイメージが仲々消えなかったからである。しかし徐々にそういう考えも変わり、妻が仕事(プロフェッション)を持つ事は、ある面で彼女が知的で才能があり、その能力を生かせるほどの人物である、という評価も出て来た。最近そして今

後ともその点で、男性も自分の妻を誇れる様になっているのではないかと思う。

しかし、意識の問題ですべてが解決される訳ではなく、現実的な問題として、いくら有能な女性がいても、彼女に対する労働市場の狭小性は甚だしいものである。例えば、日本では男女賃金大系や就業機会に公然と格差が見られ、更に不況になると、その煽りを被るのは女子労働力である。それでも依然として、日本の若い女性の大多数は仕事よりも結婚を選ぼうとしている現実なのであれば、このこともあまり取り沙汰される必要はないし、それなりにいいであろう。

しかし、こういう中で問題となるのは、キャリアを持ちたい女性である。少数派である彼女達は波に逆らって自分の力で厚い壁を破ろうとする。この壁の原因は、勿論、有能な女性を頑なに理解しない男性の変な自尊心もあるが、それよりも、過去の女性の仕事に対する無責任な姿勢により女子労働に対する先入感が形成されてしまった事の方が大きいであろう。つまり、単に高学歴で肩書きもあり、「一生仕事を続ける」と断言し、企業に莫大な投資をかけてもらっても、ある日、突然、私事で仕事をやめてしまう例が多ければ、当然信用をなくすであろう。過去、こういう例が余りにも多く、現在の女性にまで尾を引いていると思う。

日本人の男性は、承知の様に、非常にハードワーカーズである。その彼ら以上に延べにして仕事をする意識と能力が女の人にもあれば、堂々と自分の才能を生かしていけばいいと思う。但しその場合、前述の様に自分の家庭の事をもよく考え、お座成りにするのではなく、自分の立場をよく理解し協力してくれ

る男性と環境を見つかる事が大切であろうし、家庭内の母親あるいは妻として、また外での経済人として、双方をうまくこなし、どっちつかずにならない様に気を配る試練を覚悟しなくてはならないであろう。結局、この場合も、男性と女性の相互の話し合いと理解が最も大切である事を強調しておきたい。

会議を終え、両国の比較を論じつつ感じた事は、日米の人々の意識の多大な差であった。しかし肝心なのは個人個人の価値観であり、「こうあるべき」という法則は有り得ない。要するに自分が納得し満足していただける状況を自らつくる事が大切であり、そのためには幅広い知識を吸収し、自分に最も適的な立場を見つかる努力を怠ってはいけないのである。

#### <テーブルメンバーと論文>

A Japanese Family - Carrie Zepeda  
Induced Abortion & Men's

Participation - 清川 貴子  
Liberty & Abortion Issue

- Tsuney Yanagihara  
Monkey See Monkey Do

- Kim Robinson  
Women in Mass Media - 木村 明子

Women in the American Legal System  
- Sheryl Wilkins

Men & Women in the United States  
- Susie Cho

Part - Timer - 益田 栄壮  
Some Approach Towards Analyzing the

Gap Between Men & Women in the  
Labor Force in Japan - 岩川 倫子

# 企 業 問 題

関西大学 4年 貿易業務論

村 田 隆 ほか

## I はじめの言葉にかえて

今回の学生会議で我々企業テーブルは、米側4名、日本側4名という理想的な参加者構成で、数多くの野外研修、多種の問題点についての討論等、かなり活発な活動を行う事ができました。現在の日米関係で最も重大な問題と思えるものに、貿易摩擦に代表される経済問題と防衛問題がありますがこれらは、いまだに解決を見ず、次の世代、即ち我々に残された課題といえます。これら両問題に対して、学生としての卒直な意見交換を行えた事は非常に意義深い事であったと確信しています。それでは以下、四つの分野に別け、我々の行った行動について報告して行きたいと思えます。

## II 貿易問題

日米間の貿易収支は、近年、一貫して日本側の出超であり、日本市場の閉鎖性の問題も含み、貿易問題は日米関係において最も重大な課題であると言えます。それだけに討論は活発なもので、多くの問題提起、反論等がなされました。実際に議題となったのは、a) 半導体等、ハイテクノロジー分野、b) 農業分野でした。ここでは、具体的に日米双方からなされた議論を含みながら要約して行きたいと思えます。

a) 半導体等、ハイテクノロジーに関して

現代社会は、エレクトロニクスを抜きにし

て考える事はできません。とりわけ日本のエレクトロニクス技術は、先行していたアメリカに着実にキャッチ・アップを行い、日本製64K RAMは、アメリカ市場で70%のシェアを占めるに至っています。この成功の理由としては、i) 品質管理の優秀性 ii) 長期的視野からの積極的な設備投資 iii) 民生品への供給が主なため、大規模な生産と、それによるコスト・ダウンが可能であった事、などが考えられます。しかし、これら日本製品の攻勢に対し、アメリカ産業界の危機は大きく保護主義の動きは明らかに見られます。ここで自動車問題も含め、保護主義の抬頭についての評価が日米双方からなされ以下のように意見の一致を見ました。即ち、「保護主義は当事両国に損害を与えるため、回避されるべきであり、現状の問題は、品質管理の強化等競争力向上の努力により解決されるべきである。」という事です。実際、ボストンで訪れた、データ・インスツルメント社の工場の壁には、「品質の向上が、我々の生活を守る」と書かれたポスターを見つけましたし、品質管理面での努力は着実に進められている様に感じました。ただ、アメリカ側学生の言った「70万人に及ぶ失業者を、まのあたりにした時、(我々は)彼らの声を無視はできないという事を(日本側も)理解すべきだ。」という言葉は、なぜか心に残る物でした。アメリカ経済の問題の重大性と日本にとってのアメ

リカ経済の重要性を考え、長期的視野にたった対応策が急がれるべきであると痛感しました。

#### b) 農産物問題に関して

農産物の市場開放の視点は、自由化は経済的解決策としてでなく、政治的解決策として考えられるべきであるという事だと思えます。この問題に関しては、主に日本側から時期尚早であるなど、多くの反論がなされました。一方、自由化の論拠としては、i) 農産物の自由化は、今や全ての日米貿易問題の象徴となっており、その政治的波及効果が大きい事、ii) 日本農業の生産性向上のため競争の原理の導入が必要な事、がありました。とりわけ、i) の議論は、米通商代表部日本担当のジョセフ・A・アーシー氏によっても強調されていました。経済大国としての国際経済での役割を考えると、自由化への具体的プログラムが作成されるべき時期が来ており、そして実行に向け、強力な政治のリーダー・シップが問われているのではないのでしょうか？

### III 金融問題

金融問題に関しては、a) 米国金融革命、b) 日本の金利自由化、c) 日米金融摩擦について、投資銀行メリル・リンチ社の訪問も含めて討論を行いました。

#### a) 米国金融革命

アメリカでは1930年以後、銀行法、証券法の下、金融構造は安定を維持していました。しかし石油ショック以後、インフレと高金利の定着を背景に、1980年の金融制度改革法で金融制度は大きな変革を遂げる訳です。具体的には i) 預金金利の上限規制であるレ

ギュレーションQの段階的撤廃 ii) 全ての金融機関に預金準備率の積み立てを義務づける80年通貨管理法の制定等である。これら改革の原因としては、i) 高インフレ下の消費者の金利選好の結果、メリル・リンチ社のMMFの成功等により金利自由化の要求が高まった事、ii) については、自由金利、マネーサプライの管理の観点より、国立銀行以外の銀行に対する指導力の強化がなされた、等の議論がありました。

#### b) 日本の金利自由化

過去においては、厳しく規制されていた日本の金利も、現在においては、コール市場、手形市場における自由化の導入、CDの認可等、着実に自由化が進められていると思えます。これは、i) 企業の資金獲得源の多角化消費者の金利選好の一般化、ii) 80年の外国為替法改正等による金融の国際化など内外からの要求でもあると言えます。ただ、完全自由化については、政府並びに金融機関において、危惧も多く、その早期実現には否定的な意見もありました。

#### c) 日米金融摩擦

サービス部門における日本市場の閉鎖性の象徴として、日本では度々取沙汰される金融摩擦だが、米側学生にとっては身近な問題とは理解されていないというのが、一般的な印象でした。よく非難の対象となる点は、「日本における外銀が、邦銀の買収、支店の設置その他において、不平等な取扱いを受けておりそれが円資金調達に制限、円の国際化の遅れ等をもたらしている。また1950年をピークに在日外銀の収益が下降線をたどっている伏線となっている。」という事だと思えます。だが、私たちの議論で実際に問題となったの

は政府による、法律、行政指導による規制と  
いった問題でなく、邦銀の高収益、特徴等に  
対する考察でした。それらは、即ち、契約関  
係を越え一連託生ともいえる日本の銀行と企  
業の関係に外銀が入り込むのは困難である事、  
顧客獲得のための努力が多くなされている事  
でした。外銀の場合は、魅力的な金融商品作  
る事のみ焦点が定められているという論議  
も出され、経営方法について改善の余地が  
あるのではないかという事でした。以上、新  
たな試みとしてなされた金融問題という事  
で専門的知識が欠けていたという点で困難な  
点もありましたが、学生レベルでの視点で、  
興味深い議論がなされました。

#### IV 日米の企業経営の比較

この2・3年、欧米における日本的経営の  
人気は驚く程高く、私たち企業問題テー  
ブルにおいても重大な議題となりました。それ  
だけに、North Carolina州商工局、Boston  
のData Instrument Inc. 等への訪問、イ

ンタビュー、討議と、意義深い活動を行う事  
ができました。実際の論点としては、a)米  
国における新しい労使関係、b) Quality  
Control に関する考察、c) 日本の経営の移  
殖、という3点に集約されると思いますので、  
順次報告をしたいと思います。

##### a) 米国における新しい労使関係

米国の労働組合の発展は、New Deal 政策に  
おける保護に始まりました。以後、産業別組合に  
よる組織力アップを経て常に経営側と厳しく  
対立し、労働条件の改善、高い賃金上昇の確  
保等多くの成果を果たして来たと言えます。一  
方、AFL-CIOに見られる様にその政治  
的活動は、政府の政策決定に多大な影響力を  
持つに至り、その地位を益々確固なものとし  
てきたのです。しかし石油危機後、強い労働  
組合は、コストアップ、生産性の低下により、  
米製品の国際競争力低下、米経済の不振、レ  
イ・オフの増大と皮肉な結果を導く事となっ  
てしまいました。そして現在、組織率の低下  
も相まって、米労働組合において、新たな方



「企業問題」の参加者  
筆者は後列右から2人目

向性、即ち、経営側との雇用保障を条件とした妥協による経済再活化への協力への模索がなされています。一方、経営側は、QOサークル、QWL (Quality of Work Life-Learning)等の導入により、労働者の経営参加、生産性・品質向上に本格的に取り組んでいると言えます。この点に関し、ライシャワー氏が、我々の質問に答え、米国伝統的労使関係を19世紀的、戦後日本の労使関係が20世紀的、やっと米国が20世紀的になりつつあると指摘されたのは印象的でした。伝統的労使間のギャップ、品質管理と生産ラインの分離等、多くの問題点を含みながらも新しい労使関係が経済再生を目指して、着々と発展しているのは事実だと思われました。

#### b) Quality Controlに関する考察

具体的な経営管理手段に関する考察としてQCに関する問題提起が米側によりなされ、それに対する質疑応答等がなされました。焦点としては、米国でのQCの一般化、参加状況、問題点等でしたが、日本人労働者の参加動機が自己啓発、経営参加意識に基づくのに対し、米側のそれは、経済的インセンティブ即ち報償金に重きがおかれ、両国の労働に対する概念の相違を垣間見たように感じました。

#### c) 日本の経営の移植

野外研修として、North Carolina州工局国際部を訪れた我々は、日本担当のJohnson氏から、日本企業のNC州進出について話を聞く事ができました。NC州は米国で三番目に日本資本の進出が多く、その利点として、高度科学技術の研究、優秀な人材の確保等、州自体としての努力、ならびに、南部特有の穏健な労使関係等、日本の経営移植の為の下地がある事、実際に進出した日系企業が

成功をおさめている事等を強調されていました。

## V 防衛産業問題

7月30日、Washington D CにおいてInternational Business table及びScience and Technology tableの合同によるDefense Forumが開催されました。昨年来、Capitol Hillでは、日本の防衛産業へのライセンス供与が問題視されています。というのは、現在のライセンス供与は、日本の一方的な技術の取得につながり、日本の自国生産、他産業への転用へとつながるという危惧があり、ひいては米国の防衛産業の衰退、雇用減をもたらすというわけです。

一部の「防衛議員」達により火の手のあがったこの問題を経済的、軍事的に評価するために、以下の方々の基調報告の後、質疑応答、ディスカッションを行いました。

○ Mr. Robert D. Mullen

シンガー・コーポレーション

○ Mr. Charles Richardson

マーチン・マリエッタ・エアロスペース

○ Mr. Nobuo Hayashi

三菱エアクラフト インターナショナル

○ Commander James Auer

米国防総省

○ 志方俊之氏

日本大使館 防衛駐在官

○ Mr. Patrick Morris

アメリカン ユニバーシティ

○ 吉田直人氏

慶応義塾大学

まず、防衛装備調達のプロセスの日米比較研究が行われました。基本的には日米に大き

な差異はありませんが、日本の場合、装備調達における中期業務見積りの重要性、貿易摩擦との関連、防衛産業の脆弱性など様々な問題点が明らかにされました。とりわけ、日本の装備調達を決定づける要因に関し志方氏が明解な説明をされていたのが印象的でした。

続いて、対日軍事技術供与を考える際には  
① 軍事技術のソ連へのリーク ② 米同盟国の防衛装備規格同一化 ③ 完成品の市場確保を目指す米企業の思惑 ④ 技術吸収し自主開発を目指す日本企業の思惑 ⑤ 通産省の航空産業育成政策等の要因を考慮せねばならぬ事が明らかにされました。討議の過程でパネリストが合意に達したのは、現在のライセンス供与システムは日米双方にとり利益をもたらすという事です。まず、日本側にとって、限りある時間と防衛予算の制約のもとで、一定水準の防衛装備を持つには、このシステムが不可欠であるし、米国にとっても、同盟諸国との防衛装備規模平準化、同盟国である日本の防衛産業の基盤固め等多くのメリットが存在する訳です。この事については、ワインバーガー国防総省長官がNHKのインタビューで言明した事からも明らかだと思われま

す。将来の展望として、米国は日本に「日米防衛装備共同開発選択の可能性」を要望していくが、それは政府間ベースではなく、あくまで企業間で行われるだろうという結果に落ちついたと思います。日本としてもR&Dコスト削減という面からも共同開発を考えねばならないが、その際も武器輸出三原則をなくさずしにすべきでないという事で、出席者の合意を見たといえます。Forum後、パネリストの方々と会食を持ち、我々学生に防衛産業について新たな視点を与えて頂いた事も含め、

やや実務的議論に流されたきらいはあるものの、このForumが我々に与えてくれたものは大きく、Frontierの問題に取り組む姿勢は今後の学生会議では是非継承して欲しいと思います。

## VI 終わりにかえて

以上の様な成果をおさめた、今回の学生会議でしたが、我々のこの会議が完全なものであったとは言えないと思います。これら一ヶ月の共同生活が、日米関係の将来への具体的なプランニングを与えてくれるには、アメリカは余りにも理解するに大きく、日米関係は、複雑かつ深いものでした。ただ日米が共有する諸問題に対する即効薬はなく、まだまだ地道な体力作りをなおざりにする事のできない段階にあると確信した次第です。それだけにこの様な会議の重要性は大きく、その証明は我々参加者のこれからの生き様にゆだねられていると言えるでしょう。最後になりましたが、会議の成功のために、貴重な時間を割き協力をして頂いた方々に心より感謝の意を表したいと思います。

(野外研修)米通商代表部、US & ASIA Institute、North Carolina州商工局、New York Stock Exchange、メリル・リンチ社、Data Instrument Inc.



# 社 会 変 動

関西学院大学 4年 社会学

藤 井 薫

前回の会議での政治参加テーブルから受け継がれた社会変動テーブルは、一貫したテーマを、現代社会において民主主義はどうあるべきなのか、また個人は政治とどのように関わっているのかを分析することに置いた。社会で見られる様々な現象の中で、アメリカ側は「クェーカー教徒の非暴力主義」「イデオロギーのもつ客観性について」「アメリカにおける4つの少数民族集団」「アメリカ労働市場で増加する女性の労働力」の4点を中心に発表を行なった。一方、日本側は、「全学連を中心とする左翼運動の変遷」「右翼思想とその構造」「明治以降の政治家汚職事件と選挙について」の3点から論じた。

フィールドトリップとして、ワシントンでは、内戦の続くエルサルバドルで5年間、難民救援活動にボランティアとして従事してきた男性から、中南米の実情について話を伺った。デューク大学では、War Register Leagueの代表者 - 彼は、良心的徴兵拒否者を支援する一方、高校生に徴兵登録(Draft)をしないようパンフレットや手紙で呼びかけている。グループのメンバーは約2000名や、ノース・キャロライナ州のCommunist Workers' Partyの代表者、ポーランドからフルブライト 交換教授で、政治学専攻のクリスチナ女史からそれぞれ2時間、スピーチ及び質疑応答の機会に恵まれた。またニューヨークでは、Democratic Social Partyの事

務所を訪れ、総評の招きで来日経験のある代表者と、日本と米国の労働組合のしくみやストライキの相違、平和運動に対する見解などを伺った。

今会議のシンポジウムの1つに社会変動シンポジウムが催され、各テーブルのメンバーがそれぞれの社会的な活動を行っている市民団体や研究所に出向き、それぞれの活動状況と見解、今後の展望などをきくことで、特に日本側参加者は、日本とのちがいに感銘をうけたようであった。特に、我々のテーブルでは、それぞれの訪問先での印象、感想などを述べ、テーブル活動の一環に繰り込むことで、このシンポジウムを十分活用できたように思う。

さて、ここまでは、淡々と活動状況を述べてきたが、今回の活動で特徴的に思えるのは社会変動という1つのテーマを、市民団体や草の根運動に近い形で活動している人々といった存在に焦点を絞って考えたということである。アメリカの場合、各州で、いろいろなイデオロギーを持った人々が、独自の活動をしており、全国的規模の組合活動は、例えばAFLなど、知名度はあるが、活動団体総数からいえば、絶対多数とはいえない。したがって、それぞれの州に散らばった団体間の連絡をとったり、まとめ役をひきうけ、より政府に対する働きかけを強めたり、社会的影響力を強くする団体も存在している。この一例が、DSPであり、ニューヨークにおける大

規模な反核集会やデモンストレーションの立て役者となったこともある。同様に、コミュニスト・パーティも数多くあり、ソ連から正式に承認された団体に統一されるのではなく、それぞれ独自の活動を行なっている。したがって彼らからすれば、日本共産党が唯一であることに却って疑問を感じたようであり、この種の質問に、我々は答えに窮してしまい、日本人の国民性によるものであろうという、苦しい説明で逃れたりした。各団体の代表者の親近感にみちた対応と素直な意見に、日本では、委員長と話すとき、こんなに打ちとけられるものだろうか、と思ったりもした。こうした接触によって、なるべく多くの団体、多様な活動をしている人々と会うという目的は達成されたが、できれば俗にいう「体制側」の人々の意見もききたいという声もあった。もっとも、この要望は、トライアログという日米欧の学術経験者が主催している中立団体の事務局長に会うことで、かなえられてはいるのだが。

では各人の発表をまとめてみたい。

ジュリア・ヘヴンの「クェーカー教徒の非暴力主義」は、彼女の高校時代の体験を基に良心的徴兵拒否について扱っている。クェーカー教徒は、東海岸のあちこちに片よって点在しており、総人口に対する比率は多くはないが、彼らの活動は地域社会に対して、かなりの影響力をもつ。これはユタ州を中心としたモルモン教徒の社会的影響によく似ている。クェーカー教徒であることを全うするため、たとえ「裏切者」「愛国心を持たない者」といった社会的制裁を受けても、武器を手にして戦場におもむくことを拒否するといった事例は、両大戦やベトナム戦争を通じて多くあ

った。このため軍当局は、看護兵や後方勤務という職にふりかえることで、拒否者を減らそうとしたが、依然、拒否するものも多く、彼らの幾人かは、カナダなどへ逃れ、市民権を抹消されたまま暮らしているという。キリスト教では、神の国は現世の国家よりも重視されており、死後の栄光は神の裁きによって決まる。この良心的徴兵拒否は、アメリカにおいても、特殊な例であることにかわりないが、クェーカー教徒の本来の活動は、難民の救援や、社会的に恵まれない人達のためのボランティアといったことに集約され、社会変革というよりも、既存の社会でよりよい生活を実現する方向にあると考えた方がよい。

ギャリーの「アメリカにおける4つの少数民族集団」で、彼は主としてインディアン・ユダヤ系アメリカ人・アイルランド系アメリカ人をとりあげた。黒人に関しては、自身が白人であり、客観的立場をとりえないということから略された。インディアンというアメリカの先住民族の大半は、今だに、居住地に住み、その大半は失業状態にあって国からの生活保護をうけてくらしている。教育や福祉サービスなども与えられてはいるが、土地を奪われたという傷手は、民族的な傷となり、就労意欲や就学意欲の低いまま、今日あるのが実情であるという。しかし、インディアン（と呼んでよいものか、私自身迷うのであるが）としてのプライドは高く、働くという行為をしなくても食べていけることから、フリーライダー論（ただ乗り論）ともいえる。楽をして得をする方をえらぶ、という見方を一般からされている。この印象が、「怠け者」というレッテルとなり社会的差別が正されることのないまま、インディアン側にとっても、



「社会変動」の参加者  
筆者は後列中央

その地域社会にとっても何ら有効打のうてぬまま、今日にいたっている。一方、ユダヤ系アメリカ人・アイルランド系アメリカ人は、自らの社会的地位の向上を一貫して目指してきた。前者は、宗教的な特性を保ったままであるが、後者は、民族的な特性を捨て、アメリカ社会に同化することによって、成功してきた。前者の代表格が、ブラウン元国防長官であり、後者は故J・F・ケネディ大統領であった。我々からすれば、外見の特徴ではWASPと判別できないアイルランド系アメリカ人が、他のラテン諸国からの移民とちがう、民族的特性をなくしていることに、それほど問題意識をもたなかったのだが、現在の「ルーツ」ブームの影響があるのかもしれない。

リアンの「アメリカ労働市場で増加する女性の労働力」は、主に女性の職場差別を、生計を支えるために働かざるをえない女性労働者の実情からとりあげている。この発表は、男女の役割テーブルとのインターテーブルで行なわれ、女性陣の活発かつ積極的な意見に

対し、男性陣のひかえめな態度が対称的であった。確かに、現実の社会では女性は家事労働の大半をこなさざるを得ず、男性と同量の仕事量と責任をも全うするためには、男性側の積極的な理解と協力が処要なのであるが、そこは理想と現実の相違もあって、今後もなかなか実現されそうにない。

スチュワートの「各イデオロギーにおける客観性」についての発表は、正直、我々全員がどの位まで理解できたかわからない。一つには、内容がかなり抽象的であったこと、そして、発表時間も充分なくかなり割り引いておこなわれた為である。しかし、彼のいう民主主義という概念が、現実には例えば平和運動をとりあげる場合、政府の方針と一致しない時、どういう風に展開されているのか、黒人解放まで含めた社会運動が、南部でどのような迫害に会っているかといった事例から、どのように歪められてうけとられているか。彼の提起したテーマは、イデオロギーにかかわらず、権力が一定の人々に集中することに

より、政府が本来そうなるべき機能を失い、民主主義というものから遠ざかっていくということになったと思う。

さて日本側は、右翼、左翼そして選挙と政治カラーの変化の3点から論じたものである。現在の社会の3側面を表わしたかったのだが、それがどれ位成功したかは、わからない。全学連という、1960年代を中心とした一連の運動が、しだいにセクトに分かれ、反目しあい設立当初の意味あいを失っていく過程は、我々もよく見聞きする。一方、右翼思想も、本来は、原始社会主義に似た概念であり、天皇を絶対視し、皇民は全く平等とする。それ自体階級意識をもたないところが特徴だが、これが、戦時中にどのように歪められて宣伝

されたのかも周知のことである。民主主義政治を守っていたはずの日本が、ヒトラーのような独裁者なしに、全体主義に陥り、敗戦という帰結をむかえるに至った要因は何であったか。我々の発表に、これに対する明確な答えはない。アメリカ社会が抱えている深刻な問題を日本は回避してきた。明確な社会差別や人権問題が表面化することは少ない。実際、すばらしい国であり、社会変動の必要性はないのかもしれない。しかし、私たちだけが平和で幸福な生活を送っているからといって、それが本当の幸福な社会といえるのだろうか？この疑問を常にもつこと — それが一番大切なのではないだろうか？

## ソーシャル・チェンジ・シンポジウム

大阪大学 4年 英語学

河合雅美

ソーシャル・チェンジ・シンポジウム（略してSCシンポ）は最初、一個の独立したシンポジウムとしてではなく、平和シンポジウムの第Ⅰ部として計画されていました。日本人側実行委員としては、この第Ⅰ部において、原爆の脅威、ヒロシマ・ナガサキの惨状、ベトナム戦争などについて、フィルム・フィールドトリップ等を通じて学び、8月6日の原爆記念日にあわせて平和シンポジウム第Ⅱ部では第Ⅰ部で学んだことをもとに、私達の間でディスカッションを行ない、平和へ向けて私達の決意を固めていこう、といった構想を抱いていました。大筋においてはアメリカ側実行委員もこれに同意したものの、日米両国に別プログラム作りを進めていくうちに、「平和シンポジウム」ひいては、「平和」の捉え方そのものに、日米でくい違いが生じてきました。その結果、当初私達が頭に描いていた平和シンポジウム第Ⅰ部とは全く違った形の、独立したシンポジウム、SCシンポが出来上がったのです。

それではその経過についてももう少し詳しく述べておきましょう。日本側実行委員が「平和」を「戦争」に対するものと捉え、なかでも問題を「核」に絞って考えていたのに対し、アメリカ側は「平和」を単に戦争のない状態としてではなく、より広く、「人権が守られている状態」として捉えました。そして、私達がこのシンポジウムを通じて目指さなけれ

ばならないのは、この「人権の守られた状態」、つまり「平和」を達成するにはどうすればいいのかということをもより具体的に考えることだ、と思いついたわけです。そこでこのシンポでは、目標を達成するための、社会変革を行なうための方法にスポットをあてることにしました。一つの目標を達成するためにとられている様々な方法をながめることによって、私達が達成しようとする「平和」への具体的方策が見えてくるはずだ、というわけです。そして、人権の抑圧された一例であり、現在のアメリカ社会の中で最も関心の高い問題のひとつである人種差別問題をとりあげ、この解決へ向けて人々がいかに動きかけているかを見ようということになったのです。

こうして、平和シンポジウムというよりはむしろ人種問題シンポジウムに近いような形で、一個の独立したSCシンポジウムが行なわれることになりました。単に平和について論じるだけでなく、平和を達成するための「ソーシャル・チェンジ」の方法を探らなければならないという点に着目したのは、なかなかよかったですと思いますが、そこへ人種差別問題が入ってきたのに日本人側はややとまどいを覚えたのではないかと思います。

7月29日、SCシンポ当日のスケジュールは午前中、人種差別問題に関する講演及び質疑応答、午後からは小グループに分れてフ

ィールド・トリップ、ということになっていました。会議がはじまって一番最初のシンポジウムということもあって、皆、「いったいシンポってどうするんだろう」といったような面持ちで、そろそろと講演会場に集まってきました。まず最初はアメリカ側参加者の一人 Scott のスピーチです。

ところで、ここでお断りしておかなければならないことがあります。私は平和シンポ及び SC シンポコーディネーターということでこの SC シンポの午前の部の司会をし、またこの報告書を書いているわけですが、もしかしたら私はこの報告書を書くのにもっとも不適当な人間かもしれません。なぜなら、私は司会をする都合上、講演者に肩書きを聞いたりと、講演の英語がはよくなってくるとゆっくりにしゃべるようにいっしょうけんめい合図したり、等々、こういったことを緊張でドキドキしながらやっていたので講演の内容をほとんど覚えていないのです。従って、講演の詳細い内容については英文報告書を読んでいただくことにして、ここでは簡単に講演者の紹介と印象を述べておくにとどめます。

講演者は3人ありました。まず最初は、LA RAZA 国民議会副会長の Guadelupe Saavedra 氏です。LA RAZA 国民議会というのは、イスパニア系アメリカ人といわれる、チカノやメキシコ系人達の社会的、経済的地位の向上のための組織です。Saavedra 氏自身もイスパニア系のアメリカ人で、大変なまりの強い英語を話されました。アメリカにおけるイスパニア系アメリカ人の現状及び LA RAZA 国民議会の活動について話されました。

2人目の講演者は、移民局局長事務所顧問

の Ralph Thomas 氏でした。彼は主にアメリカの移民政策、最近の難民受け入れとその影響といったことについて話されました。大変忙しいなかをわざわざ来て下さったようで、予定より少し遅れてやって来られ、1時間程の講演と質疑応答を終えるとすぐに帰ってゆかれました。

最後の講演者は David Rose 氏で、彼は司法省公民権局連邦施行課課長でした。彼は、公民権運動の歴史と現状について話をして下さいました。この Rose 氏は、講演前に私が、日本人にもわかるようにゆっくり英語を話して下さいと頼んだところ、快く、「私は外国人に英語を教えたことがあるから、外国人相手に話をするのは慣れている」と承諾して下さいたのはいいのですが、話に熱が入ってくるとどンドン話すペースが早くなり、私は横からいっしょうけんめいペンを振ってペースを落とすように合図しなければならなかったのを覚えています。

講演後、午後は小グループに分れ、フィールド・トリップに出かけました。予定されていたフィールド・トリップ先は以下の6つでした。

1. American Friends Service Committee (クエーカー教徒の団体)
2. International Association of Machinist and Aerospace (労働組合)
3. National Labor Law Center (労働者の権利擁護の団体)
4. Committee Against Regulation & Draft (徴兵制反対運動団体)
5. Institute for Policy Studies (アメリカの政策研究及び提言機関)
6. National Organization for Women

(女性解放運動団体)

この中で、1番の American Friends

Service Committee へのフィールド・トリップは、会う予定になっていた人と行き違いになって、結局、何もできずじまいになってしまったので、実質フィールド・トリップ先は、5カ所ということになってしまいました。

これらのグループが全部戻ってきた時点で、各グループからの報告を行ない、そのあと全員で「ソーシャル・チェンジとは何か」について話し合いました。いろいろな意見が出ましたが、まとめれば、ソーシャル・チェンジとは人々の意識を目覚めさせることである、ということになると思います。その手段に関しておもしろい指摘がありましたので、ちょっと紹介します。

何か社会変革を行なおうとするとき、アメリカ人はどうやらまず「法律」を変えることに手をつけるようだが、日本人は「教育」によって人々の意識を変えようとする。例えば

人種差別撤廃、女性解放運動などは、アメリカではE R Aなどに見られるように、まず憲法改正をしようとした。日本ではそれは、「同和教育」によってなされようとしている、というのです。

この原因としては、法の持つ社会的効力の違い、人々の考え方の違い、また教育制度の違いなど様々なことが考えられます。重要なのは、私達が何らかの形で、社会変革・ソーシャル・チェンジを行なおうとするときには、こういった社会的背景を十分考慮に入れたうえで、どういった手段をとるか決定しなければいけない、ということでしょう。

ソーシャル・チェンジというある意味ではとらえどころのない、考えにくいテーマのシンポジウムで、当初の目的を十分果たせたかどうかは疑問ですが、講演・フィールド・トリップなどを通じて、得るところは十分にあったと思います。

## 平和シンポジウム

大阪大学3年 西洋史学

西岡 浩美

何年前か前、合衆国政府が核戦争に備えてシエルター内に七十年分の食糧と医薬品を蓄える計画を考えていると聞き、あまりの馬鹿らしさに、現実化するはずがなかりうと思ったものだ。ところが、この夏、実際にワシントンDCのCapitolを訪問した際、この下にビスクケットが七十年分備蓄されるんだよ、とアメリカ人学生に嘲笑まじりに教えられて驚い

てしまった。

反核兵器、反戦争は、単に常識でしかない。放射線に焼かれたいと望む人間もいなければ、愛する者を戦争のために失って喜ぶ人間も又、ありえないからである。だとすれば、何故、今どき「平和」が殊更強調されねばならないのか。いや、それ以上に「平和」を叫ぶ事自体が、何か特別のこのように感じられるの

は何故か。常識が常識として通用しないところに、現代社会の異常さがあるのではないだろうか。私たちが、これこそ「平和」なのだ  
と錯覚しがちな、この豊かな物質文明は、最高度に発達した近代技術によって保障されている。しかし、その近代技術は、同時に軍事産業をも押し進めているのであり、そのために、軍備増強こそが、国家の安全＝平和を守るものであると言われると、どう反論すればよいか分からなくなってしまうのである。このように、消費文明に埋没し、平衡感覚を麻痺させてしまった私たちは、七十年分のピケットを焼くことと、核兵器建造をやめることを、改めてはかりにかけてみなければなるまい。

中世封建社会を脱皮して、新しい価値観、新しい思考様式を手に入れた人類は、遂に1945年、広島・長崎に、その愚かさを集中させてしまった。三十七年前のその時を、滅びに至る門とするか、生命に至る道とできるか。私たちは、広島・長崎を、世界平和への原点と考えるに及んで、八月六日（アメリカでは五日）を、平和シンポジウムの日とした。

青く晴れ上がった夏空の下、美しいデューク大学キャンパス内のフィルムシアターで、広島から持ち運んだ2本の映画が上映された。その、視覚に訴える力は強く、ただれてはがれ落ちそうになった皮膚や、火を放たれる屍の山の映像は、直接、心にくいこんでくる。この、ともすれば、過去への感傷のみに終わったかもしれない、原爆の記録フィルムに対して、もう一本は現在の世界各国の軍事状況を如実に写し出して、評価されるべきものであった。続いて小グループに分れてのディス

カッション。映画の印象、その他、平和について話し合う。

夕方からは、St. Josephs A.M.E. でセレモニー。原爆を怒る、首なし地蔵の紙芝居、Joni 平本さんのスピーチ、そして平和宣言。この平和宣言の中に第34回JASCの平和理念の全てが凝縮されていたと言っても過言ではあるまい。Gary Wanser君と大浦真裕美さんがかわるがわる読み上げるその内容を聞いているうちに、様々の思い出が、胸に浮んできた。

五月十五日、日本側全参加者が、初めて顔を合わせた合宿で、過密スケジュールに追われながら、深夜一時過ぎまで話し合っていた、富坂セミナーハウスの夜が懐しい。七月の関西地区合宿では、次第に考える力を失っていく頭を揺らせながら、高橋さんと石津君の原案を、何度も書き直した。渡米直前、日米会話学院の蒸し暑い一室で、アメリカ人は原爆といえばパールハーバー、反核といえば、バランス＝オプ＝パワーと言いうだろうと懸念していたことも、今では笑い飛ばせる。

この春大学の食堂で友人と、平和＝non戦争ではないと、話し合いながら、平和の定義を考えあぐねていた。軍縮だの軍拡だのと話していたので、いきおい、平和を軍事の面からのみとらえざるをえなかった。通常の戦争の延長上に、核戦争があり、広島・長崎がある。ではその戦争は何に帰因するか。洞察は、国家の枠を越えなかった。

テーブルディスカッションとレセプションの合い間を縫って集ったGWUのピノラウンジ。戦争は暴力に帰因し、その暴力は構造的なものである。諸価値が不平等に分布し、人類一人一人の人権が踏みつけられる状況が



続く限り、地球上に平和はありえない。人権の尊重を促進するものは、個人レベルでの相互理解なのだ。こういう見解に達して、平和宣言が編まれた。文字通り国家の枠組をはずして主張し合う皆の顔が、その時ほど、个性的に見えたことはない。背後の、白い蛍光灯の光を反射させる、壁の黄色さが妙に印象的だった。

セレモニーは、軍縮をめざして活動を行っている三グループの方々の講演をもって幕を閉じた。あまりにもあつげなかったというのが、実感である。ヒバクシャの語りこそなきにしろ、数百人の聴衆の前で平和宣言が読まれ、被爆によって死んで行った人々への鎮魂のキャンドルサービスで、余韻を残しながら終わることを、少なくとも日本人学生は期待していたのではないか。このような期待は、むしろドラマ性のみを求めて真に広島・長崎を考えるものでないと非難されるべきだが、やはりもの足りなさは隠しきれない。その理由は、「唯一の被爆国ニッポン」以外の土地で平和セレモニーを催すのが困難だというのはなく、広島・長崎の衝撃的な映像から、実際に平和運動を行っている人々のスピーチに連なる空間を埋めるものが、乏しすぎたことにある。

分科会とちがって、単発のシンポジウムは、

参加者が各自持ちよるものによって、その質が決まる。「平和」のように、漠然とした問題ほど、日常、いかに考え、いかに、その考えをまとめているかが、重要になってくる。映画の後のディスカッションが、今一步深まらなかったのも、そこに原因があると思われる。又、これとは別に、平和宣言が、わずかに十六人から成るコミッティーにより、密室で作られた感があるのも拭えない。コミッティーに入るかどうかは自由であり、九十人全員で作るのは能率が悪いという事実は否定できないとしても、全員の、平和宣言への意識を高める配慮が、もつとなされるべきではなかったかと、残念で仕方がない。それには、ディスカッションのための時間がもつと必要であろう。

平和を目指して、学生は何ができるか、何をすべきか、具体的な内容は見出せなかったとしても、動機付けという意味では、このシンポジウムは、十分成果を挙げたと言える。Joni さんの次の提言は、今後も私たち皆の胸に生き続けると信じた。

「世界中の人々の幸福を願って

涙を流しなさい

世界は変わりうると信じなさい

平和を第一に考えなさい

勇気をもちなさい。」

## 第三世界シンポジウム

関西学院大学 4年 社会学

藤 井 薫

JASCも半ば過ぎた8月10日、ニューヨーク大学に於て、第三世界と今日いわれる地域の問題の中で、特に人権問題をとりあげた「第三世界シンポジウム」が開かれた。ニカラグアの事情に詳しいジェズイット会神父、南アフリカ共和国で黒人解放を求めるパンツ一解放機構のメンバーとその支持者2名の計3名のスピーカーによる講演を中心に、ニカラグアの農村の様子を写したスライド上映と南アで非合法に作られた映画で、人種差別の深刻さを表わす「ジンバサの最後の墓」上映が行われた。

ニカラグアを始め、我々が、日常、第三世界諸国の動向について入手できる情報は、かなり限られたものである。ここ数年來の内戦状態にある国はニカラグアにとどまらず、エルサルバドル等の中南米諸国、ガンビア、ウガンダといったアフリカ諸国、カンボジア、レバノン等々、世界地図の全面に散らばっている。現在、戦争状態にない国をあげた方が、容易な程である。ニカラグアの例をとれば、泥沼化の根源は、社会の固定した階級構成が崩壊した後、上層階級が独占していた資本や富を狙って、新興勢力が取り合いを演じる一方で、先進諸国のイデオロギーがらみの経済援助や武器援助に支えられた民兵集団をかかえこんだ勢力者が、残忍かつ終わりのないテロリズム抗争を繰り返していることによる。国家が、国家としての機能をなさなくなり、

国民全員が、無差別テロの犠牲にされて、同国人同志で血を流し続ける。それも、第三者つまり、先進諸国で開発・製造された武器で。その一方で、先進諸国からの寄付で、人々に食料や薬を与えているという、皮肉な図式が生まれているのである。我々は、例えば、先進諸国は、第三世界の抱える多くの不幸について何らかの形で援助すべきである、という意見に賛成はしても、実際にそれがどのような形で行われ、どのような結果を導き、それが、果たして正しい援助であったのか、また、正しい援助とは一体何なのか、といった問いかけに接することはまれである。援助をしたんだから、それでよいではないか、と考える人もいるだろう。金銭的な援助が、かえってその国の貧富の差を拡大したり、先進国からの技術導入が、その国独自の経済体系をつきこわし、失業者を生み、農民から土地を奪い、生産された商品は、秀れた先進国の商品におされて売れ残る、といった悪循環だつて他人事だ、ということもできる。だが、はたしてそれでよいのだろうか？

南アフリカ共和国は、今日、世界で唯一の公然と人種差別を行っている国である。カラードとよばれる有色人種は、白色人種と同じ権利、生存の自由、発言の自由を享受することはできない。カラードとは、パンツ一族と呼ばれる南アが成立する以前からの先住民族で、南アの人口の70%を超えている黒人と、

アジア人種、そしてユダヤ人と定義されている。実際は、カラードの中でも日本人は、その経済力を背景として名誉白人の地位を得ており、カラードの安価で安定した労働力を求めて進出している日本企業は多い。国連で、人種差別を行う国に、経済的制裁を与えるという政策が採択された後で一番こまったのは、実は、南アではなく先進国の企業であった。この為、各国とも巧妙に南アとの経済関係を保っており、今に至るまで、それは変わっていない。

人種差別は、人類の犯す罪の中で最も罪深いものだ、といった人がいた。今も南アでは、家族がともにくらせる日は年に3日位しかない。働かなければ生きてはいけない。が、居留区の中の土地はあれはて、居留区の外へ現金収入を求めねばならない。その為にはウィザがあるし、家族は居留区外には連れていけない。働く条件も悪いが、それを訴えると逮捕される。移住するにも許可がある。結婚も許可がある。こんな生活を、我々は想像でき

るだろうか。レストランで、食事をとることは許されない。労働条件がいかに悪くても賃金がいかに低くても、それに甘んじねばならない。スティーブ・ビコという解放運動家が、牢内で死んだ。彼は、デモに加わっていた理由で逮捕され、裁判も受けず、一年以上も理由もなく拘留され、ある日「病死」した。体中、打ち傷だらけだったという。

残念ながら、日本にも人種差別はある。社会のあちこちで、黙認された差別がある。我々は、どちらの差別がひどいか、とか、自分の国では、決してそんなことはないとは、まして言えない。悲劇をくり返さないため、自分たちが、人間らしい生活を享受するためにも、差別をなくす努力を怠ってはならないし、同じ社会にくらしている人々も、遠い社会でくらしている人も、同じ人間であり、どちらかが犠牲にならねば成立しない社会には、絶対に本当の自由や幸福は存在しえない事を認識しなければならぬであろう。

## 社会における男女の役割シンポジウム

上智大学 2年 英文学

木村明子

ウエルズリーのキャンパスは、目に沁みるような青い芝生と星空の下の湖。そして繰り返された幾つかの別れのシーン。今、時のねじを逆に回してしばし夏の回想にひたれば、感傷という二文字に押しつぶされそうになって、あわてて我に返る。帰国後一ヶ月、もう東京の風は秋。夏のほとぼりはさめたけれど、

あらためてアメリカの夏に感謝。九十人の仲間に関心からありがとう。そしてJASCに万歳三唱！

私達は会議の終盤をボストンの郊外にあるウエルズリーカレッジで迎えた。ここはセブンスターズと呼ばれる名門女子大の一つで、今迄に多くの指導者の女性を輩出して来た所。

そのウエルズリーで「男女シンポ」（正しくは「社会における男女の役割シンポジウム」）が開かれたというのも、いささか象徴的。

さて、このシンポを私自身、どんな言葉で表したらよいのだろう。なにが熱い思いがこみあげて来て、うまく言葉にならない。九十人の日米の学生と、男女の役割について共に考え合うことができたということ自体、私にとっては胸が一杯になってしまうような経験なのだ。そんなわけで、客観的な報告ができるとは思えないが、とにかく私が感じて来たことをありのままに伝えたい。

私の最初の素朴な驚き・喜びは、アメリカのデリゲイツと初めて会った晩にさかのぼる。「テーブルは？」「男女の役割」「いいテーブルね。私も参加したかった。」こんな会話をあちこちで交わした。もちろん男子学生も同様で、「日本の女子学生がこういう問題に関心を持つのはいいことだね。」という返事さえ返って来た。こうした彼らの反応は、今、男女をめぐる問題がアメリカでいかにホットな話題の一つであることを示している。と同時に、彼らが「男女の役割は変わって来ている」という認識を既に持っていることを示している。

日本ではどうか？と言うと、状況はかなり異なる。「女性解放思想」といったものは、日本ではまだ一部の女性のものでしかないようだ。かつてマスコミによって作られたウーマンリブのマイナスのイメージが今でも支配的である。そもそも、長い封建制と家族制を持っている日本だから、戦後数十年で急激な変化を望めないことは分かっている。それにしても「悪しき伝統」（少なくとも「万人は平等である」という観点からみれば）を固持

している男性社会と、それに追従している女性を見ると、日本人のフレキシビリティの希薄性を残念に思う。女子の間にも高等教育が広がっている今日でも、それが人間としての自立を説く教育には直接つながないのが現状のようだ。

話をシンポジウムに進めよう。私達は二人のパネリストを招いた。一人はボストンNOW（National Organization for Women）の支部長エレン、もう一人はボストングローブ社（ボストン最大の地方紙）のリビング・セクションの編集長。男女双方の講師を迎えたのは、このシンポの目的があくまで「女と男」の役割を考えることにあるからだ。いわゆる「婦人問題」は、女性のみにも帰属している問題ではなく、男女双方の、つまり人類共通の問題なのだ、というのが私の持論である。

エレンは細身でロングカーリーの魅力的な女性。張りのあるよく通る声が、彼女の自信のほどを示していた。

彼女は三十分ほどのスピーチの中で、NOWの目的や活動、ERA（Equal Right of Amendment）、Socialization（男女がいかに性役割を学び身につけて行くかという過程）等について語ってくれた。NOWはアメリカのウーマンリブの元祖とも言える組織で、現在会員は16万。最も有力な女性グループだ。（JASCでもSocial Changeのフィールドトリップの一環として、ワシントンのNOWの本部を訪ねた。）NOWの目的を一言で表すと“to bring women into full participation in the main stream of American society now”である。NOWのパンフレットから主な主張をひろってみると、ERAの成立、墮胎権、ホモセクシュアルの

権利、人種差別反対、経済的権利、老人の権利、主婦の権利、政治的権利、暴力反対、教育の中の差別反対、子供の保護となる。これらを妨げるものを一つ一つ破って行くのがNOWの目的である。

ERA（男女平等憲法修正案）批准の運動はNOWがここ数十年大きな目標として掲げて来たものだ。ERAの中味は「法の下での権利の平等は性を理由として合衆国または州により否定または制限されてはならない」。アメリカの州法の中には、日本の明治憲法のような前時代的なものがあるが、これら差別的州法を一掃し、男女の平等を積極的に憲法の中にうたいこもうというのがERAの趣旨だ。

アメリカの女性は男性の59%の賃金しか得ていない。大卒の女性が、高卒の男性より給料が安い、というような経済的差別はなくしていかなければいけない、とエレンは言う。

Socializationについては次のように説明してくれた。小さいうちから子供達は、徐々に自分の性役割を習得して行く。家庭・学校あるいは外の世界を通して、子供達は自分には女（男）として、何が期待されているかを学んで行く。社会の（古い）通念（たとえば女は家において家事をするもの）が、子供達の自由な感性をなんらかの形で規定して行く、という。私自身、自分の20年をふりかえてみて、彼女の説に賛成せざるをえない。例えば、私が童話の世界にひたって育って来たのも、今、文学部に在籍しているのも、私が素直でやさしい女の子になるように、親や社会の要請に応じて来た結果なのかもしれない。

次のパネリストの英語は、私の理解の限度を越えていた。そこであとからアメリカ人にスピーチの内容を聞いてみたところ、「彼は

自分が女性を支持する、と言っただけで、あとはほとんどジョークで終ったみたい」とのこと。せっかくmale feministに御登場ねがったのだから、彼との個人的な会話をつけ加えておこう。

「日本の新聞には女性記者はわずか0.8%しかいません。新聞に女はいらない、というのが彼らのホンネのようですが、アメリカではいかがですか？」

「女性記者はふえているよ。私のところは1/3が女性だ。男性と同じ仕事を同じようにこなす。これからもうえて行くことは間違いないだろう。」

さて、この二人のパネラーのスピーチをもとに、私達は二時間ほどのQAおよびディスカッションの時間を持った。考え方の違いを越えて、皆んながあんなに真摯に卒直に意見を出し合えたことを、私は本当に嬉しいと思うのだ。後の反省会の時にも、「三つのシンポジウムの中で、男女シンポが一番成功だったと思う」という意見が何人かから出された。私も同感だった。というのは、話題が身近だから特別の知識がなくても積極的にディスカッションに参加することができる。これが成功した一つの秘訣だと思う。

会場から出された質問、意見をざっと拾ってみよう。ERAと女性の徴兵（ERAは女性を戦闘要員とはみなさない。）、Socializationに対する疑問（現在の男女の違いは自然なものなので、それに疑問をさしはさむ必要はない）、法と男女平等（ERAが否決された理由、日本憲法の本音と建前、戸籍法の不平等）、日米の文化的社会的相違（日米を比べて日本がより封建的とは一概に言えない）職場の女性の意識の低さ（企業が悪いのか、

女性が悪いのか、鶏と卵の論争。女性の中の意識の差)、教育と平等(まず教育の中で平等意識を育てて行くべき)、日本の企業体制と平等(効率を重んじる社会では、母性ゆえ生産性の低い女子を採用しないのは当然。賃金体系の男女の違い、年功序列制)、保護か平等か(女子の母性は社会的に保護されるべきVS保護に甘んじていては平等は達成できない。妊婦以外特別の保護はいらない)、保育所の増設の必要(日本では女性が働く環境設備が整っていない。個人負担になりがち)真の平等とは?(Equal Right, Equal Opportunity, Free Choice が保障されること。それに伴い人々の意識や態度が変わって行く)、家事・子育てにおける男女の役割(女性が子育てにより向いているというのは男性の偏見。)、女性は感情的か?(男性が人前で泣くのは許せるか?女性ならどうか?女性は感情を表面に出せるという特権を持っている)、中絶(男女は中絶に対して同等の権利を持つべき。子供の権利や幸福も考慮に入れるべき)等々。

会場は終始 friendly な雰囲気包まれていた。私は英語のハンディを抱えながらも、三時間のシンポの間、ボルテージが上がればなしだった。「深夜以外は寝てるんだね」と皮肉られた私も、この時ばかりは全身を耳にして聞き入った。思いあまって、会場を後にするエレンに、“What can I do for Japanese women?”と尋ねたら、“Make a small group first and if it gets bigger, you can have an influence on people” 自信に満ちた暖かい目でそう答えてくれた。

アメリカの男女の問題に強い関心を持っている私にとって、このシンポは格好のものであった。もちろんシンポだけでなく、JASC そのものから多くの刺激を得ることができた。アメリカの女子学生の ambitious なこと、男子学生の liberal なこと、JASC での一ヶ月は私の視野を広げてくれるに十分のものであった。さて次に何をするか、この経験を明日の私にいかにつなげて行くか、JASC は今、私の中で産ぶ声を上げたばかり。

## ジャパナイト・アメリカナイト

慶応義塾大学2年 経済学  
西田尚弘

今年も North Carolina において日米の文化・風俗・習慣の紹介をするための企画である Japan Night と America Night が催された。ここでは Japan Night を企画した一人として、また J.N. の終わった後、実に気楽に見ることのできた America Night の観客の一人として両者の報告と、またそこから得ら

れた両国間の学生気質の違いなどについて触れてみたい。

### JAPAN NIGHT

準備段階においては、各シンポジウムと同等に扱われた J.N. だが、本会議で準備の程度が顕著に異なるのは J.N. だけである。またシンポや分科会が定例会で、皆で学び、

個人の知識・意見を発表するという give & take が中心なのに対し、J・N・は唯一参加者全員の手でつくりあげたものと言える。このような準備段階における性質のちがいは、他のシンボなどに比べ一人一人が情熱を打ち込んだと同時に意見の対立も多く、日本にいる時から「限られた時間で何をやるか」で議論が白熱した。また当日前夜の2・3時間にわたる「どこを cut するか」の討論も今になってみればいい思い出である。

このような紆余曲折をへて J・N・は8月2日の夜催された。結論から言えば大成功だったと言えるだろう。観客席にいたアメリカ側から、終始拍手、驚きの声、カメラのフラッシュが絶えなかった。スタートは「文化と伝統」という一見堅苦しそうな企画だった。日本の風俗・習慣を春夏秋冬という季節の流れにあわせて紹介していったが、一つ一つにユーモアを盛りこみ、ナレーションがうまく間をつないで、この一時間程度の企画は、アメリカ側・日本側ともに興奮の連続であった。僕自身、横で見ながら学生会議参加者の一人一人の趣味の広さと企画力の豊富さに感心していた。夏の甲子園の応援団や武道などは、その後の会議においてもよく話題にのぼったものである。

この後に続いた関西地区のドラマは、日本の独特の慣習と言える「お見合い」（アメリカ側の中には、「野蛮な慣習」と言う人間もいたが……）をコミカルに描いたものだった。二人が対面するシーンなので、ピーピー口笛を吹きたて二人をひやかし大騒ぎするアメリカ側を見ると、やはり「アメリカ人と日本人の culture difference は大きいかな」とつくづく思わざるをえない。次が最も準備

段階から問題が多かった東京地区のドラマである。ママッチの受験生が東大に合格し、大学生活に目的を見つけられずに放浪する story で、確かにアメリカにない「受験戦争」と「日本の大学生活」をよく表現していた。このドラマの Director の一人として、アメリカ側の反応が気になったが、so so 位だったと言える。

そして最後に段々下向きみだつたムードを一挙に盛りあげたのが関西地区がつくった日本料理と恒例の盆踊り大会である。アメリカでの会議において日本料理を用意するのは大変なことだったようだが、不慣れな手つきで箸を持って「そば」や「しるこ」を try しているアメリカ人を見ると、何かしら親しみと空腹感におそわれた。そして料理がなくなるころ、いつのまにか浴衣に着がえた日本側は東京音頭と炭鉾節を流したのである。特に炭鉾節は「dig dig」「hang hang」back・push・safe というかけ声がかかり、本当にいやという程アメリカ側のアンコールによって踊ってしまった。ディスコチックなアメリカ人の盆踊りも一見の価値がある。

Japan Night を盛り上げたものがあと二つある。一つは司会者二人による、英語による「漫才」で、（もしかしたら漫才史上初めての試みだったかも？）Texas を徹底的にバカにするなど、アメリカ人用に調整されたギャグはアメリカ側に大ウケであった。そしてもう一つは「見る側」のうまさである。アメリカ人というのは、楽しむと決めたことには多少の粗があっても気にせず、ちょっとでも笑えるところを見つけると大騒ぎをして自分達を盛り上げる。この精神というか技術には、J・N・の企画の一員としていかに助けられ

たことか……。そして、これこそがアメリカ人の陽気さを生みだしているものである。

このようにして今年もJ・N・は興奮と共に幕をとじた。深夜、企画の皆と最後にホールを去るとき、偶然その日の午後 paper presentationを終えた僕は、充実感と共に、自分の任務が終わったことに気づいて、その後の会議に不安を覚えたほどだった。

## AMERICA NIGHT

アメリカ側はこのNightシリーズでは大きなバンドをしょっている。日本側が、日本にいる時から全体、地区別で企画・練習できるのに対して、アメリカ側は地理的理由から会議の二日前に初めて顔を合せただけである。従って、準備と組織力のJ・N・に対して、A・N・は個人の特技と言わゆる“芸”による単発的なショー形式になる。今年は二日前のJ・N・の成功がpressure になって前日と当日の練習は気合がはいていたようだ。ところが当日の直前に、アメリカ側の何人かと話をしていると、ほとんどの人が「A・N・はあしたじゃないの、今日だったら何も準備できてない……」という感じでとても困っていた。僕も本当にできるのかと、少し不安に感じながらホールに行くと、ちゃんと定刻にスタートしたものの、どうもようすがおかしい。少しすると、暗いステージの上でリハーサルのような感じで2人位がA・N・の練習をしている。突然明るくなると二人が観客席にいる日本側に驚き、やっと本番であることに気付くのである。もちろんこれは最初から最後まで芝居で、本気でアメリカ側のことを心配した僕なんか一杯くわされたわけである。しかし本番がスタートする前から芝居を

するところなど、アメリカ的アイディアとユーモアに脱帽せざるをえない。

それからは、もちろん順調にショーが続いた。前半は、東部・中西部・南部・西部などの出身地域別のショーで、ミュージカルやダンス、ドラマなどバラエティにとんでいる。日本側がオリジナルが多いのに対し、“ダラス”や“アメリカン・グラフィティ”など有名なものをおもしろくアレンジしたものが多かった。日本側はJ・N・が終っているため、リラックスして楽しんでしたが、アメリカ人ほどではないものの、一週間の共同生活の中でアメリカの観劇(?)を身につけ、少し大げさに騒ぎながら雰囲気盛り上げていた。

後半は後発の利をいかして、J・N・のギャグをとり入れさらに加工したギャグや、特徴ある日本側何人かのものまねなどもとり入れなかなか工夫したものをやってくれた。しかし知人の“ものまね”がうけるのは万国共通のようだ。

最後には予想された通りビールと軽食つきのディスコ・パーティーになり、生バンドの演奏で午前1時位まで踊り続けた。日本側もアメリカ側も、今までつたいぶって隠していたものを相手に見せてしまった解放感で、心ゆくまで楽しんだと言える。おそらく多くの参加者が“I'm in the JASC now!”と実感したのではない。

J・N・とA・N・は時期的にも会議の中間であり、精神的にも日米両参加者がお互いに相手を知り合い、これから友情を深める段階に入るポイントであった。僕はこの2つのNights が多くの参加者にとって、前半から後半への大きな飛躍点となったことを信じている。



## 第 3 部

### エッセイ

#### JASCの「第一印象」

井伊雅子

私と日米学生会議（JASC）との関係は、大学入学とほぼ同時に始まった。もしかしたら、大学に関った時間よりも、JASCに費やした方が長いのではと思うほど。なにしろ一夏をまるまる費やしたのだから。

日米合わせて約90人の学生が全国から集まってくる。その多様性はもとより、各学生がもつ大学生にふさわしい知的好奇心に私は絶えず感化された。日本側代表者とは5月の中旬の全体合宿から始まって、約2ヶ月間いっしょに準備してきた。その中で強く感じたことは、彼らは、普通一般に言われている大学生のイメージとはかなり異なっていたということだ。大学生と呼ぶに値する人達だった。これは決して勉強ばかりしている頭でかちという意味ではなく、専門分野に偏らないその興味範囲の広さ、人格、交際のし方、そして人並はずれた体力?! 数ヶ月前まで、高校生だった私は、自分が以前描いていた理想の大学生像を彼らの中に見ることができた。

こうして、自分の無知と、幼稚さに、呆れつつも、なんとか準備を進め、いよいよ7月23日アメリカへ出発した。出発前の抱負会で、回りの人が意欲満々に抱負をのべている中、私は、「今までの準備の間に学んだことは多かったし、こうして日本の44人の素晴らしい人達と知り

合うことができただけで充分です。日米学生会議ではなかったけれど、このまま成田で皆を見送ったとしても私はJASCをやったんだと満足できるように思います」と、思わず本心が出てしまったほどだ。

実際会議が始まると、今度はアメリカの大学生の、その知的レベル・人づきあいの仕方、生活様式、そして体力の違いなどに驚かされて、また彼らから多くの事を学んだ。日本のエリート学生と呼ばれる人は今まで何人も見てきたけれど、そして日本人の私がこうってしまうのはとても悔しいけれど、彼ら米国のエリート大学生というのは桁が違うな、と思った。—何をもってエリートと呼ぶのか、ここでこの言葉を使うのは適しているかどうか疑問だが敢えて使ってみる—国土の大ききの差なのだろうか？

私は今まで“アメリカ”という国に憧れたり行ってみたいという衝動に駆られたこともなかった。しかし今回初めて訪ねたアメリカは、やはり見習う点の多々ある偉大な国だった。ワシントンD.C.にあるスミソニアン博物館。一点の作品を10秒ずつ見ても30年かかると言われるほどのこの大博物館が全て無料で公開されている。夜の9時まで開いている博物館もあり、夕食後の散歩がてらに、親子づれや、若いカップルが短パンなどの軽装で気軽に一流の美術作品に接している姿は、アメリカの高い文化水準を示しているような気がした。また、North CarolinaにあるDuke大学のキャンパ

スに一步踏み入れた時、まさに絶句で声がかたなかった。日本にいる時、自分の大学は縁に恵まれてなかなかいい環境だ、と思っていたのだが、Duke 大学と比べたら、裏庭にもならない。大学生は象牙の塔の中だけに閉じこもらずに社会にもっと出なくては、とよく言われることだが、Duke 大学に代表されるようなアメリカの大学の多くは、完全に社会から切り離されたような、自然に恵まれた林の中にある。しかし、大学生というのは、ある程度、世俗から離れて象牙の塔にどっぷりつかってみることが必要なのではないか。そんな中から、彼らのようなバイタリティーも生まれるのだろう。

国土の差、といってしまうえばそれまでだが、学生の意識の差—将来に対して、学ぶということ、人間関係など—がどうしてこうも顕著に現われるのか不思議だった。一つは、よく制度化された寮生活だろう。芝生の上で伸び伸びと本を広げたり雑談したり、またよく完備された運動施設でスポーツをしたり。満員電車の中で所せましと新聞を広げ、都心の喧騒の中、遊戯化した大学にファッション雑誌風の出で立ちで通っている大学生とは比較にならない。といっても、高校の時一年間交換留学生としてカナダの高校に通った時、高校生のレベルの低いのに驚かされた経験があるので、一概にどちらがよいとは言えないのだろう。

大学生生活のスタート時にこうしたアメリカの大学生に出会ってその生き方なりを観察できたことは、とかく流されがちな日本での大学の中で、私に多大な影響を及ぼした。第三十四回日米学生会議は、私にとって大きな転機だった。初めてのアメリカ訪問で、アメリカのとてつもない底力を見せつけられた反面、私などには測りしれない、その裏側のひどさを垣間見る事も

できた。そのアンバランスがまた魅力なのかもしれない。今まで特に目標もなく英語を勉強してきたが、これからはずっと力の入れ方が変わってくるだろう。自分の専門分野を持つことの重要性、けれど、専門バカに偏らない柔軟性、日本的なものに限らず、これはと思える特技—スポーツ・音楽など—を身につける事、パーティーなどを始めとする人との交際の重要性など、日本人同士のつき合いだけでは、なかなか気がつかないだろう多くの点を身をもって感じた。しかしなんとといっても、夜中の12時すぎに湖に泳ぎに行こうなどという、バカさ、卒直さ、実行力、体力を持つアメリカ人と、絶えず日本人らしさを残したまま、外国でSurvivalする法を模索している私に、手本を見せてくれた日本側代表、彼ら87人との出会いこそが、私にはすぎた一夏の贈り物だった。

追記：題を「第一印象」とした理由は、「JASCについて」というエッセイを書くほど—今の私の感激さめやらぬ状態では—JASCを冷静な目で見ることができなかったから。「一夏の贈り物」を、どう生かすのか、JASCと社会への意義、その方向など、私自身、問いたいこと、課せられていることは多い。全て時間をかけずにはすまぬことだろう。どうやら私だけのJASCの始まりのようだ。

## ファインダーの向こうの

### J A S C

岩 島 牧 夫

書き出しの一語が見つからずに、JASCの1ヶ月を思い浮かべ、蟬の声を聞きながら額に汗して苦悶していると、不意に「愛着」という語が頭をかすめる。早速、傍らに置いた広辞苑を引くと、「愛情にひかれて思い切れないこと」とある。成程と合点して書をドスンと閉じた。

「愛着」という言葉は、700枚の自分が撮った写真を眺めているうちに浮かんできた。全部JASCの写真で、見ていると過ぎた1ヶ月が思い出され、自然とカメラを手に走り回っていた自分が目に浮かぶ。その苦悶の成果というのだから、見る目にいきおい思いがこもる。

事情を知らぬ人に説明をすると、JASCには写真班というものがあり、会議期間中の様々な場面を撮影することになっている。その一人に僕もなっていたがために、かように膨大な量の写真を写すことと相成った次第だ。元々、この役、自ら買って出た訳ではなく、さりとして写真の玄人、或いは半玄人でもない自分である。それが、このような偉そうな題を掲げたのは、この駄作の山を整理しているうちに、写真を撮るといことが、どうやら自分とJASCの間のパイプ役をつとめていたらしいことに気づいたからだ。

大体、カメラマンというのは損な商売であって、小学校の遠足の時の事でも思い出してもらいたいのだが、カメラマンのおじさんは、餓鬼共が、ピーチクパーチク仲よくお母さんお手製のおにぎりを、ご飯粒だらけの顔でむさぼり食らっている様を、自らは粗食に耐え、ひたすら

黙々とシャッターを切り続けなければならない。その仕事を、ひどいことには、なんと今回は無報酬でやれというのだ。加うるには、撮れた写真のできがよければ、大手新聞社がパーンとJASCの記事を載せてくれるという大変な名誉が待っているかわりに、もしよい写真がなければ、この話は一切無しになるという。これは荷が重い。全体、こんな大役に僕などを抜擢したA氏に人を見る目がない、などという言い訳が通ればよいのだが、なにしろ選考基準が、一眼レフを持っていることときたから（一眼レフとは高級カメラのことと思って下さればよい）、文句のつけようがない。従って、古人のお言葉に習い、ただひたすら、「ヘタな鉄砲も数うちゃ当たる」と念仏を唱えながら、シャッターを切り続けることとなった。700枚はその遺産である。

このような訳で、渡米中はほとんど朝から晩までカメラを手離せない生活を送ることになった。渡航直前に、松山幸男氏からの、「あまり写真ばかりとってこないように」とのご忠告は、この熱き情熱に燃える青年カメラマンに対しては、馬の耳に念仏だった。とはいうものの、時にはカメラを放り出して動きたい時もあり、実際そうしたこともあった。だが、そんな時ふと「シャッターチャンスだな」などと思うと、もうカメラを部屋に置いてきたことが悔やしくてならなかった。次期実行委員となったある毒舌家には、「お前はレクチャーの間も、ノートもとらずに写真ばかりとっている」などといわれたが、それも事実だったし、こんなにやる必要があるのか自分でも疑問だったけれども、終ってみればやってよかったという充実感がある。

それでは、カメラマンではない自分はどこにいたのだろう。こう言うと、この役目がJASC

の中で、一番自分にとって大切だったように聞こえるかも知れないが、無論そうではない。ただ、お前は1ヶ月で何をやってきたのかと問われた時に、今の自分にはそれを表す適当な言葉が見つからない。要は、写真は黙ってそれを代弁しているということだ。それなら、カメラを構えていた自分は、どういう気持ちでJASCを見ていたのか。

JASCのことを知ったのは3月のことだった。大学の友人の所へ、借りていた単車を返しに行く、机の上にJASCのパンフレットが置いてあった。丁度、夏にはアメリカへ行きたいと思っていたところだったので、少し説明してもらおうと、ただの物見遊山とは違うようだった。実行委員の中に、友人がいるのがわかったので、ちょっと興味があるからということではパンフレットを送ってもらった。正直に告白するが、その時点でJASCの第一の魅力は30万円で1ヶ月アメリカへ行ってこれらということだった。従って試験の準備にもこれといってやったこともなかったし、当然、面接はすさまじい状況下で進行した。自分のテーブルは第3世界であったが、これは第2志望で、面接の際、知識と認識の欠如を甚だしく露呈してしまった分野ただけに、合格通知に書かれた「第3世界」という四文字は、まさに意外だった。

2、3ヶ月、大学の勉強の片手間に得ることのできる第3世界の知識など、たかが知れている。ましてや、英語で討論するとなるとこれはもういけない。とにかく周囲の議論についてゆくのが精一杯で、とてもオリジナリティのある意見など、述べられない。これは痛烈な体験であった。恐らく日本語でやったところで、大して自分には理解できそうにないことを、英語でやるのだから、まさに自分の無知を曝け出すこ

との連続だった。

こんな状況にあっただけに、写真や様々な課外番組に熱がこもるのも当然だったかもしれない。それで、という訳でもないが、今一番胸にくっきりと浮かびあがるのは、平和宣言を有志で作りにあげていったミーティングの光景なのである。言葉を多く交したということでは、何と云ってもテーブルミーティング(第3世界のこと)が一番だったし、時間のかけ方もそうであった。平和宣言を作りあげるミーティングで、自分が積極的に発言することができたわけでもない。テーブルでは得られない何ものかがこの場にあってすれば、それは一つのことを我々が協力して作りあげようという意識が最も高い場だったからだと思う。多人数で一つのことを作りあげる作業は、連帯感を高めるには一番だ。大学に入って以来、僕は2年間、演劇をやってきたが、一つの芝居を作りあげる喜びの中にも、同様のものがある。団体競技とよばれるスポーツにおいても同じであろう。

それでは今回のJASCで得たものが、演劇の中に見たものと同じだったかということ、それは違う。壮行会の時に、JASCは大学へ入ってから、芝居との出会いに続く二つめの山だ、と言った僕の気持ちの中には、芝居の本質とも言える「演じる」ことが、そしてJASCの中で得た友人達と彼らが僕に与えてくれた絶大な影響力がまさに山のようにそびえていた。ことをそのままアメリカ側の参加者、今はアメリカにいる友人達にあてはめても同様であって、同年代の人間の思索する様に触れることは、それが自分にとって未知の領域であっただけに、僕には自らの蒙を啓く絶好の機会だったと思う。この点では、自分がそうした役割を、他の参加者に対して果たし得たかどうか、極めて疑問に

## II

ボストン・コモンを物欲しげな顔をして歩いてきた時のことだ。三人の黒人が、トランプのバクチをしている光景に出くわした。釜ヶ崎のサイコロと重なって自分の興味をそそった。黒のカード二枚とハートが一枚、ハートを当てると勝ちだ。賭け金は二十ドル、ハートがでると四十ドルが手に入る。賭け師の黒人は、練炭のように色が黒く、年を喰った浮浪者にみえた。目が黄色く濁り、酔っ払っているように思われた。地面の上で三枚のカードを、そのシワばかりの黒い手でぎこちなく動かしていた。観客が少しずつ集まり始めていた。赤か黒か赤か黒か、どっちどっちどっち、とその老人は、ぶつぶつとつぶぶきながらカードを動かした。ハートのカードは、容易に目で追えた。この老人は負けてしまうと自分は思った。二人の黒人は若者だった。太った方の男はよくへまをした。へまをしてはファックと叫んで老人をにらみつけた。その仇をとるかのように、もう一人の若者は勇み込んで、残りの二枚の中からハートを取り戻した。三人のまわりに観客の輪ができた。ハートのカードの端が少しまがっていた。二人の若者は、その曲がりに気付いていた。そして老人の手が止まるやいなや、かけこんで二十ドルをかけた。ハートが出た。老人の黒い手から、四十ドルずつ若者に手渡された。老人の手にはもう二・三枚の紙幣しか残っていなかった。わたしは、その無表情な老人に同情さえ感じた。白人の若いアベックが、その様子を見ていた。カードの動きは誰の目にも明白だった。ボーイフレンドの方が二十ドルをかけた。そしてへまをした。そのガールフレンドは舌打ちをした。そして明白なカー

ドをさして、「あれ、あれよ、待って。」と騒ぎ出した。あわただしくハンドバッグの中をあさり、財布をさがした。残った二枚のカードの位置が気になるらしく、ハンドバッグとカードを何度も見比べた。ハンドバッグをあさる手がふるえていた。賭け師はいかさまがないのを証明するかのように、カードを足で押えた。女が財布から二十ドルを取り出し、その明白なカードをあげると、それは黒だった。女は声をあげながら天を仰いだ。次の賭けで今まではすばやくハートを手に入れていた黒人の若者が、失敗した。そのカードを地面にたたきつけながら、ファックと吐き捨てた。老人は無頓着に二十ドル札を手の中ににぎりしめた。残りのカードは明白だった。白人のガールフレンドが、最後の二十ドル札を賭け師にさし出した。カードをはぐろうとする一瞬彼女の手には不安を見たような気がした。黒だった。彼女は、ボーイフレンドに倒れかかるとしてその場から去って行った。五分間の間に彼女らは、六十ドルを失った。

この賭けには、抜け目のないトリックがかくされていた。まず賭け師の風ボウである。黒人の浮浪者は、怠惰で無知なものと決めつけられている。そうした通念が、賭け師の酔っ払ったような素振りとは無知を装ったつぶやきと重なり、観客の優越感と安心感を誘う。つまり、トリックに対する警戒心を和げてしまう。そうした安心感から、賭け師の微妙な手の動き、つまり、カードをくる時のトリックを見逃してしまうのだ。次に、黒人の二人の若者はサクラだ。一人はへまな奴、一人はすばしっこい奴。二人の巧みな演出によってその賭けが、真剣であるかのようにカムフラージュする。二人の若者は、賭け師に敵対感

をむき出しにすることによって、観客の側に親近感を抱かせる。そして、賭けそうな者に近寄って、そのコツを教えてやるふりをする。自分らにとって、カードが明白な時は、真っ先に飛びこんでハートをめくる。そして四十ドルをポケットに入れる。素人の観客にとってカードが明白に見える時は、(つまり、トリックが隠されている時)、若者はわざとヘマをしてみせる。得意になってカードをひいた観客は、自分のひいたカードが黒なのを信じられないような顔でみる。こうして、賭け師の利益は、次から次に黒人の若者のポケットに入り、賭け師の手に残った紙幣は、常に三・四枚程度で、観客の側に不信感を起こさないようにしてある。

観客の輪がくずれ始めると、賭け師も黒人の若者も知らぬ間に消えてしまった。わたしは、彼らの跡を追った、すると、今まで敵同志のように振舞っていた三人が、近づいたり、離れたりしながら、同じ方向に歩いていくのが見えた。曲がり角のところで、若者の一人が後ろをチラリとふり返った。そして、先程見かけた東洋人が、跡をつけてくるのを知ると、一瞬緊迫したような表情で、わたしの様子をうかがった。わたしは、何も知らずに金をすってしまったカップルや学生たちを思い出した。そして、言いようのない怒りがこみあげてくるのを感じた。

### Ⅲ

古いセーレムの街で、スターシャという老女に知り合った。一目みて、彼女が一人住まいだという気がした。死期を待つ人のように蒼白な顔をし、シワの集った目のふちは黒ずんでいた。せきがでるとなかなか止まらな

った。

息子と嫁の仲がうまくいかない、と彼女は口を開いた。一人息子には定職がなく、母の家を出たり入ったりしている。息子は三十六になる。このごろの若い者はうまくいかない、すぐ一緒になりたがる。一緒になると問題が起きる。世の中、思うようにはうまくいかない。若い者は、一人身のありがたさを知らないんだから……。

一人住まいかと聞くと、イエスと言い、ご主人はと尋ねると、死んだと答えた。悪いことを聞いたと思った。

むこうの丘に、夫の墓がある。そう言うときスターシャは、川のむこうを指さした。以前は、月に二度も三度も墓参りに行ったが、今はもうそれもできない。せきがでる。彼女はじっと丘の方を見つめていた。わたしは、彼女のか細い体が坂を登るのを想像して、息苦しくなった。

夫には、できるだけことはしてやった、看護婦もつけずに、自分が面倒をみた、と、彼女がそこまで言うと、わたしは不吉な予感を感じた。その病名が自分の頭に浮んだ。その予感が、誤りであればいいと願った。

「ご主人は……」

「癌だね。」自分の質問が終らないうちに、スターシャは、そう答えた。わたしは、予感的中して、一瞬体がこわばった。わたしは自分の母が癌で寝ているのを、彼女に知らせなくなかった。自分は寝たきりの母を、日本に置き去りにしてきた、という心の偶の罪悪感が、こうした形で報復される皮肉な境遇を省みた。自分は母のことなど忘れていたのだ。「両親も、兄も癌で死んだよ」スターシャはつぶやいた。「あれには薬がない。たぶん、二

十年か三十年後だよ。自分が生きてるうちにはだめだろうね。」わたしは少しうなずいたまま、川の方に目をやった。スターシャは、また咳をした。わたしは、スターシャも癌に冒されているのではないかと一瞬思った。彼女が死ぬ時、誰がそばについててやれるか。彼女の一人息子には職がない。物価が高いとスターシャはこぼしていた。息子と嫁の仲がうまくいかない。嫁は、義母の家には近寄らないらしい。わたしは、この夏、JASCに参加したことを後悔した。

## JASCからの贈り物

### 大三輪 洋子

大学生活の残された一年間に、学生の純粋な情熱を思いきりぶつけてみたい。二十二年間、一生懸命生きてきた自分自身が、大学や、日本の枠を超えた時、どこまで自分を失わずにいられるのか。そして、その自分とは何なのかを試してみたい。そんな心の底から湧き上がる思いを、抑えきれずに応募したJASC。あれから五か月が過ぎ、私は学生生活最後の夏をJASCで締めくくりました。そして、第三十四回日米学生会議がすべて終了した今、私に残された物は何だったのでしょうか。

五月半ばの初顔合せの合宿以来、足繁く通った四谷での定例会、勉強会は、その度に私を刺激し、喫茶店までえんえんと続いた打ち合せ、限りなく広がっていった様々な雑談、深夜にわたる電話の掛け合いは、私の価値観

を再確認する良い機会を与えてくれました。結果がどの様な形であろうと、一つの目標に向かって皆が一体となり、真剣に取り組む姿、そして私もその中の一人であるという実感を味わえたことだけでも、私にとっては意味のあることでした。

そして、アメリカでの一か月間。会議の中心を成した分科会ごとのディスカッション、平和をはじめ、社会変動、第三世界、男女の役割に関するシンポジウム、様々な方々の講演の度に、痛感させられたことは、自己表現の難しさということでした。適切な時に、適切な質問をし、自分の考えを効果的に発表するためには、少しの勇気と、それに裏打ちされる多大な努力が必要です。今後、私の大きな課題の一つとなりました。

初めてのアメリカで、あまりにも多くの新しい経験が一度に押し寄せ、過密なスケジュールの波に吞まれそうになりながらも、ふと見い出せた一人の時間に様々な事を考えることができました。日本を離れ、日米を問わずあれだけ多くの人間と接し、約一か月の間、寝食を共にするということは、並大抵のことではありません。時に、孤独を感じたり、人間関係の難しさに頭を抱えることもしばしばでした。また、浮き足立ってはいけないと自分に言い聞かせながらも、遠いアメリカにまで来て、エンパイア・ステート・ビルに登らないで帰るなんて……、ブロード・ウェイのミュージカルを見ないで帰るなんて……、などと考えていた私を今でも思い出します。しかし、日本に帰った今、強烈に、しかも懐しく思い出されることは、明け方まで語り合ったルームメイトとの人生論であったり、ごく当り前の様にカフェテリアで、クリームチー

ズをのせた bagal を食べながら話したディスカッションの感想であったり、夜中に出かけて行ったバブでのたわいのない話であったりするのです。これらの人と人の触れ合いの積み重ねこそが、国際交流に欠かせないものではないでしょうか。そこから得られた人間同志の心の通った友情こそ、文化を超えて、互いを理解し合う第一歩になるのだと思います。友情とは、いつも一緒に行動したり、必ず相手の意見に同意することによって確認し合うものではないはずです。そんな皮相的なものではなく、人間の心の暖かさの交換ができた時に、生まれるものではないでしょうか。時に、人間は、所詮孤独なものだなど感じますが、私は、この一か月に、間違いなく、日米を問わず互いに深くわかり合える友だちをつくることができました。共に問題を解決して行った仲間たちは、写真を覗く度に、思わず懐しさの込み上げてくる人たちがばかりなのです。閉会式の後、それぞれの家に帰って行くアメリカ人と、肩を抱きあって別れを惜しんだ時、成田到着後、四谷で日本人同志の別れを惜しんだ時、人間同志の出逢いの素晴らしさ、そして誰もが心の奥に持っている素直な気持、優しさを感じずにはいられませんでした。

日米学生会議は、このように様々なことを私に気づかせてくれました。私は、まだまだ、JASCからの贈り物を、すべて開けて、その中身を見て、自分のものとするのができません。ただ、これらのことをすべて含めて、やはり、私は今、JASCに参加できて良かったという気持ちで一杯です。そして、これからのJASCのために、多くの学生のために、今度は私からの贈り物が届けられるよう、

陰ながら声援を送り続けたいと思います。

“I love the sky, high and clear.

And I love the sky low and stormy.

To live is to accept ….” ロバート・

フロスト(詩人)

## 「フレンドリー」な 人たちの孤独

藤 井 真

### レセプション

ワシントンの寮に着くと、既に入室してる米側参加者が、こぼれるような笑顔で出迎えてくれた。「部屋番号は?」「×××号室です。」「なら、そこですよ。」と案内してくれ、「わたしの名前は……」とさっそく自己紹介してくれる。

その晩、両国参加者の初顔合わせのためのレセプションがあった。「ロスアンジェルス of ホームステイはどうでしたか?」「わたしはトウキョウに住んでいたことがあります。」「ミシマを知っていますか。」「ソウセキの『心』はすばらしい。」……陽気に話しかけてくるアメリカ人たち。彼らは実に親切で幸せそうだった。

さて、このレセプションでわたしは、部屋のすみのソファに腰かけていた、Mさんというアメリカ女性にあいさつした。その人はとてもやせていて、手首が信じられないくらい細かった。数日後、彼女の回りに起こったある出来事から、わたしは、彼らアメリカ人の笑顔について、改めて考え直すことになる。

「構ってられない」



わたしがその女性についての悲しい話を聞いたのは、ワシントン滞在の最終日だった。驚いたことに、彼女の日本人のルームメートのSさんによると、彼女はその日の朝、会議から帰って入院したという。彼女は物が全然食べられなくて栄養失調だった。それは、アメリカの若い女性の間にも広まりつつある病気で、やせたい、やせたい、という思いのあまり、肉体的にも食べ物が受けつけられなくなってしまうという。

さて、Sさんが憤慨した様子で話してくれたのは、Mさんが帰るときについての事だった。「あのとき、彼女気分がめいってたみたいで、だれかと話したかったらと思うのね。それでわたし、彼女のことを、彼女と同じ分科会のOさん（アメリカ人）に伝えておいたのね。ところがよ、Oさん、きのうの晩Mさんのところへ話しにも来ないし、けさも見送りに来ようとしなかったのよ。」

この話がもしその通りなら、そのテーブルメートのアメリカ人のとった態度は、わたしには理解しかねるものだった。わたしは、たまたまその晩一所になった、アメリカ人のHさんに、この話をどう思うか、聞いてみた。

彼女の意見は、病気で帰らねばならなかったMさんに対し、厳しいものだった。「わたしでも、その人には構ってられないわね。だって、おとななら、自分の悩みは自分で解決しようとするべきものよ。」冷たい。本当にどれかの助けを必要としていたMさんに「構ってられない。」とは……。そう感じたわたしは言った。「困ったときに力になってあげるのが友だちというものではないだろうか。」

Hさんは強い語調で反論してきた。「わた

しの助けられる事には限界がある。……」彼女の能弁がやむと、二りは黙ったままになってしまった。ぼつりとHさんが言った。「冷たいと感じるかもしれないわね。」そうして語り始めた彼女の話は、わたしの心をうつものだった。

## アメリカという社会の中で

「高校の頃は、わたしもよく友だちの悩みの相談にのったりした。友だちの一りに、よく『わたし自殺するわ。』と言って人に心配させる子がいたの。わたしは、彼女の事を心配して、何度かうちに泊めて真剣に話を聞いてあげたりした。でも、その子はしばらくするとまた、わたしの気を引こうとして『わたし自殺するわ。』と言ってくるのね。彼女の精神病的な問題なのだ気付いたときには、わたし自身がノイローゼになりかけてた。」…… Hさんが、全ての人の問題に関わることはできない、と考えるようになったのは、恐らくその時からだという。

わたしは、彼女らの暮らすアメリカ社会を思った。精神科医の繁盛。同世代の99%が麻薬経験者であり(!)、カリフォルニアの彼女の大学では学生の3分の1が同性愛の人人だという(!!)。ちょっと一筋縄では行きそうにない問題をかかえた人は、際限なくいそうである。

そして、日本という均質で平穏な社会の中の、大学というそのまた特殊な世界に住む自分としては、ノイローゼとか麻薬やホモ、どれをとっても、たぶん新聞の活字の上くらいでしかお見にかからずいられるのです。

彼女の前で、わたしはもはや黙るしかなかった。Mさんに対する、アメリカ人の冷たい

態度を、容認したわけではない。ただ、わたしと異なり、アメリカという複雑な社会の中で生きている彼らのやり方に対して、取りあえず、自分は何も言うことができない立場なんだ、と気がついた。

### 「成功」のための「フレンド」

さて、ワシントンでの出来事は、わたしに一つの疑問をいだかせた。それは、他人と深く関わることに、本当にそれ程慎重でなければならぬのなら、レセプションなどで親し気に話しかけるアメリカ人の、あの愛想の良さは、一体何なのだろう、ということだった。

わたしは、このことを、2、3のアメリカ人に聞いてみた。彼らの一致した答えは、「この国での親しきの多くは、とても表面的なものです。」というものだった。つまり、たとえ悲しくても、嬉しそうなふりをする。逆に言えば、あなたのことが本当に好きだ、という顔をする人も、「もしかしたら、あなたが死のうと生きようと関係ない、と思ってるかもしれない」(!)というのである。

しかし、彼らは主張する。「表面的であることは、わたしたちの文化の中で生活し、『成功』(このアメリカ的な響き!)するためには、必要なことなのです。」と。アメリカは政治的な社会である。社会での「成功度」を決するのは、その人が何を知っているかではなく、だれを知っているかである。だから、彼らには、「とにかく、多くの人間と知人になることが必要」なのである。

そうすると、互いに知り合うための場であるレセプションなどは、まさに、彼らの「成功」にとって重要な場であり、彼らはそれこそ懸命になって、愛想を振りまくことになる。

そして、他方で彼らは、自分自身をすり減らさないためには、深い人間関係をもつことには慎重でなければならないから、その結果は勢い、表面的人間関係の量産になる。こうして、親しかったはずの「友人」が、いざ自分が本当に助けを必要とするときに、背を向ける、ということが起こるわけだった。

### 海の向こうからの手紙

日本に帰っても、3週間を共に過ごしたアメリカ人たちが頭に浮かぶ。笑顔で部屋に案内してくれた人。「ミシマを知ってますか」と話しかけてきた人。病気のMさんに構わなかったOさん。自分がノイローゼになりかけたというHさん。「この国の人間関係は表面的だ」と言った人たち。

彼らは…… 仲間に甘えずに、一りでも強く生きられる人たち。そして、「成功」のためにいつでも笑顔になれる人たち。けれど、見方を変えれば、人と心から支え合える友情をもつことをためらいながら、浅い付き合いばかり求め続けねばならない人たち。

強さの裏側で、もしかしたら、彼らはとても孤独ではないだろうか。もし何かのために、その強さが息切れすることがあったら、彼らはどうするのだろうか……

さて、このエッセイを書いている間に、Hさんから手紙が届いた。全部で10枚の便せんの中程に、こうあった。

「わたしはこの会議で多くの事が分かりました。わたしがこの4年間でどれ程変わっていたか、ということ。そして、この国に住むわたしたちの多くが、いかに孤立しているかということ。……」

取りあえず、彼女がそのことに気付いてくれたことが、嬉しかった。

## JASCと私

### 私にとっての相互理解

石津達也

何はともあれ、すばらしい一か月だった。今となっては全てはみな美しい思い出。Wellesleyの青い空。Dukeでの天の川の下でのPatとの議論、etc。そしてJapan Night。僕は一生忘れないだろう。そしてこの思い出とかけがいのない友達を一生大切にしていゆきたい。Beth, Karen, Jim、そしてBrad, etc。ああ、全てが夢の世界だ。

会議の一か月を通じ、いや日本にいる時から「相互理解」—JASCの基本理念でもあるが—は僕にとって重い問題であった。日本は外国を不可欠とする国であるにも拘らず、日本は理解されず日本も他を理解しない。最も重要な安全保障ともいえる相互理解を阻んでいるものは何か？これは私の発表のテーマでもあったが、初めて外国にゆく僕にとって毎日が問いかけの連続であった。そして僕は若い時に他の国を訪れて生活をしてみることが最もそのよい方法なのではないかと思う。実際僕の米国に対する認識は一変した。

その一つとしてJASCで得た知識の限りでは、アメリカ人の物の考え方の80%は我々と同じといえた。僕が渡米前に読んだ文献はとにかく日本人とアメリカ人の違いを強調していて、わずかな常識のズレが重大な誤解を招く例を読みすぎたため、“Never the twain shall meet”なのかと戦々競々としていたのである。しかし語学を除いて重大なコ

ミュニケーションギャップを生ずることは皆無であった。のみならず米人の方がよりよく意気投合できた位であった。さらに、渡米のCulture shockは僕が大阪にJASCで出張に行った時のそれよりも明らかに小さいのである。大阪に行った時はなまじ人々が同じ顔をしている為僕ら（洋子氏、香弥子氏）東京人には大阪弁をしゃべる人々にかこまれて違いばかりが目についたのに対し、米国では、初めから違っているという認識がある為、同じところが目につくのである。とにかく本では絶対に得られない知識が得られるところが「訪問+人的接触」のmeritであろう。その点で日本に最も必要なのは「日韓学生会議」であろう。

日系人について

JASCには多くの日系の人がいたが、日系人は同じ東洋人の顔をしていて、考え方は殆んどの人が米国的である。日系人社会は移民では最も同化の度合いが高い。（詳細は30回、子安圭子氏のエッセイに詳しい）かつ近い将来消滅してしまうだろうと言われていた。中国系などと対比して、この傾向—日本人を日本人たらしめているものは弱い—はどう説明されるのかと考えてしまった。日本人は人間関係社会で、中国人、ユダヤ人はイデオロギー社会であるから（それは属人的である）であろうか。いずれにせよ、日系米人との接触ではかえって自分達との違いがきわだって感じられた。そしてこれは本当に驚きであり、不思議な気分にもなったのである。他にも興味深い点をあげてみよう。

「一般化」について

「アメリカ人」はlogicalだとか、議論がうまいから手ごわいと思っていたが、とくにそう感じることもなかった。「西洋交際始末」

にのっているように「犬を連れてご夫人に会ったら無理してもしゃがみこんで『おぉ可愛いわ』とかいってごらんさないよ」「周囲の現地の連中の日本人を見る目ががらりとかわることはたしかだ」(P225~226)僕もこりゃ“相互理解”の一步とってホームステイにいった犬を見るたびやってみたが(犬を飼っていたので造作なし)特に変化はなかった。それどころか、狩猟民族、牧畜民族だからといって飼ひ方に大差ない。そしてbowwowとはなかなかの拍子抜けしてしまった。本題に戻るが、論理を重んじる点では彼らはステレオタイプの思考を排する傾向がある。日本は単一民族の為、人=国家の思考を他国にあてはめてしまいがちであるが、不用意にそれをやるとすぐ反論される。僕もLucyとの議論で「日本にいる時は typical American womanはこうだと思っていた」といったが、多民族の米人にはその発想(typicalな何~)がなじまないらしく、かなり厳密に問いつめられてまいった。因みに僕は属性として tall, strong, cheerful, aggressive, has her opinion, christian, blond hair and blue eyes をあげたのだが、それをいうとGareyは大笑いして「それは違う」といってくれた。彼の土地ではもっと conservative な女性が多いそうである。

#### 人種・宗教について

米側が極めて多くの人種、ethnic group-アングロサクソン・ケルト・ユダヤ・ラテン・黒人・日系・混血・中国・韓国-及び宗教-仏教・プロテスタント・カトリック・モルモン・ユダヤ・無神論-に分かれているのは私にとって大きな驚きであった。そして個人レベルで友情を深める上では人種と宗教の相違は全く障害にならないことがわかった。

どうして今までの戦争がこれにより生じてきたのか不思議な程だった。これも社会の利害から離れた若者が相互理解を目的に集まったからこそできたのであろう。本当にJASCは貴重な場である。これも本では得られない。体験である。宗教に関しては私的討論では最も時間を割いた。僕は ①ユダヤ人はなぜ差別されるか ②君の生活にとって宗教の位置は ③君は自分で宗教を選んだのかについて討論を挑んだ。①については非同化性・経済力に対する反感が原因だという。日本人にとっては聖書もユダヤの物語・キリストもユダヤ人であるのに……という疑問はあるが、もう一つよく判らなかつた。②についてはアメリカ=プロテスタント国家は必ずしも真ならず。宗教を信じない人(無神論者ではない)は驚く程沢山いる。現に米側の半分以上はそうである。しかし行為規範としての宗教の力は日本よりずっと強い。これは私の経験では軽々に結論できないが、恐らく、最も根本的なところでは深く浸透しているのではないか?表面的には日本人は少なくとも異教徒として特別視されることはないにしても、③については親と同じ宗教を自動的に信じている者が多い。故に「君は他の宗教と比較検討した上で任意に選んだものではないではないか」と言ってみた。この問いには答をつまらせる者もいた。彼らにとっては普通は耳にしない質問なのではないか。しかし日本人には興味深いといえよう。僕は「進化論を信じるか」の問いかけもすべきだと思っている。紙数の関係上これで割愛せざるをえない。これからの参加者へ。

諸先輩や友人が行ったアドバイスで今年の僕の経験から非常に役に立ったものをここに

ご紹介する。

1) 特技をもて JASC では多くの人の名前を覚え、かつ覚えられることが重要である。

3 2 回代表の小出晃三氏は卓越したピアノの才能を持っておられ、一躍PIANOMANとして有名になり、友達もできたそうだがこれは本当である。とかく西欧はCompetitive Societyであるから速慮なく売りこまねば無能と見られてしまうそうであるから。

2) 笑顔を忘れない 吉田君、窪田君も述べているが、Dale Carnegie の「人を動かす」(創元社)は最も有用であろう。米国での対人関係・相互理解の基本が書かれている。その中でも、笑顔を忘れないことは最も効果のあるものだった。

3) ジャンジャン話しかける 「外人」必ずしも話好きとは限らない。こちらから待っているような消極姿勢ではダメ。たたけよ、さらば開かれん、である。積極派人間は英語力よりも大なりとは至言であると感じる。

4) 英語について 英語は最重要である。僕は英語が poorest であったのでどんなにもう少しできたらと思ったことか。本当に「聞くこと」を中心に準備を怠るべきでない。しかしへたな英語でも態度と意欲はそれを補って余りあることも又事実であった。

5) Practical Joke 僕は Japan Night で経験したが、日本では相当 serious なことも米では Joke になってしまうことがある。例えば人の弱いところに関する teasing などである。これらは悪意ではないのだから怒らないことである。

### JASC の将来

とにかく JASC は確実に人を変える。この素晴らしい JASC の発展をお祈りする次第

である。その為には O B 会の結成による個人 donation の組織化・広報活動による、財政的的確立が不可欠である。これからの JASC にとってこの 2 つはどうしても達成せねばならないと感じる。最後に実行委員の皆様御苦労様でした。

## '82 夏

### アメリカで感じたこと

#### 滝田 祥子

最近日本でも「情報化社会の到来だ」とか言って騒がれているが、アメリカの現状を見ると、それが子供だましのような気がしてくる。私がこの夏アメリカで見たり、聞いたりしたのは、ほとんど、この「情報」というものに関連づけて考えられるぐらいだった。

日米学生会議。アメリカと日本の学生が 1 ケ月間寝食を共にし、様々な問題について話し合う。それによって、日米相互の理解を深め、国際平和を希求する。これは、これで大切な会議の目的であり、誰もが頭においていることである。しかし、それと同時に、1 人 1 人違っているが、今回 8 2 年の夏にアメリカへ渡って、「これを確かめてきたい」とか「これだけは見てくるぞ」と心に決めたことがあったはずだ。私の場合は、「日本の学生とアメリカの学生が会議を行うことの意義をもう一度考えること」と「アメリカは本当に脱工業化社会になっているかどうかをこの目で確かめてくること」の 2 つだった。前者についてはステューデント・タイムズ(9 月第 4 週号)に書いたもので、ここでは後者を取り上げたい。

私は第3世界テーブルのペーパーで、西欧の脱工業化社会と、国づくりに励んでいる第3世界との間に、国民レベルでの知的文化交流が成り立つのではないかという結論を出した。アメリカをケース・スタディーとして扱ったのだが、アメリカ社会が脱工業化しているといっても、本の上での知識で実感がわかなかった。そこで、実際にこの目で確かめてみたいと思ったのだ。

脱工業化社会にはいろいろな側面があるが、一般的に、「知識が資本に代わって、社会の最も大切な資源となる時代」（ヴォーゲル）と言われている。ここで「知識」と「情報」は同義語と考えられるので、ある社会でどの程度「情報」に重要性がおかれているかが、1つの尺度になる。

アメリカにおける「情報」重視の傾向は、フィールド・トリップ先で訪ねたVOAをはじめとするUSICA（米国国際交流庁）の活動に最も良く表われていた。USICAはアメリカのPublic diplomacyを扱っている政府機関で1978年に設立されたばかりである。国務省が行う伝統外交を補うために、国民レベルでの文化交流活動を推進させようという機関で、権限的には国務省とはば対等な立場におかれている。日本でも最近民際外交の必要性が叫ばれているが、財政的規模、影響力の点でアメリカの足元にも及ばない。政府レベルだけでなく、国民全体のレベルでの「情報」の重要性を充分考慮に入れた結果、アメリカではこのような機関ができたのだと思う。

ただ1つ気になったことは、一緒に行ったアメリカ人学生が「きっとプロパガンダばか

りやっているのだろう。」と極めて懐疑的だったことだ。掲げられた目的はすばらしくても、私にはわからない隠された意図があるのかもしれない……。

私の疑惑を裏付けするかのようには、Duke大学では、アメリカをはじめとする先進諸国のElectronic Colonialismについて研究している女性に会った。彼女によると、第3世界諸国の国民は、情報伝達の手段を、VOAやBBCなどの放送網に完全に支配されてしまっていて、精神的な従属状態から抜け出せないでいると言うのだ。そのような状態を少しでも打開するために、彼女はNWIO（New World Information Order）の必要性を強調していた。

これが事実だとすると、アメリカ人学生がUSICAはプロパガンダを行っていると言った意味が納得できる。しかし、そうであっても、私達日本人は、アメリカが過去の一方的なコミュニケーションを反省し、他国の文化を学ぶ双方向性追求のためにこの機関を作ったのだということを忘れてはならないと思う。日本は今まで、アメリカとは逆の意味での一方的コミュニケーションを行ってきた。アメリカの新しい外交姿勢に学ぶべき点は多いだろう。

1ヶ月間アメリカで生活してみて感じたことだが、正しい情報に一番飢えているのは、むしろアメリカの若者ではないかということだ。情報の量は、日本に比べて決して少ないとは言えないが、彼ら自身の価値判断で正しいものと、正しくないものを選分けていくと、正しい情報があまりにも少ないと言うのだ。特に政府要人の話を聞いたあとの彼らの感想は、ほとんど毎回「質問した肝心な点には答

えてくれず、表面的に取り繕われただけだ。」というものだった。私たち日本の若者は、与えられた情報を、そのまま正しいものだとし、鵜呑みにしてしまうクセがある。アメリカ人の若者の方が、“情報”に対する接し方が数段上手だという気がする。情報の信頼度の基準は、アメリカではかなり厳しそうだ。

以上は私が経験してきたほんの一部のことに過ぎないが、とにかく、アメリカで“情報”レベルの事柄に対する関心が異常に高まっていることに圧迫されてしまった。日本では、まだ“情報”的側面よりも“経済”的側面に多く目が向けられていて、それが、脱工業化社会になっていないと言われている所以だろう。アメリカが一步先を行っているという感じは否めなかった。

## Another Four—Letter Word “ J A S C ”

に於る人間関係は非常に不自然である。出会いの時から別れを約束され、短い期間のうちに親密な関係が生まれて行く。同じ様な意識を持った人々の集まりである点で J A S C は homogeneous である。しかし、国籍、それ以上に文化の違いによって Japanese と Americans という2つの Categories に分けられる。Homogeneous であることは他の人の文に譲ることにして、ここでは違い、特に expectation の差を述べたい。

日本側参加者は orientation を通じて、ある程度 J A S C とは如何なるものか理解をしていた。そして、定例会等を通じて、実際の

Program に対して、「こうあるべきだ」という expectation を持っていた。これは、各人の中に理想の J A S C 像をつくらせ、それと異なるものを全て拒絶するという態度につながる。一人の American の comment : 「日本人の平和 symposium に対する感想は皆、殆んど同じだよ」

同様なことが文化的 Stereotype—「Americans とはこうあるべきだ。」という expectation—についても言える。J A S C に対する個人の expectation は、各人の不満という形で昇華され、実害は生じなかった。しかし、Stereotype の方は違った。SAC (= Student Advisory Committee) の場で指摘があった。速回しな表現ではあったが、彼女達にそう言わしめるだけの ill behavior が我々の間に見られたのだろう。「日本人の男の人たちは American females に対して、日本人の女の子に対するのとは異なった態度をとる。」これは暗に、我々日本人男性が、日本人女性に欠けていると思われる Easy going、そして Too much acceptance を求めたが故に彼女達のひんしゆくを買ったことを意味する。文化の問題は、個人の問題として考えられ、表に出ることが少ない。彼女達の指摘は耳に痛い、貴重である。

新しい体験は、古い stereotype を破壊するから貴重なのであって、stereotype を持つこと自体、決して悪いことではないし、自然なことだろう。問題は、それに固執することであり、自分の殻に閉じ込めることである。自分の持っていた stereotype というものを、私自身ある程度壊さなければならなかった。「あなたは Americans をどの様に形容しますか。」という Questionnaire があった。

7月23日付：independent, democratic,

aggressive, etc. ……

8月15日付：“diverse”

45人のAmericansには45の性格があり45の形容詞が必要であろう。Americansの多様性にもかかわらず、日米には文化的にoverlapする部分が少ない。まして、世界には日本とは完全に異なった価値体系を有する国が多く存在する。

これが、正に私がJASOに多大な期待を寄せていなかった理由の一つである。つまり、日米、Japan-Americaに限ることによって、視野が狭くなるという懸念である。案の上、第三世界の分科会では、北からの視点での討論に終始していた。しかし、二国間であることにより、鮮明に国の影響を浮き彫りにすることができた。それは、安易に全ての違いを文化の違いに帰するという傾向を生んだが…

日本人によく見られる表現：We Japanese  
… Americans ; I ……

これが主たる違いであろう。私はUSAについて充分知っているとは言いがたいため、彼らのDecision-makingの方法についてCommentすることは避けたいが、日本では、集団に対して全会一致を求めることが、大きな特徴と言えるだろう。これに対して、私が特にPeace Declarationを作成中に感じた一つの方法がある。

Discussionを尽くし、お互いの立場を理解しようと努力はするが、最終的には多数決で全ての意思決定をするという一種「数の暴力」的やり方である。少数派を完全に同化することは最初から不可能としているのだ。勿論、「時間」というlimitationはあったにしてもだ。

これは「民主主義」という名のもとに少数

が圧倒される一つの要因となり得る。

Discussionを通して、自分の意見を他に理解させることができなければ、その意見は抹殺されるのである。多くのnon-native English speakersは少なからずこの問題につきあった。前向きに考えれば、このようなPr. (=Problem:問題)を抱えることによって、より良いmutual understandingを築き上げることができるだろうし、またそれなしには真に相手のことを理解したとは言えないだろう。

そのような意味でJASOはPr.をsolveする場ではなく、understandする場であった。しかし、我々ももっと社会に働きかけるべきではなからうか。

90Persons×25days

÷2000daypersons

これだけのenergyを持ってすれば非常に多くのことが実現可能である。又、社会に働きかけ、実際にPr.を解決しようと務めるときPr.のより根本的な捉え方ができるのではないだろうか。

今年の会議では第三世界(Bolivia)の子供の為に募金をするという試みが為された。\$216の予定が\$240程度集まり、子供の一年間の教育費その他に使われる。このような活動は、非常に容易く、効果もある。

実践的な活動は、demonstration effectを呼び起こし、滞在している地域との人々のより強い結びつきを可能にする。Homestayでは得られない対等な立場に立っての交流、host & guestではなく、一つのPr.を解決しようとする人間同士としての交流ができる。机上の空論に陥らずに済むこと、より強いmotivationが得られること、共有体験を持つ



ことにより、参加者の間に一体感が生まれること等が、利点として挙げられる。

今年の夏を通して、「何かをやった」という実感が湧いて来ない。Field Trips に行った。得られたものは単に知識のみ、書物の形で得られたかも……。Discussion をやった。共有体験の少なさ、現状認識の違い……。深い討論になることは稀であった。

J A S C は多くの団体・個人の厚意により、成り立っている。現在その feed-back は、personal basis で行われている。しかし、そろそろ J A S C 全体が目に見える形で社会へ働きかけても良い頃ではないだろうか。

J A S C は政治団体ではないし、Problem Solving Institution でもない。強いて言えば教育の場であり、最も適している形態は、John Dewey の、実際に Trial & Error で物事を把握するやり方であろう。Cultural Side は多分に Practical であるが、もう一つの側面である Academic Side には、改善の余地が多く残されている。まだ完全な形ではないが Peace Declaration の様な一つの形あるものを共に創り上げる場というものを継承し、Field Trips をこの方向に沿って、更に発展させることが必要である。

一ヶ月という時間は、出会いの時間としては充分すぎる程である。お互いを理解するには短かすぎ、我々は不自然な努力を強いられる。一ヶ月の共同生活、5時間平均の睡眠、緊張の連続、Tight な Schedule …。あらゆる面で J A S C の一ヶ月は非日常的であった。しかし不可能ではなかったし、新しく生まれた関係は、過去の多くの人間関係とことさら異なっているという訳でもない。はっきりしていることは、J A S C で得られた network

を決して過去のものとしてはいけないことである。常に、現在のものとして利用・発展させなければならない。一ヶ月の会議は、それまでの準備活動の集約であるかもしれない。しかし、決して Goal ではなく、寧ろ出発点ですらある。そう、

Furthering human integrity の為の……

Friendship

Remains

And

Never

Can

End

Love Hiro

## General American から Real Friend へ

佐 敷 尚 子

今年の J A S C が終わって約 2 週間が過ぎました。思えば、5 月の中旬に合格通知を手にした時は、夢ではないかと思ったもので。そしてそれからの 3 カ月は、本当にまたたく間にすぎってしまったように感じています。東京での初めての合同合宿で互いに自己紹介をしあったのがついこのあいだのようなのに…。アメリカから帰ってきてからも、本当にアメリカでの一カ月が現実だったとは思えないような気がしました。でも、J A S C で知りあった友達に手紙を書いたり、写真を見たりしているうちに、たしかに自分の中で何かが変わったということを感じました。特に、アメリカ人の友達に、便せん 3 枚にもわたる手紙が書けたこと — これは、何でもないのであるのだけれど、私にとって大変重要なこ

となのです。というのは、クラブで英語を学びながらも、まだ海外へ行ったことがなく、外国人の友人というも持たなかった私にとって、外国人と話したり、手紙を書いたりすることは、JASOに参加する以前は大変しんどいことだったからです。まず何を言えばいいのかわからない、こんなことを言ってもいいのか、こんな言い方をすれば気を悪くされるのではないか — などということが気になって、形式的なことしか言えませんでした。今回のJASOは、そんな私の“気負い”のようなものをなくしてくれたのです。今から思うと、私は、以前は“文化の違い”というものがあまりにも大きな壁になっていて、外国人と接する時は日本人と接する時とは全く態度を変えなければいけないように思い込んでいたように思います。それがいかに誤った考えであったか — それを教えてくれたのはJASOで知り合った多くのアメリカ人でした。彼らが私に教えてくれたこと — それは“みんな同じ人間なんだ”ということなのです。

“General Americanなんて言わないでほしい。”という言葉は何度言われたことでしょうか。ワシントンD.C.で始めてアメリカ側参加者に会い、不安でいっぱいだった私に、2人のアメリカ人のルームメイトはとても気さくに話かけてくれ、私達は随分といろいろな事について話しました。学校のこと、クラブのこと、将来のこと、恋愛のこと……。そしてある時、アメリカ人の性格、日本人の性格、というものに話がいった時、彼女はアメリカの個人主義について批判をはじめました。私は、“あ、こんな考えを持っている人もいるんだな”と思っていたところ、彼女は、“私の性格は日本人に近いかもしれない。でもア

メリカ人としての性質も持っている。”“I am in between.”と言ったのです。その時の、in between という言葉がすごく印象に残り、その時、私は、いわゆる typical American という人より、in between である方が多いのじゃないかと始めて思いました。それから、いろんな人と話をするうち、多くの人が、

“General American”という言葉をきらうのに気がつきました。ある男の子は、“Generalなものなんて外からつくられたものだ。ぼくらはそれぞれ自分の性格を持っている。だからGeneral Americanはこうだろう、なんて言わないでくれ。”と、はっきり言うのです。たしかに、考えてみればそうなのですが、これは私にとって1つの開眼のようなものであったかも知れません。

アメリカ人であっても、日本人であっても、1人の人間として、学生として、男性として、女性として……持っている悩み、喜びというものは変わらないのです。特に女性同志で話をした時によく結婚について、子供を育てることについて、また女の子として育てられてきたことについてなど、女性特有の話題について、互いの意見を交換したのですが、日米の文化的な違いはあっても、根本的に女性ゆえに乗り越えなければならない悩みというのは同じだったし、また、“理想の男性のタイプ”なんていうことの話をした時には、互いに同じような理想を持っていたりして思わず興奮(?)したものです。

このような経験を通して、会議が終わりに近づくとつれ、だんだんと、アメリカ人、日本人という感覚がなくなってきたように思います。そして、自分の思っていることが気がねなく、自由に言えるようになり、今、長い手紙を書くことができました。そのことがと

てもうれしくて、何か自分の殻が1つはずれたような気がしています。

もちろん、このようなことにはすでに気づいていらっしゃる方も多いかもかもしれません。でも私にとって、これこそがJASOで得た最大の収穫だったような気がします。もちろん様々な場所を訪れて、アメリカ文化をじかに知ったことも貴重な体験ではあったし、文化の違いを感じたことも大切なことだったと思います。しかしその前に、やはり“国籍は違っても、言葉が違っても人間であることに変わりはない。”ことを再認識することから相互理解は始まるのではないのでしょうか。それがあってはじめて、互いに誤った見方、偏見をとりのぞき、理解しようとする姿勢が生まれてくるのではないのでしょうか。今、世界中でおこっている様々な問題に対して、私達に何ができるかと考えた時、まずしなければならないのはそれではないのでしょうか。

この意味で、JASOというのは本当にすばらしい機会を与えてくれると思います。というのは、1か月ものあいだ生活を共にするためには、偏見を持ってはやっていけないからかもしれません。そして、私のように外国人と接するのに困難さを感じている人が、少しでも多くJASOに参加して、それを打ち破ることができるのを切に願います。つたない文章ではありましたが、私の感じたことが少しでも新しくJASOに挑戦しようとなさる方々の御参考になれば幸いです。そしてこのエッセイを書き終えて、今、私の脳裏に浮かんでくるのは、別れの時にあれ程陽気だったアメリカ人達が見せてくれた涙と、“また会おうね”と言ってくれた時の彼らの笑顔です。

## 最後のホームステイ

桑 和彦

一カ月間の日米学生会議も始まってみると瞬く間に時が過ぎ、ボストン郊外のウエルズレー大学の素晴らしいキャンパスで閉会式を迎えた。そして、別れを惜しむ間もなくアメリカ側の参加者を見送ったあと、ぼくたちは最後のプログラムである三日間のホーム・ステイにむかった。

ぼくをむかえてくれたのは、ボストンの郊外のハミルトンに住む若い夫婦で、今は夫のマイクが大学院生で妻のドットーが働いているのだが、かつて彼女が大学生の時にはマイクの方が働いていたようで、さすがにアメリカらしく合理的だと感心した。彼らはマイクの通う大学院の中の寮で暮らしていて、ぼくたちは一日目の午後をそのキャンパスで過ごした。そこは緑の芝生が丘の中に広々と広がり、丘の上にはチャペルがあってその絵葉書のような美しさには感激してしまった。ぼくたちはテニスをして暑くなると、プールで泳いで芝生に寝そべるといふ、実にのんびりとした時を過ごして、会議の疲れもふきとんでしまうようだった。そのプールでぼくが偶然知りあった中年の婦人が、夫の軍隊の関係で日本に2年程住んだことがあったようで、いろいろな話ができて楽しかった。一つ驚いたのは、彼女の家庭ではベトナム難民の少年を息子同様に2年間可愛がっているようで、彼女の夫がベトナム戦争にも行っただろうことを思うと、興味深かった。

その日の夕方は、その地域の人々が集って

きて野原で草野球を楽しむ時間になっていた。ぼくたちは見ていただけだが、練習後に皆で輪になり、静かなお祈りをしているのを見てマイクの通うプロテスタントの神学校を中心とした、農村的なコミュニティの人々の暖いきずなを感じることができた。そして東京では決して見られない牧歌的な生活を素敵だと思った。

翌日、ぼくたちはボストン市内へ出かけた。最初は何人かのグループでボストンで最も高いビルに登って展望を楽しんだり、フリーダム・トレイルと呼ばれる史跡めぐりの道を歩いたりして、近代的な物とアメリカでも最も歴史と伝統のある物の好対照性を楽しんだ。そのあと皆で別行動をとり、ぼくはファニエル・ホール・マーケットというとてもにぎやかで大きな市場で買い物を楽しんだあと、ボストンの港めぐりのクルーザーに乗った。最初は一人で一時間半の遊覧船に乗るというのは退屈するのではないかと思ったが、素晴らしい景色もさることながら、乗るとすぐにアイルランドから旅行にきているという家族と知り合いになれて、乗っている間中いろいろ話ができて楽しかった。とにかくぼくの拙い英語でも、一般の人と十分に会話を楽しめるということがわかっただけでも実に気分がよかった意義深かった。途中で港に日本の貨物船が停泊していたのだが、彼らが五才になる子供に日本のことを説明するのに、トヨタとかホンダとかいう言葉を使っているのを聞いて、今さらながら日本の経済面での、またその面での進出をしみじみと実感してしまった。船を降りる前に一諸に写真を取ったりしたのだが、やはり旅先で人と知り合うことは素敵なことだと思った。

そのあと短い間だがボストンの街を一人で歩いた。不思議なもので、一人で歩いていると急に自分がアメリカにいることが今さらのように実感されて、地下鉄に乗るだけでもなんとなく楽しかった。それがぼくにとってはなんとも心地よくて、ボストンのホーム・ステイがぼくに与えてくれた貴重な体験だった。

そして翌日ホーム・ステイ・ファミリーと別れを惜しんだあと、ぼくたちはニューヨークへむかい、エンパイア・ステート・ビルディングから最後の夜景を楽しんで、その翌朝日本への飛行機に乗りこんだのだった。

## かっちゃんへの手紙

赤津 晴子

9月のカレンダーの訪れと共に、季節はゆっくりと夏から秋へと動いています。

かっちゃん、その後お変わりありませんか。第34回JASCに別れを告げてから早や2週間が過ぎようとしています。JASCを通しての様々な出会い。そのなかでかっちゃんとの出会いは特に印象的でした。5月の合同合宿で初めてかっちゃんにお目にかかった時、正直な事を思い切って言ってしまうと、かっちゃんの白い杖に私は非常に距離を感じてしまいました。隣りに座っても、どうおしゃべりを始めたら良いかわからなくて、一言、「赤津です。どうぞよろしく。」とボツンと言うのが精一杯でした。それから7月の出発までは東京・大阪と分かれていましたので、渡米2日前にかっちゃんが東京に出でいらした時が2度目にお目にかかった時でした。あの日、石津君と私がかっちゃんを東京駅にお迎えに

行った事、覚えていますか。かっちゃんを誘導する為に初めて私の腕を握っていただいた時、私、わけもなく緊張していたのです。そうしたら、やさしく「もっと楽に腕を下げて下さい。」と言って下さいましたね。思えばあの時から少しずつ色々なお話を親しくするようになりました。

アメリカに着いて暫らくは私も緊張がとれませんでした。かっちゃんもだいたい緊張していたのではないですか。いつもきちんと椅子に座ってレクチャーを真剣に聞いていたあなたの姿が今でも目に浮びます。ワシントン滞在中、緊張と疲れの為か、かっちゃんの胃腸の具合が悪くなったと聞いた時、本当に心配しました。でも翌朝、カフェテリアから朝食を部屋に運んでみると、かっちゃん、食欲がすっかり元にもどっていて、私うれしくなりました。かっちゃん、あなたはいつもまじめで礼儀正しかったですね。でも時々、あまりにも礼儀正しすぎて、まわりの人にとっても気を使っているのが良くわかりました。けれどもそれでは疲れてしまいます。だから、ほら、バスの中で「少くとも私には絶対気を使ったり遠慮しない」って指切りしたこと、覚えていますか。

私が実際かっちゃんの側に一語に居た時間はこの1ヶ月の中のほんの限られた時間でした。しかし毎日遠くから、かっちゃんの笑顔を拝ませていただいていたのですよ！Japan Nightの劇での活躍、同じくJapan Nightで日本食の説明を舞台の上でしていたあなたの姿……すてきでした。そうそう、それから、会議の最後の夜開かれたパーティーで、かっちゃんたら酔っぱらって……。パーティーから部屋に戻った時、ポケットから25セント

コインを取り出してそれを必死に錠穴に入れようとしていた……って下川君に後から聞きましたよ！でもあんなにくつろいで、楽しそうだったかっちゃんの姿が私にはたいへん印象的でした。

かっちゃんは目が不自由ですね。でも私は時々心が不自由になります。何か失敗したり、いやな事、悲しい事、つらい事があると、すぐ落胆してやけを起こしてしまうのです。困難に立ちむかえずにすぐあきらめてやる気をなくしてしまうのです。だからかっちゃんが私のサイン帳に、「僕の信条としている言葉を一言、“絶望は怠か者の結論である”」と書いて下さった文字が鋭く胸にさきました。この言葉、いつまでも大切にしたいと思います。

先ほどから降っていた雨が止みました。しっかりと濡れた緑が、雲間から差し込む光に照らされて、まるで宝石を散りばめた様にきらきらと光っています。もう秋ですね。

かっちゃん、楽しい思い出、本当にどうもありがとう。東京に出ていらっしやる時は御連絡下さいね。それでは又

お元気で……

1982年9月

赤津晴子

森 勝弘様

## JASCの思い出

一心にうかぶままに

清川貴子

東北の秋は突然やって来る。昨日までのうだる暑さが嘘のように、今日はもう冷んやりとした冷気が肌を包む。

白蔵という言葉そのままに、この秋の中に

は、J A S C (日米学生会議)の思い出が詰まっている。私は今、その一つ一つに追憶の光をあてて、澄んだ秋空のスクリーンに映し出している。

J A S C — 人々との出会い、友情、そしてアメリカの旅 —

雪柳の白い花が春風にそよぐ頃、私は、初めてJ A S Cの扉の前に立った。それは、ふとした偶然が招いたものではあったけれど、未知なる世界への確かな誘(いざな)いであった。胸をはずませて、私はその扉を開いた。

日に日に強くなる日ざしを意識しながら、来たるべき夏に向かって悪戦苦闘した日々。新しい知識をかき集め、考えをめぐらし、考えがぐるぐるまわってまた振り出しに戻ってくる。苦しみの中で(もが)いて、孤独の中で後悔と失望に悩んだ。そんな合間合間のJ A S Cの仲間からの長距離電話、手紙。「元気でやっている? ペーパーは進んでいる?」励ましの言葉に、いつしか私の心は和(なご)み、新たな希望が生まれる。

そして夏がやって来た。

アメリカ側との初めての出会い — ワシントンD.C.。心の隅に持っていた、これからの三週間への不安をふきとばすような、第一日目のパーティーの熱気。

ちょっぴり緊張した最初の分科会。いかに相手の中に溶けこもうかと迷いながら、自分をさらけ出すことが最短距離だと気付いたとき、相手もまた自分の意見を出しきることに恐れなくなっていた。

ひとりひとりの意見は決して同じではない。

激しい討論の中で、やがて私たちは、互いの相違を相違として認めることの重要さに気付いた。そして、たとえその方法が違って、目指す最終ゴールはみな同じであることを知ったとき、互いに、いい知れぬ親近感を覚えた。 — 協調とは安易な妥協ではない。それは互いの相異を認めあうことなのだ —

雀色時のジェファーソン記念館。“All men are created equal ……”独立宣言の原文を読みながら、「“men”というのは、白人で、男性で、プロテスタントで、相当の財産のある人のことよ」と、有色人種で女性であるアメリカ人のあなたの口をついて出た一言(ひとこと)が印象的だった。 — 平等とは何だろう —

分科会の討論ににだいに熱が籠もり、日に日にその密度を濃くした、Duke大学。それに比例して、参加者相互の絆も太く強くなって行った。夜ごと、ピアノラウンジから流れるバッハのインヴェンション1番、ウェルナーの野ばらの合唱。中庭にこだまするギターの音色(ねいろ)、歌声、そしてそこそこに広がる議論の輪。 — これが平和でなくて何だろう — Dukeの夜空には、いつも希望の星が輝いていた。

ワシントンからノースキャロライナへ、ノースキャロライナからボルチモアへ —、バスの旅にはお弁当がつきものだ。ある夜、突然姿を消し、夜更けに戻って来たルームメイトのあなたはA E C(アメリカ側実行委員)だった。「やっと90このサンドウィッチができたわ。これであすは、みんな飢え死にしないですむわよ。」と、いたずらっぽくウインクする。聞けば、A E Cのお弁当の係が注文を忘れたのだという。いつの間にかベッドに入

り、すやすやと寝息をたてているあなたの寝顔を見ながら、私は、表面には出ないけれど尽きることのない、J E C (日本側実行委員)、A E C の苦勞と責任感の一端を垣間(かいま)見た気がした。— 本当のことは、目には見えないものなのだ—

ボルチモアの湾に浮かぶベダルボートを漕ぎながら、「疲れても、もう1人がいるのだから……」とつぶやいたあなた。その横顔を月の光が照らしていた。— 人は、一人では生きられない—

ひたすらフリータイムをエンジョイしたニューヨーク。完全に孤立したコミュニティー、チャイナタウン— これもアメリカ。「一週間ずっとここで過ごしたい。」とあなたが言ったメトロポリタン美術館。コンサート、ミュージカル……。

そして、会議の最終地、Wellesley。おとぎの国さながらの森と湖に囲まれて、90の心は、いま、このJ A S C がいつまでも続くことを願った。けれど、願いはむなしく、閉会の時が来て、一人、また一人とアメリカ側の参加者が去っていく。涙をこらえ、再会を約束して去っていく。

Wellesley の木々のさきやきに包まれて一人佇みながら、私はJ A S C の意味をかみしめた。一日、一日が充実していたのは、決して異国の地にあったからではない。新しい生活だったからではない。互いに、時を、心を分かちあう友がいたからだ。そうだ、J A S C をJ A S C たらしめていたのは、参加者一人一人なのだ。

— 男女の平等を叫ぶあなた。実行の伴わない言葉なんてただむなしいだけだと、自ら、みんなの重いスーツケースを両手に運んでい

た。

— どんな些細な意見にも、きっと耳を傾けてくれたあなた。あなたのやさしさが忘れられない。

— 大西洋にかかる虹をいっしょに眺めたあなた。あなたの微笑みが清々しかった。

— みんなが寝静まったのも気づかず、よくおしゃべりをしたあなた。幼い頃の思い出すら話してくれた。

— ベートヴェンの「テンペスト」が大好きだと言ったあなた。あまり私と似ていることが多くて、驚いたことがあった。

— 夾竹桃の赤い花のように、いつも明るかったあなた。これからは“新しい友情”だと思えば、淋しさなど考えられないと、別れ際にいっしょぼりしていた私に声をかけてくれた。みんな、みんな、ありがとう。

一日一日が過ぎて行き、J A S C が確実に“思い出”と化してしまうことは切ない。けれども、そこで築いた友情が決して過去のものではなく、現在も、そして未来もあるのだと思えるのは幸せなことである。

地方の医学部という狭い閉鎖社会に身を置いて、私は、そこにどっぷりと浸(つか)ってしまふことが怖かった。私の好奇心は新しいものを求めた。第34回 J A S C が自分にとって成功だったか否か— その答えは今すぐには出ない。それは、これからの人生の中で見出していくものだとは私は思う。しかし、絶えず私が追い求めてきた新しい“何か”を、J A S C が与えてくれたことだけは確かである。

J A S C — 自分への挑戦、夢、そして未来—

## JASCについて今まで 誰も書かなかったこと

山 脇 啓 造

33回会議と34回会議に参加して気付いた点について述べたい。それは、日本で開かれる会議とアメリカで開かれる会議とでは、同じJASCと言っても中味が相当違うということである。

会議の構成自体は最近の傾向として、その是非はさておき、ほぼ似かよった内容となっている。ではどこが違うか。私は両国での会議にそれぞれ一回参加しただけであり、そこから一般化するの是非常に無理があるのは承知のうえで、過去の会議報告書を参考にしながら、推測も混じえて私見を述べたい。

まず、本題にはいる前に指摘しなければならぬことがある。それは、JASCに対する「思いいれ」が日本側とアメリカ側では大きく差があるということである。これは以前から指摘されていた点で、国際社会における両国の力関係から始まって、両国におけるJASCの社会的地位の違い、両国学生の夏休みに対する考え方の差まで、いくらかでも理由をあげることができる。より具体的には、日本側実行委員会(JEO)とアメリカ側実行委員会(AEO)の意識に大きな差があるようである。日本側は、良く言えば「民間大使」としての使命感に燃え、悪く言えば非常に気負っているということである。その理由の一つは、JEOは直接募金活動に携わり、外務省、企業その他を訪問することによって、JASCと社会とのつながりを強く意識するのに対し、AEO側はその様な機会のないこと

があげられる。また、JEOは戦前から最近までの様々な会議OBとの接触によって、会議の「伝統」あるいは「責任」の重さを自覚せざるを得なくなるのに対し、AEO側はOBとの接触がなく、毎回新しいメンバーのもと(もっとも、アメリカ側は2年続けて実行委員を経験する者が多い)、会議の準備を行なう。

さらに、JASCへの思いいれの日米差が顕著に反映されているのが、会議参加者の準備期間の使い方だ。日本側では、5月の選考試験後に全体合宿をもち、以後、東京・大阪を中心に週一回の定例会を開き、JEOと新参加者が一体となってプログラミングの準備にあたり、あるいは様々な勉強会を催す。一方アメリカ側は、地理的事情もあって、会議が始まるまで新参加者が他の参加者と顔をあわせることはない。また、会議以前にJASCについて受ける情報量も少なく、シンポなど、その趣旨、内容、形式など何も知らず、時にはテーブルのペーパー作成さえ知らずに会議をむかえる者さえいる。かくして、会議前の日米間のペーパー交換は、毎年のように、一方通行になるテーブルがでてくるのである。端的にいって、アメリカ側新参加者に、会議の「準備期間」という概念は存在しないのである。

さて、以上述べたことは、日本側とアメリカ側の思いいれの差であって、これは会議が日本で開かれようが、アメリカで開かれようが、違わないはずである。しかし、日本で開かれるときは、JEOにイニシアチブがあることや、周囲の環境もあって、日本人ペースに、アメリカで開かれるときは、アメリカ人ペースになるように思われる。そして、こ



こで誤解を恐れずに述べれば、まず、アメリカでの会議は日本での会議に比べて、より「観光旅行」的だということである。「JASOは観光旅行ではない。」とは、毎年、特にアメリカで会議が開かれるときに、実行委員の口から強調されることらしいが、実際、遠路はるばるアメリカにやってきた日本人、日本にやってきたアメリカ人にとって、「観光」の意義を否定しるのは困難であろう。以下、アメリカで開催される会議が日本で開かれる会議よりも、なぜより観光旅行的となるか、順を追って述べたい。

まず、日本人にとってアメリカというのは、一種独特の雰囲気をもった憧れの地であることが多い(例、若者の西海岸志向、英語学習者の留学熱)。初めて訪れたアメリカの地では、毎日が発見の連続に違いない。会議のプログラムもお膳立てされたものを順に消化する中で、どうしてもお客さん気分になりがちである。昼間の会議よりも、自由時間にどこに行くか、ブロードウェイに行きたいし、エンパイアステートビルにも登りたい、あの有名なディスコで踊りたいなど、気持ちは「観光」に傾きがちとなる。一方アメリカ人は、アメリカで開かれるJASOを、自分の夏休みのプランの単なる選択肢の一つと考える場合が多く、手軽にアメリカ各地を回れ、旧友にも会え、さらには、就職活動その他の私用をちゃっかり会議中にすませる者もいる。これは、勿論アメリカ人全員にあてはまるわけではないが、かなりeasyな気持ちで参加するアメリカ人も多く(最初に選ばれた35名の参加者のうち、10名前後が参加を辞退するというのもその表われの一つだろう)、必ずしも日本人と議論をすることを第一と考えない

者が少くないようである。

一方、会議が日本で開かれるときは、まず、日本人の心が浮わつくことはない。さらに、プログラミングに直接かかわり、自分が作りあげた会議という意識が強い。アメリカ人にとっては、日本に行くというのは大変なことらしく、また高い競争率の中から選ばれた彼らが、相当の決意 - 日本及び日本人について学ぼうという熱意 - を持ってくるのは間違いない。こういった事情のもと、日本での会議は、より「会議」の様相を呈してくるのである。

日米両国における会議の違いとして次に指摘できるのは、会議の雰囲気が違う点である。ここでも無理を承知で単純化すれば、日本での会議は、group-orientedで、参加者全体としての一体感が強く、またwetな人間関係が築かれやすいが、アメリカでの会議は、よりindividualで、参加者全体としての一体感が弱く、またdryな人間関係が築かれやすいということである。また、アメリカでの会議では、日本人とアメリカ人の交流不足の問題もたびたび指摘される点である。

第3に指摘できるのは日本での会議はよりformalで形式を重んじるが、アメリカでの会議はよりinformalで形式よりも実質を重んじる傾向にあるように思われる。例えば、おそらく日本での会議では、正装を要求される場面がより多いであろう。またアメリカ人にとっては、時間に多少遅れることよりも、充実した議論を行なうほうが、はるかに大切なのである。また、organizeのしかたをみても、日本では、用意周到に、綿密なスケジュールをたてるが、アメリカでは、looseなスケジュールのたて方で(野外研修など、前

日の夜にスケジュールが決まることも多い)、何か不測の事態がおこっても“Take it easy.”的なところがあるように思われる。

その他、日米両国における会議について比較すべき点は、英語の重要度の違いなど多々あり、上述の3点も互いに関連しあい、補足すべき点も多いのだが割愛する。ここでより問題なのは、日本側とアメリカ側のJASC像が異なり、そのギャップが両者にfrustrationを抱かせ、時としてconflictが生じるということである。大体の傾向として、日本人はアメリカでの会議に不満をもち、アメリカ人は日本での会議に不満をもつ傾向がある。特に、日本で会議に参加し、アメリカでの会議にのぞむ日本人実行委員、アメリカでの会議に参加し、日本での会議にのぞむアメリカ人実行委員には、その傾向が強い。

では、どうすればこの問題を解消できるか。ここでは、短期的展望に絞って述べる。まず準備期間中は、JECとAECがお互いの準備活動についてももっとよく知る必要がある。これまでは、良くいえば相互干渉だが、あまりに無知にすぎたように思われる。実施要領の内容(といってもアメリカ側には存在しない)、募金活動、広報活動、選考方法、新参加者の準備状況など、互いに情報交換することが、あらぬ誤解が生じるのを防ぎ、問題解決の第一歩であろう。特に新参加者の準備に関しては、(アメリカで会議が開かれるときの)日本側は、あまり焦点を絞らずに勉強会をもち、(日本で会議が開かれるときの)アメリカ側は、新参加者に対し、JASCについてより多くの情報を事前に提供することが大切のように思われる。次に会議期間中だが、不満な点を持ったまま、ずるずると会議

を終えてしまわぬ様に、中間反省会が有効なように思われる。これまでも全体での反省会はもたれてきたが、より実質的な討議をおこなう場として、また分科会ごとに、あるいは、JEC、AEC、そして両者合同の中間反省会も必要であろう。(話はややそれるが、JASCの看板である分科会も、より改善の余地がありそうである。そもそも分科会によって応募者数の差は激しいし、また、日米での分科会の需要にも差がある。会議の討論では、やはり英語が大きな障壁となるし、日米のdiscussionに対する考え方の違いも浮き彫りとなる。)

以上、大雑把な議論であったが、簡単に日米両国におけるJASCの比較考察をおこなってみた。できる限り客観的記述になるように努めたが、筆者の力不足のため、またアメリカ人の視点がどうしても欠けてしまうため、読者には異論のある点も多いかと思う。そのような点も含めて、今後の会議参加者が、この拙稿を材料に他の仲間と話しあい、あるいはアメリカ人と意見を交換するなかで、皆のより満足のいく会議をつくりあげてもらうのが、筆者の願いである。

(第34回会議副実行委員長)

# 日米学生会議における国際教育の連繋と統合

上智大学大学院修士2年国際関係論

広里恭史

## I はじめに

すでに国際教育振興会の伊部正信氏が、「日米学生会議とは『教育機関』である。」と述べているように、およそこのような国際交流プログラムは、教育機関の性格を有している。この会議<sup>(1)</sup>においても、分科会討論、シンポジウム、野外研修といった多岐にわたる諸活動を通じて、参加者は、戦争と平和にかかわる問題や南北問題から、人権、社会における男女の役割、資源・エネルギーに至る諸問題に関して、意見を交わし、認識を高め、将来において何らかの形でこの会議で得た経験を生かしている。筆者は、ここに、日米学生の相互理解を基調として、学生自身のイニシアチブにより各種の国際教育が連繋、統合的に実践されている具体例を見ることになる。

この小論では、多方面にわたる日米学生会議の機能の中でも、特にこの国際教育機関としての性格に焦点をあてて、筆者の報告としたい。そのためには、まず「国際教育とは何か」が問われねばなるまい。

## II 国際教育

国際教育に関しては、これまで数多くの定義が試みられてきたし、また世界のいたるところで実践されてもいる。しかし、各国の歴史的、文化的背景の相違や各人の重点のおき方の相違により、コンセンサスの

得られる教授法、カリキュラム等は開発されていない。そのことが、不必要な混乱を教育現場に生じさせている原因ともなっているが、ここでは、その概念に関して、一応、1974年のユネスコ総会で採択された勧告に従うことにする。周知のように、それらは、<sup>(2)</sup>

1. 国際理解のための教育（異文化間教育）
2. 国際協力のための教育（開発教育）<sup>(3)</sup>
3. 国際平和のための教育（平和教育）
4. 人権、基本的自由についての教育（人権教育）

という4つの柱からなっており、平和、開発、異文化間教育は、人権教育のための土台作りと理解されよう。

この限られた紙面においては、個々の国際教育について、その有効性を検証したり、包括的なパラダイムを展開することは不可能である。ただ、国際教育の意味するものを問われた場合、次のように広く定義できる。即ち、国際教育とは、一つには、相互依存の時代といわれる今日の国際社会において展開される国境や民族、文化の壁を越えての教育の出会いと交流であり、また一つには、戦争や平和、開発、異文化摩擦<sup>(4)</sup>といった国際社会に存在する多様な諸問題に関し、人類が学習し、問題解決能力を作り出す過程である。そして、はっきり断言できることは、<sup>(5)</sup>地球時代における国際化の進行のなかで、このような活動が、今後、益々活発に進められていくであろう、という点である。

### Ⅲ 日米学生会議と国際教育

ところで日米学生会議の活動内容を制度的、歴史的に分析してみた場合、それらは明らかに、前章で導入した国際教育の定義に包括されることに気づかざるを得ない。以下、具体的に、これまでの日米学生会議の活動内容をひもとき、国際教育に関連する事項を中心に再構成してみよう。

表1-1<sup>(6)</sup>は、会議創設 30周年を期し復活した1964年から1972年の会議がとり扱ってきた問題を、分科会の名称を中心に整理を試みたものである。尚、ここでいうところ<sup>(7)</sup>

の平和、開発、異文化理解等の概念に関しては少し説明を要する。平和概念に関しては、1964年から1972年において、いわゆる「消極的平和」観をとっている。これは戦争の廃絶を目指すもので、より広義には、一般的に暴力(violence)のない状態を平和とみなしていた。開発概念に関しては、同じ時期をとってみると、1960年以降の発展途上国の誕生を背景に、それらの国の低開発の現状を正しく理解するという、チャリティー的で消極的な範囲にとどまっている。異文化理解に関しても同様で、日米二国間における国際理解に限定されていよう。

表1-1(1) 1965年(16回)～1972年(24回)

| 16回<br>1964 | 17回<br>1965 | 18回<br>1966 | 19回<br>1967 | 20回<br>1968 | 21回<br>1969                                           | 22回<br>1970 | 23回<br>1971                           | 24回<br>1972 | 年度<br>概念                                                |
|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------------------------------------------------|-------------|---------------------------------------|-------------|---------------------------------------------------------|
| 政治          | 政治          | 政治          | 政治          | 政治          | 政治                                                    | 政治          | 政治<br>(中国問題)                          | 政治          | 平和<br>・<br>開発<br>・<br>異文化<br>理解<br>人権<br>・<br>基本的<br>自由 |
| 経済          | 経済          | 経済          | 経済          | 経済          | 経済                                                    | 経済          | 経済                                    | 経済          |                                                         |
| 社会          | 社会          | 社会          | 社会          | 社会          | 社会<br>(都市化)<br>(学生運動)<br>(現代社会<br>と宗教)<br>(男性と<br>女性) | 社会          | 社会<br>(公害)<br>(少年犯罪<br>と麻薬)<br>(人種偏見) | 社会          |                                                         |
| 文化          | 文化          | 文化          | 文化          | 文化          | 文化<br>(言語)                                            | 文化          | 文化<br>(デート<br>と結婚)                    | 文化          |                                                         |
| 教育          | 教育          | 教育          | 教育          | 教育          | 教育                                                    | 教育          | 教育                                    | 教育          |                                                         |

( ): オープンテーブル

ただしそれらの諸概念は、1970年代に入って大幅な変容をとげる。平和概念に関しては、すでに常識化したように、その主目的が、

いわゆる「構造的暴力」の問題にむけられ、大国と小国との不平等、国際的正義の不在が叫ばれるようになった。開発概念に関しては、

その経済的側面だけでなく、社会的、政治的側面を含むものとなり、社会が物質的に豊かなと同時に、それが享受されるように社会正義を押し進めることだと考えられ出した。

発展途上国だけに限るのではなく、工業化された国においても、富の不均衡の是正、社会的不平等の解消、社会的、政治的参加、などという開発の課題が山積している。故に、開発は、発展途上国、先進国それぞれにおける人間の尊厳、社会的正義の問題と結びついていると言えよう。異文化理解に関しても、従来は、主権国家間の関係を前提とした、他国、他国民への理解を目指す国際理解であったことを反省し、複合国家間はいかに及ばず異なる民族、文化の相互理解を促進することに新たな展望を見ようとしている。

表1-(1)では、便宜的に平和、開発、異文

化理解といった、ユネスコの「勧告」に表われる柱の枠組にそって分科会の整理をしたが、それらの概念の意味する範囲は、歴史的な広がりを持っていると判断されたい。

それによると、平和に関しては、政治テーブルにおいて、国連の役割、中国問題、日米安保、ベトナム戦争等が、消極的平和観に基づく問題として討議されているし、開発に関しては、政治テーブル、経済テーブルにおいて、途上国への援助問題、南北貿易が討議されており、社会テーブルにおいては、人種問題、少年犯罪、男女の役割等が討議されているが、概して消極的なアプローチであった。異文化理解に関しては、文化テーブルや教育テーブルで、単に日本両国の文化の相違や教育システムの相違についての情報交換をして

表1-(2) 1973年(25回)～1982年(34回)

< > : 問題領域  
 □ : 討論領域  
 [ ] : シンポジウム  
 ( ) : オープンテーブル

| 25回<br>1973 | 26回<br>1974 | 27回<br>1975 | 28回<br>1976 | 29回<br>1977 | 30回<br>1978 | 31回<br>1979 | 32回<br>1980 | 33回<br>1981 | 34回<br>1982  | 年度<br>概念 |
|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|-------------|--------------|----------|
| 政治          | 政治と政治変革     | 政治経済        | 政治経済        | 国際問題        | 第3世界        | 国際関係        | 国際関係        | 国際関係        | 国際関係         |          |
|             | <戦争と平和>     | <核と平和>      |             |             | 核と平和        |             | (平和シンボ)     |             | (第3世界シンボ)    | →        |
|             |             |             |             |             | (国際平和シンボ)   | (平和シンボ)     | (民主主義シンボ)   | (平和シンボ)     | (平和・社会変動シンボ) |          |
| (市民と政治)     |             |             |             | 政治参加        | 政治参加        | 政治参加        | 政治参加        | 政治システム      | 社会変動         |          |

| 25回<br>1973       | 26回<br>1974        | 27回<br>1975              | 28回<br>1976             | 29回<br>1977            | 30回<br>1978 | 31回<br>1979 | 32回<br>1980 | 33回<br>1981                 | 34回<br>1982             | 年度<br>概念 |
|-------------------|--------------------|--------------------------|-------------------------|------------------------|-------------|-------------|-------------|-----------------------------|-------------------------|----------|
| 経 済               |                    | 政治、<br>経済、<br>企業と<br>労働者 | 政治、<br>経済、<br>余暇と<br>労働 | 国際<br>問題、<br>労働と<br>人間 | 企業と<br>社会   | 企業<br>問題    | 企業<br>問題    | 国際<br>経済                    | 企業 →                    |          |
| 社会 A              | コミュ<br>ニティ<br>と社会  | コミュ<br>ニティ<br>と心理        |                         |                        |             |             |             |                             |                         |          |
| 社会 B              | 〈環境<br>問題〉         | 人口と<br>食糧                | 環境                      | 環境                     | 環境          | 環境          | 環境          | 〔エネ<br>ルギー<br>シンポ〕<br>エネルギー | エネルギー                   | 平 人      |
| 社会 C              | 〈女性〉               | 女性と<br>社会                | 性の役<br>割と家<br>族         | 女性と<br>社会              |             | 女性と<br>社会   | 女性と<br>社会   | 資源・<br>環境                   | 資源・<br>環境               | 和 権      |
|                   | 〈人種と<br>少数派〉       |                          |                         | 少数<br>民族               | マイノ<br>リティ  | マイノ<br>リティ  | 少数派         | 社会に<br>おける<br>男女の<br>役割     | 社会に<br>おける<br>男女の<br>役割 | ・ 開      |
|                   | 〈暴力と<br>市民抵<br>抗〉  |                          |                         |                        |             |             |             | 男女<br>シンポ                   | 男女<br>シンポ               | 発 本      |
|                   | 〈社会と<br>反社会<br>運動〉 | 犯罪                       |                         |                        |             |             |             | 〔人権<br>シンポ〕                 |                         | ・ 異 的    |
| (自由)              | 〈老人〉               |                          | 社会<br>福祉                | 社会<br>福祉               |             | 社会<br>福祉    | 社会<br>福祉    | 社会<br>福祉                    | 人権                      | 文 自      |
|                   | 〈科学と<br>医療〉        |                          |                         | 生と死                    |             |             |             | 生と死                         | バイオ<br>エシク<br>ス         | 化 由      |
| (将来の<br>人間関<br>係) | アルコ<br>ール<br>麻薬性   |                          |                         |                        | 現代人<br>の病理  |             |             | 科学と<br>社会                   | 科学と<br>社会               | 理 解      |
| (日米学<br>生気質)      |                    |                          |                         |                        |             |             | 科学と<br>社会   | 科学と<br>社会                   | 科学技<br>術と社<br>会         |          |
| (日本人)             | 〈マスメ<br>ディア〉       |                          |                         |                        | マスメ<br>ディア  |             | マスメ<br>ディア  |                             |                         |          |

| 25回<br>1973 | 26回<br>1974 | 27回<br>1975            | 28回<br>1976 | 29回<br>1977 | 30回<br>1978       | 31回<br>1979               | 32回<br>1980        | 33回<br>1981       | 34回<br>1982 | 年度<br>概念 |
|-------------|-------------|------------------------|-------------|-------------|-------------------|---------------------------|--------------------|-------------------|-------------|----------|
| 文化A         |             | 文化と<br>芸術              | 芸術          | 文化と<br>芸術   | 文化と<br>芸術         | 文化と<br>芸術                 | 文化と<br>芸術          | 文化と<br>芸術         | 文化と<br>伝統   |          |
| 文化B         |             | 〈コミュ<br>ニケーションと<br>文化〉 | 言葉と<br>社会   |             | 〔異文化<br>間シン<br>ポ〕 | 異文化<br>間コミュ<br>ニケー<br>ション | 〔異文化<br>シンポ〕       | 〔文化交<br>流シン<br>ポ〕 | →           |          |
| (宗教)        |             | 〈宗教〉                   | 〈宗教〉        | 宗教          |                   |                           |                    |                   |             |          |
| 教育          | 教育と<br>学問   | 教育と<br>学問              | 教育          | 教育          | 教育                | 教育                        |                    | 教育と<br>社会         | 教育と<br>社会   | →        |
|             |             |                        |             |             |                   | 〔アジア<br>シンポ〕              |                    | 〔アジア<br>シンポ〕      |             | →        |
|             |             |                        |             |             |                   | 〔総合テ<br>ーマシ<br>ンポ〕        | 〔総合テ<br>ーマシ<br>ンポ〕 |                   |             |          |

次に表1-2)は、会議の内容が改革された1973年から、今夏の1982年までを、同じく分科会の名称を中心に整理をしたものである。(g)

分科会は多角的になり、国際社会がかかえる問題のほとんどを網羅するようになった。1978年の第30回からは、新たにシンポジウムという企画も加わり、会議は、日米の二国

間関係を中心としたものから、日米関係を軸としながらも、全地球的な視野で多様な国際問題を討議する場となったのである。

さらに表2-1)〔1965年(16回)～1972年(24回)〕と表2-2)〔1973年(25回)～1982年(34回)〕では平和、開発、異文化理解という概念を基準に、会議の分科会等の整理を試みた。

表2-1) 1965年(16回)～1972年(24回)

| 概念    | 分科会(オープンテーブル)                  |
|-------|--------------------------------|
| 平和    | 政治、経済、(中国問題)                   |
| 開発    | 経済、政治、社会、(公害)、(人種偏見)、(都市化) etc |
| 異文化理解 | 文化、教育                          |

前者においても、平和、開発、異文化概念に対して重複している分科会があったが、その傾向は後者において、一層顕著になっている。例えば、第3世界テーブルをとって見た

場合、明らかに、平和と開発、異文化概念にかかわる諸問題を討議しているし、社会変動シンポをとって見た場合は、平和と開発概念に深くかかわっている。

表2-(2) 1973年(25回)～1982年(34回)

|     |                                                                                                                                                  |
|-----|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 概念  | 分科会(オープンテーブル)、討論領域、〈問題領域〉〔シンポジウム〕                                                                                                                |
| 平和  | 政治経済、国際問題、国際関係、〈核と平和〉、〔平和〕、政治参加、〔社会変動〕<br>〔民主主義〕、第三世界、〔第三世界〕、教育と社会、文化と伝統、〔異文化〕、<br>企業、〔アジア〕、人権、〔総合テーマ⑳㉑〕etc                                      |
| 開発  | 政治経済、国際関係、政治参加、〔民主主義〕〔社会変動〕、第三世界、〔第三世界〕、<br>環境・エネルギー・資源、社会における男女の役割、マイノリティー、社会福祉、<br>人権、科学と社会、企業、教育と社会、文化と伝統、異文化間コミュニケーション、<br>〔アジア〕、〔総合テーマ㉒〕etc |
| 異文化 | 文化と芸術、文化と伝統、〈コミュニケーションと文化〉、〔異文化〕(日本人)<br>異文化間コミュニケーション、宗教、第三世界、教育と社会、〔アジア〕、〔総合<br>テーマ㉒〕etc                                                       |

次の図は、表2-(1)、(2)をもとに平和、開発、異文化概念と分科会等の連関をわかりやすく図示したものである。

図1-(1) 1964年(16回)～1972年(24回)

P : 平和  
D : 開発  
I : 異文化理解

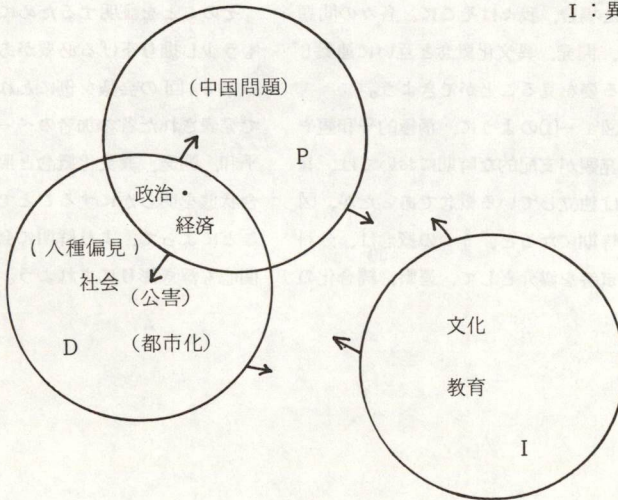
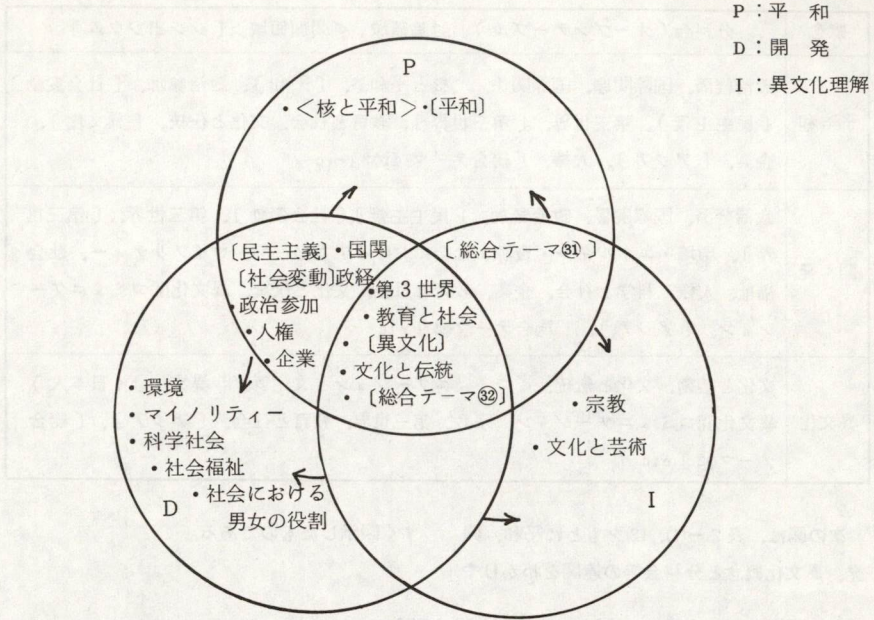




図1-(2) 1973年(25回)~1982年(34回)



P：平和  
D：開発  
I：異文化理解

この2つの図からも明らかなように、会議の活動内容を分科会、シンポ等の名称をもとに整理した場合、我々はそのに、各々の問題が平和、開発、異文化概念と互いに連繋し合っている姿を見ることができよう。

ただし図1-(1)のように、消極的平和観や消極的開発観が支配的な時期においては、異文化理解は独立している概念であったが、図1-(2)の時期になると、3つの概念は、分科会、シンポ等を媒介として、連繋、統合化の

方向へ進みつつある。この方向性は今後、益々強まっていくものと予想されるであろう。

そのことを証明するためには、図1-(2)をもう少し掘り下げる必要がある。即ち、今夏の第34回の会議を例にとれば、その分科会で発表された各参加者のペーパーの内容を、平和、開発、異文化概念と照合し、連繋、統合状態を明らかにすることである。そうすることによって、より鮮明に会議の取扱う問題関心も浮き彫りにされよう。(図2参照)

図2 第34回参加者のペーパーと平和、開発、異文化概念(1)

| ペーパーのタイトル                                                                         | 分科会名           | 平<br>和 | 開<br>発 | 異<br>文<br>化 |
|-----------------------------------------------------------------------------------|----------------|--------|--------|-------------|
| An Alternative Strategy for Peace                                                 | 国際関係           | P      |        |             |
| The Military Aid Sales and MNCs in U.S.-L.A. Relation                             | 国際関係           | P      | D      |             |
| Personal Involvement in the Third World and Human Rights                          | 第3世界           | P      | D      | I           |
| What is "Modernization" ?                                                         | 第3世界           | P      | D      |             |
| The Japanese Defense Prouvement System                                            | 企業             | P      | D      |             |
| The Financial World                                                               | 企業             |        | D      |             |
| Energy Today and Its Perspective with Due Regard to Nuclear energy                | エネルギー<br>資源・環境 | P      | D      |             |
| The North and South - Different Perspective on Energy                             | エネルギー<br>資源・環境 |        | D      | I           |
| An Economic Observation of the Gap between Men & Women                            | 男女の役割          |        | D      |             |
| Circumstances Against the Human Rights                                            | 人権             | P      | D      |             |
| Appropriate Technology                                                            | 科学技術と<br>社 会   | P      | D      |             |
| Technology Transfer between the U.S & Japan                                       | 科学技術と<br>社 会   |        | D      |             |
| What is the Real Mutual Understanding ?                                           | 文化と伝統          | P      |        | I           |
| Possibility of Intercultural Communication-A Case Study:<br>Autinuclear Movement. | 文化と伝統          | P      | D      | I           |
| Japanese Garden                                                                   | 文化と伝統          |        |        | I           |
| Peace Education Now                                                               | 教育と社会          | P      | D      | I           |
| Education for Racial Identity Formation                                           | 教育と社会          | P      | D      | I           |
| Political Socialization and Political Education                                   | 教育と社会          | P      | D      | I           |
| The Japanese Student in the U.S: Past & Present                                   | 教育と社会          |        | D      | I           |

第34回会議では、11種の分科会が企画され87本のペーパーが提出された。この図2において筆者が考察の対象とした分科会は10種、並びにペーパーは、19本で、そのごく一部であったが、筆者の意図する、ペーパーの内容と平和、開発、異文化概念との連繫、統合状態の傾向を把握するには十分であろう。

#### IV 結びにかえて：日米学生会議における国際教育の連繫と統合

日米学生会議は国際教育機関であるという見方をすると、それが二重の構造になっていることに気付くであろう。それは一つには、国境、民族、文化の壁を越えての、高等教育における国際交流プログラムという側面であり、また一つには、国際社会に存在する多様

な諸問題に関して、学生自身が学習する場という側面である。その文脈において、会議を国際教育機関たらしめる要因に関して不安を感じないわけではない。確かに、実際の会議においては、日米学生の互いのコミュニケーションギャップにより様々な誤解やあせりも生じたし、過密なスケジュールによる疲労のため、分科会討論やシンポジウムにも集中を欠いた場面が幾度もあった。よって、この小論において筆者が試みてきたことは、「絵に書いたモチである。」という批判も生じてこよう。

しかし、意図的であれ、無意図的であれ、参加者が学習の対象としている諸問題は、これまでの考察において明らかなように、互いに連繋しあっているし、その統合への方向性は、今後一層、顕著になろう。この会議においては、従来ありがちであった。平和価値偏重や、異文化理解偏重という傾向は影を潜めている。分科会では国際社会において人類が直面している諸問題のほとんどが配置され、平和、開発、異文化理解という3つの概念の学習と、それらの価値を実現するための学習が、学生自らのイニシアチブのもとで展開されているのである。

故に、現在、あらゆる国際教育の現場において模索されている国際教育の連繋、統合化は、この会議の中で、実験、検証されていると言っても過言ではないであろう。要するにこの会議においては、国際教育の4つの柱の中でも、平和、開発、異文化概念と現実の世界を結びつける、平和教育、開発教育、異文化間教育が連繋、統合的に行なわれていると理解できるのである。そして、最終的に、それらは、人権、基本的自由という概念と現実の世界を結びつける人権教育へ収斂していく

のである。今回の会議の総合テーマであった。「人間の尊厳を求めて - 相互理解と全地球的協力 -」も、この会議が到達した一応の終点であり、かつこれからの会議の出発点でもある。すでに次の新たな実験が、実行委員の手によって始められているのだ。

- (1) 例えば、中等教育における A F S、Y F U、ロータリークラブ等の留学プログラム。高等教育における各種留学プログラムや国際経済商学学生協会 (アイセック)、日本国際学生協会 ( I S A )、日本国際医学生連盟 ( J I M S A ) 等の国際交流プログラムと枚挙にいとまがない。
- (2) 第18回 ユネスコ総会『国際理解、国際協力、国際平和のための教育、並びに人権、基本的自由についての教育に関する勧告』1974年
- (3) 従来の国際理解教育が主権国家間の関係を前提とし、国家主権に収斂されつつ他国、他国民への理解をめざす「国際教育であったことを反省し、複合文化国家間というに及ばず、異なる民族・文化の相互理解を促進することに新たな展望をみようとするもので、いわゆる、異なる「文化間の教育」を意味する。オーストラリア、ユネスコ国内委員会『アジア・太平洋地域文化相互理解教育セミナー』1974年8月を参照。
- (4) 石附実「国際教育と比較教育学」沖原豊編。『比較教育学』有信堂、1981年 177頁
- (5) 武者小路公秀「国際意識教育と平和教育」『ソフィア』22巻、2、3号 1973年 111頁

- (6) 入手可能な報告書に基づく整理のために、  
残念ながら、第1回(1934年)から第  
15回(1954年)の会議に関しては、  
調査の対象にできなかった。
- (7) 英文で書かれた会議の Information  
BookやBulletinを参考にした。これらは  
すべて、日米学生会議事務局にて入手可  
能である。
- (8) 金谷敏郎、田中治彦『人類共存のために  
— 開発教育ハンドブック —』中央青  
少年団体連絡協議会、1981年、6～  
11頁
- (9) 同じく、英文で書かれた会議の Bulletin  
日本語による報告書・エッセイ集、会議  
実施要項を参考にした。
- (10) この判断は、分科会での討論の内容を基  
準とした結果であり、会議全体からみれば、  
日米学生間の相互理解が平和に通ず  
ると考えられていたことは言うまでもな  
いであろう。
- (11) 日米学生会議実行委員会が編集した J A  
S C Library より。アメリカ側のペーパ  
ーに関しては、J A S C, Inc., の Ka-  
nayama 氏の協力を得た。

## 平 和 宣 言

The present situation in the world holds both peril and promise. The continuing development and production of hyper-destructive weapons casts a growing shadow upon humanity. Sporadic gunfire, deadly in itself, now threatens to trigger the annihilation of mankind as well as the complete devastation of the environment. At the same time, millions of voices, throughout the world, are crying out for peace. As a small part of this movement, we, the delegates of the 34th Japan-America Student Conference, would like to share with the world the consensus gained through our experiences.

The balance of terror holds no promise for the abolition of war. To secure peace we must abolish the causes and means of war. We must attain mutual understanding and establish basic human rights for all people.

Mutual trust and understanding comes from an exchange of ideas and opinions on a personal level. The Japan-America Student Conference was founded in 1934 for this purpose. Today, we believe that the same principle can be applied on a world scale with the same success that we have achieved.

Under this year's theme of human integrity, we have studied the tragedy of war and significance of peace; realized our responsibility as students; and overcome the obstacles of language, race and culture. If the world had conquered these barriers before World War II, the staggering loss of life in Hiroshima, Nagasaki and throughout the world might never have happened. Such man-made tragedies symbolize the importance of mutual trust and understanding as a means to bring world peace. In remembering Hiroshima and Nagasaki, we will strive to maintain and strengthen our beliefs as well as take action on the basis of our convictions.

August 5th 1982

The 34th Japan- America Student Conference

## 第34回日米学生会議：主催、後援、賛助団体

主 催 財団法人 国際教育振興会

後 援 外 務 省  
国際教育交換協議会  
日米文化センター

特別賛助 (財)三菱銀行国際財団

### 賛助団体・賛助者

|             |        |            |
|-------------|--------|------------|
| 味の素         | 新日本製鉄  | 東京電力       |
| (財)石橋財団     | 住友銀行   | 東洋工業       |
| 市川比呂也       | 住友金属工業 | トヨタ自動車工業   |
| 伊藤 萬        | 住友商事   | 西日本教育アカデミー |
| エッソスタンダード石油 | 住友信託銀行 | 日産自動車      |
| 大阪瓦斯        | 住友電気工業 | 日商岩井       |
| 大間知隆二郎      | そごう    | 日清食品       |
| 花王石鹼        | ソニー    | 日新製鋼       |
| 鹿島平和研究所     | 第一勸業銀行 | 日本アイ・ビー・エム |
| 川崎製鉄        | 第一工業製薬 | 日本医師会      |
| 関西O.B.会     | ダイエー   | 日本光学工業     |
| 関西電力        | 大成建設   | 日本鋼管       |
| キッコーマン      | ダイハツ工業 | 日本興業銀行     |
| 九州電力        | 大丸     | 日本債券信用銀行   |
| 京都中央信用金庫    | 太陽神戸銀行 | 日本信販       |
| 麒麟麦酒        | 大和銀行   | 日本電機       |
| ケミカルバンク     | 大和證券   | 日本ブリタニカ    |
| 神戸製鋼所       | 高島屋    | 日本郵船       |
| 小西六写真工業     | 武田薬品工業 | 野村證券       |
| 三共          | 竹中工務店  | 阪急百貨店      |
| サントリー       | 立石電機   | 日立製作所      |
| 三洋証券        | 電通     | 日立造船       |
| 三洋電機        | 東京瓦斯   | 富士銀行       |
| 三和銀行        | 東京銀行   | 藤沢薬品工業     |
| 塩野義製薬       | 東京芝浦電気 | 富士重工業      |
|             |        | プラトン学園     |

|        |         |             |
|--------|---------|-------------|
| 本田技研工業 | 三菱銀行    | モービル石油      |
| 松下電器産業 | 三菱地所    | 持田製薬        |
| 丸紅     | 三菱自動車工業 | 山武ハネウエル     |
| 三島食品   | 三菱重工業   | 雪印乳業        |
| 三井銀行   | 三菱商事    | ユニコン・ジャパン   |
| 三井信託銀行 | 三菱信託銀行  | ユニチカ        |
| 三井物産   | 三菱石油    | 吉田工業        |
| 三井不動産  | 三菱電機    | (財)吉田国際教育基金 |
| 三越     | ミノルタカメラ | ワコー         |
| 三菱化成工業 | 官沢喜一    |             |

( 9月29日現在 五十音順 )

日米学生会議は、「学生の、学生による、学生のための会議」をモットーとして、学生の手により自主的に運営されてきましたが、もとより学生の力だけで成功してきたわけはありません。学生の間のみでなく、社会的にも会議の存在意義が認められてきたこと、そしてこの学生会議に賛同して下さり、経済的援助を与えて下さった多くの団体・個人の存在が、今日の学生会議を成り立たせています。すなわち主催の国際教育振興会をはじめ、各後援団体・賛助団体・賛助者です。より多くの学生に、より軽い負担で会議に参加するチャンスを、学生会議の主旨に賛同して与えて下さった事に対し、上記各位にこの場を借りて深く感謝致します。

## 第35回日米学生会議のお知らせ

第35回日米学生会議は、1983年夏の約1ヶ月間、日本で開催されます。

この会議は、「Promoting Peace through Mutual Understanding」という総合テーマの下に日米約90名の学生が、分科会討論、シンポジウム、フォーラム、日常生活等を通じて卒直に意見を交換し、お互いの文化・社会を考えようとするものです。このような経験に基づいた相互理解は、世界平和に向けての大きな一歩となり、将来の日米関係・国際協力に貢献することと思います。

会議参加者は、下記の分科会のいずれか一つに属し、自分の研究テーマを定め、討論・野外研修に参加します。分科会は、次の11を設置する予定です。

(仮称)

文化と芸術、教育と社会、少数派問題、情報化社会、男と女、ライフサイエンス、エネルギー・資源・環境、科学技術と社会、国際政治、国際経済、企業問題

また、現代社会が抱える問題を、様々な分野を専攻する学生で、多面的に扱えようとする試みにシンポジウムとフォーラムがあります。第35回会議では、シンポジウムとして「平和と安全保障」について討論し、また「社会に於ける男女の役割」「宗教」についてのフォーラムを持つ予定です。

私達の社会のかかえる数々の問題を、アメリカと日本という二つの立場から考えてみませんか。積極的な参加によって、必ずや新しい発見があるでしょう。

創意と問題意識、そして熱意にあふれた方々の参加をお待ちしております。

第35回実行委員会

第35回会議の実施要領は、1983年1月に発行の予定です。参加御希望の方、会議に関する御質問のある方は、下記まで御連絡下さい。

〒160 東京都新宿区四谷1-21 財団法人 国際教育振興会内

日米学生会議事務局 電話(03)359-9621(代)



第 3 4 回 日 米 学 生 会 議

— 報 告 ・ エ ッ セ イ 集 —

1 9 8 3 年 1 月 2 0 日 発 行

編 集 者      第 3 5 回 日 米 学 生 会 議 実 行 委 員 会

発      行      〒 1 6 0      東 京 都 新 宿 区 四 谷 1 - 2 1  
財 団 法 人   国 際 教 育 振 興 会 内  
日 米 学 生 会 議 事 務 局

T E L   0 3 - 3 5 9 - 9 6 2 1 (代)

印      刷      協 実 業 公 報 社